

---

Illel another...-the encounter of TWO WORLD

逆逆三里 & X ナンバー

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Parallel another...the encounter of TWO WORLD

### 【Nコード】

N8971H

### 【作者名】

逆逆三里&Xナンバー

### 【あらすじ】

目を開けると、俺は死んでいた！？二つの世界が融合する時、新たな物語がツクラレル

## 第0話：The Beginning of ALL（前書き）

これは、逆逆三里（W0460D）とずっとXナンバー（W5568E）が合宿のテンションで衝動書きしてしまった小説です。

二人三脚どころか六脚ぐらいの勢いで頑張りたいと思っています。

## 第0話：The Beginning of ALL

目が覚めたら、そこは

「どこだ？ 此处」

見知らぬ部屋……

俺、高山恭介はある小部屋の中にいた。

紺の壁紙、紺のテーブル、紺の椅子。しかし所々置いてある灰皿や花瓶等の小物は漆器のように艶のある赤で、そのコントラストが今の状況と相まって異様だった。

しかし、この空間にはまったく見覚えが無い。それどころか、どうやって連れてこられたかすらも分からない。

気が付いたらこの部屋の真ん中に立っていた。

頬をつねってみる。

ぎゅーっ

「いだだだだだだっ！」

どうやら夢ではないようだ。俺は赤くなっただっぺたを触りつつ、自分の銃を確かめる。どちらも盗られてはいないようだ。それぞれ抜いて初弾を装填する。

いわゆる「拉致」をしたにも関わらず、相手はこちらの武器に手を付けていない。プレイヤーズもこんなマヌケな真似はしないだろう。「意味が分からない……」

両手に握っているルシフェルと十六夜のグリップが軋む。

ガチャッ！

!

ドアノブが捻られ、扉がゆっくりと開く。

「誰だつ！」

俺はすぐに2丁の銃を構え、ドアの前に照準を合わせる。

「ホストに向かって『誰だ』は無いだろ」

ドアが開くと、そこには一人のスーツを着た男、いや青年が立つていた。大体歳は同じほどこか。背はやや高めだが、威圧感はまったく無い。だがここで銃を降ろすような真似も危険だ。

青年は部屋に歩いて入ってくると、両手を広げて部屋を見渡す。

「美しい部屋だろ？」

「まあ、清潔ではあるけど」

「この紺色は、ブルマを表している。そしてこの赤も、同じくブルマを」

「うあああああつ！！」

バンッバンッバンッバンッバンッバンッバンッバンッ  
バンッバンッバンッバンッバンッバンッバンッバンッ

俺は片手で握った拳銃の9mmルガーを全弾男に向けて撃ち尽くした。何だろう、今まで戦ったどんな敵よりも、コイツからは濃い、純粋な恐怖しか感じない。そんなに実戦経験があるわけじゃないけど。

「きつ、急に何言い出すんだこの変態！」

こいつは、こんなところじゃなきゃ、お近づきになりたくない種類の人間だ。

「さて、君はここに来る前までの記憶はあるかな？」

んな事を言い出すスーツの青年。そういえば、何してたんだっか。  
「たしか ラノベの発売日で雨の中、本屋に駆け込んで、道路を渡ったところで……あれ？」

ここまでしか思い出せない。まるで脳が思い出すのを拒否しているかのように。

「そのあとのことさ。ヒントをやるう。自動車のライト」

「ライト？」

脳の細胞をフル稼働させる。……そして、思い出した。いや、思い出してしまった。

「あの痛車っ！」

「思い出したようだな」

そう、あの雨の中、初版の本を片手に道路を渡る俺の横から、とある学校の音楽活動部がカスタネットでうんたんしたり、菓子食ったり、合宿で海に遊びに行ったりする漫画のプリントが至る所にされた車が突っ込んできたことを。ってことは、

「じゃ、じゃあもしかして……俺は痛車に轢かれて死んだっていうのか？ うそだろ？」

嫌だ、認めたくない！ そんな、そんな痛い死に方なんて！ まだ読みたい本とかいっぱいあったのに！ 言いたい事だっっていっぱい、やりたい事だってたくさんあったのに！

「いや、そんなに落ち込まれると、逆にやりにくいんだが」

「……ゴメン、立ち直れそうにないわ」

スーツの青年が仕切りなおすように咳払いをする。まだ何かあるらしい。

「そう悲観することはない。君はあの時の衝撃で、体から魂が抜け出てしまった状態なんだ。つまり」

「身体に戻る可能性があるってことか？」

「ああ」

どうやら俺はまだ死んだわけではないらしい。良かった。

「んで、どこにあるんだ？ 俺の身体は！？」

スーツの青年は顎に手を当てて考え込む。一体どこにあるんだ？

こんなブルマのことしか考えてない変態の部屋からは一刻も早く出たかった。

「分からないんだ」

返ってきた答えに俺は愕然とする。

「んだそりゃ！？ テメエ、知ってんじゃねーのかよ！」

「どうしたんだい、何か、良いことでもあったのかい？」

「なんで忍野！？」

さすが、ラノベばかり読んでないな、とスーツの青年は呟いた。

「確かに君の体の在り処は分からない。しかし高山恭介。君と同じ境遇の魂がこの世界を彷徨<sup>さまよ</sup>っているはずだ」

「何だその設定。お前、逆逆<sup>ギャグ</sup>に頼んで物語から消すぞ」

正直、そんな話に付き合っている暇は無い。家には腹をすかせた涼<sup>すず</sup>とアンプが待っているハズだ。涼に料理は作れないし、作ったとしてもあんな暗黒物質<sup>ダークマター</sup>をアンプに食べさせるわけにはいかない。しかし、その言葉もスーツの青年には効かないようだった。

「残念だが、逆逆氏の権力はここには通じない。この世界は違う勢力からも介入を受けているのだから」

「違う勢力？」

「その名もXナンバー勢力」

「えつくすナンバー？」

「まあ、いずれ分かるだろう。とにかく、君と同じ境遇の魂を見つけることだ。それと、体を見つけるのも急いだ方がいいかもな。中身のない、空っぽの器を狙う魂も少なくはないのだから」

「おい！ どういうことか説明しろよ！ おい！」

青年の体が陽炎のように揺らいで消える。何でこいつは最初にドアから入ってきたんだろうか。

「俺と同じ境遇の魂を見つける、か」

今は、奴の言うとおりにするしかなさそうだ。とっとと帰って買った本読みたいし。

一方その頃。

高山恭介が目覚めた部屋と全く同じレイアウトの部屋にて。

「ん、どこだここは」

俺、つまりアルバート＝リヨウは辺りを見渡して呟いた。こんな部屋に見覚えはないし、来たという記憶もない。テロリストにでも拉致されたのだろうか？ 日頃からそんな隙を見せないで暮らすようにはしているのだが、どうやらボロが出たらしい。その証拠がこの異様な状況だ。まったく、鈍ったか？ エミリオ辺りに知られたら何を言われるか分かったものではない。そんなことを考えながら背中のバックパックやホルスターを確認する。どうやら装備品に手は付けられていないようだ。手足も縛られていない。      テロリストではないのか？

「ギャングのガキどもか？ それにしたって拳銃の1挺ぐらい持つていくよな」

俺を拉致した人間は何をしようとしている？ クソッ、考えが読めない。

「とりあえず、襲撃しに来るとしたらドアか」

ドアノブに手榴弾をワイヤートラップとして設置。迂闊に外にできれば、どんなトラップがあるか分からない。不用意に動くのは危険だし、しばらくして、ドアノブがまわされた。誰が入って来る！

「迂闊に爆発させないほうが良い。この部屋に風穴が開けば君の魂は異次元にあつという間に飛ばされてしまうだろう」

扉の向こうの声が俺に警告する。どうやら若い男のようだ。

「悪いが、SFは読んでいなかったもんでな。異次元とか魂とかそんな話に興味はない。お前は何者だ。どうやって俺をここに連れてきた。答えろ」

俺は愛銃SG552を構えて尋問する。

「俺を入れたら答えてやろう。とりあえずその物騒なモノを外せ」安全ピンを手榴弾に差し込み、ワイヤーを外す。ライフルは構えたままだ。

「良いぞ、入れ。両手を高く上げてゆっくりとな」



この男、トラップの存在を予見していたのか？壁越しだ、あり得ない……

ドアからは一人のスーツを着た男が入ってくる。脇下に武器は確認できない。腰、足首も同様だ。

「ホストの体をジロジロ見るなんて、どういいう見だ？」

「こんな胡散臭い場所に上着を着て現れるんだ、この程度のチエックは最低限だ」

「ほう、なるほどなるほど。あの少年と違ってすぐには警戒を解かないか……さて」

男は両手を広げる。

「美しい色で塗装してあるだろう？この部屋は私の空間なのでね、自分好みに模様替えしているんだ。この紺は、スクール水着の紺。そして赤は競泳用の水着を」

「チツ」

シュカッ！ドスツ！

右手でライフルを支えつつ、左手でスローイングダガーを指で挟んで投擲する。細い両刃のナイフは太腿に撃ち込まれて、相手の動きを止める

筈だった。

「ハハハ、流石はあのXナンバーと付き合っているだけあって、ツッコミは速くて鋭いな。だが言っただろう」

ナイフの柄を男は掴んで、そのまま引き抜く。

その刃にも、男の体にも、血は一滴も付いていなかった。

「この部屋は『私の空間』だ」

男はナイフを山なりの軌道で投げて返す。俺はそれをキャッチすると、ベルトのシース鞘に納める。

「……ほう、立派な手品をお持ちだな。で、こんな所まで俺を呼

びつけた理由は何だ？ 情報か？」

「生憎、君の事を知る必要は無い。知っているからな。それより、君がここに来るまでの記憶はあるかな？」

この部屋に来るまでの記憶……何も思い出せない。雨降る午後、ニューヨーク警察本部にいつものように射撃練習場を借り、装備を車で積んで出かける所だった。車に乗り込もうとして装備を担いだ所までは覚えているのだが……

「ヒントをやるう。自動車のライト」

「ライト？」

そして思い出す。ああっ、クソっ！

「あの時かつ！」

路肩に出していた車に乗り込む時に、真正面からやってきたあのケバケバしい、イラストのペイントされた車。たしかレイが違法DVDをせっせと焼いていた、学生がバンド活動をしてステージの上でコケて下着を露呈するジャパニメーションの柄だった。その車はスピードを落とす気配無く、それどころか加速して俺の方に……

「俺は、あの車に轢かれて死んだって事か？」

畜生  
Damn it！なんて事だっ！生憎昔から銃を握って危険な任務に就いていたお陰で、こんな歳で他の兵士よりも多くの死線をくぐり抜けてきた俺だ。当然最期は銃弾で、戦場に倒れるものだと思うていた。

だがそれが？ NYのど真ん中で？ クレイジーな車に轢かれて死ぬだっ？ ハッ、笑えないジョークだっ！

だが悪態をつこうと口を開きかけた時、俺はとんでもないことに気が付いてしまった……

「うあああああああっ！」

俺は頭を抱えて絶叫する。そうだ、なんたる失態だっ！

「せっかく射撃場のレンタル料金を払ったのに、行けずじまいじゃないかつー！」

「意外と、ケチなんだな」

「ケチ？ ケチだと？ いいや違う。これは経営者としての判断だっ！」

「あの警察署長、人は良さそうだが貰える代金はキツチリと貰っていくだろう。クソっ、どうせなら半年契約でなく1ヶ月、せめて俺の名前ではなく部隊の名前を偽名でも良いから登録しておくんだっ  
たっ！」

スポンサーのクニモトにもアーチボルト家にも全く申し訳が立たない。任務に全く不必要な力ネが外部へ渡ってしまったじゃないか！  
そうだ、そもそも力ネを統括しておいた俺が死んでいるんだぞ。残りの人間に部隊の資金を管理し、適宜運用させる事が出来るのか？  
否だ。今までの株、土地、国債を含む資産運用を行ってきた際の資料は俺が所持していた。保管場所の暗証番号を知っているのは、俺一人じゃないか！」

畜生、少し泣けてきた。ここまで理不尽な目に遭うのは久々だ。

さて、とスーツ男が仕切り直すように言った。

「まあ落ち着け、その金が無駄になることはないかもしれない」

「どういうことだ？」

「君はあの時の衝撃で、体から魂が抜け出てしまった状態なんだ。簡単に言ってしまうえば、仮死状態に近い」

さつきからこいつは何を言っているんだ。

「高山恭介はすんなり理解したんだがな。彼はライトノベルに長く触れていて軽く中二病になっていたからか。つまり、君の肉体はまだ死んでいない」

タカヤマキヨウスケという人物がどんな人間なのかは知らんが、俺と同じような境遇であることは推測できた。それにしても、

「死んでいない、だと」

「ああ、そうとも。君だっここが天国 神が創った楽園とは思っていないんだろう？」

「当たり前だ。こんなふざけた部屋が楽園って言つのなら地獄に堕ちたほうがマシだ」

そもそも、天国に行くには俺は命を奪いすぎたが。

「あの世界に戻りたいのなら、君と同じ境遇の魂を見つけることだ。それと、体を見つけるのも急いだ方がいいかもな。中身のない、空っぽの器を狙う魂も少なくはないのだから」

どうやら目的ははつきりしたようだ。タカヤマキョウスケを探せ、という事らしい。

「聞いておくが、Xナンバーは関係しているのか？」

「ああ。君をここに連れてくるのはXナンバーの協力無しでできなかった」

男が陽炎のように揺らいで消える。アレは本当に人間だったのだろうか。

「Xナンバー……殺す」

拳銃のスライドを引いて初弾を装填し、殺意も新たに俺は部屋から出た。

## 第1話：Fightin' Meetin' Fightin'

「うおっ、まぶしっ！」

ドアを開けると目が眩み、突然何百ものスポットライトに照らされたような気がした。

だが実際には、その空間が真っ白に塗られていたからだと気づく。暗い色の部屋にいたお陰で、瞳孔が開いていたようだ。

次第に視界が戻ってくる。

「さっきの部屋に引き続き、何なんだよここ」

真っ白の壁紙に囲まれた真っ白の場所。そこには白く塗装した物々しい様々なバリケードが、一定の間隔をおいて配置されている。

「戦車でも止めるのか？」

部屋は見る限り大きな長方形をしている。天井も床も白一色なので遠近感が狂う。しかしちょうど学校の体育館を倍に引き延ばしたような広さだ。反対側の辺は障害物に阻まれて見えない。しかし建物のほぼ対称なデザインから、恐らく今俺が出てきたような扉があるのだろう。

「とにかく、先に進まないとな」

ルシフェルの弾倉を交換し、二丁の銃を構えて一歩ずつ、対岸へと進んでいく。とにかく早くここを出て、「同じ境遇の魂」を探さないと……

「……また珍妙な場所だな」

俺はドアを注意深く開け、ライフルを構えつつ周囲安全を確認すると、ポツリとそう呟いた。

白一色が紺色に慣れた目に痛い。

障害物の陰に身を潜めると、チャージングハンドルを少し引いて初弾が装填されている事を確認する。

「タカヤマキョウスケ。名前からして日本人。ヒントはそれだけか……」

溜息をつく、と、ごろごろと転がっている障害物に目を向ける。タカヤマキョウスケを探す手がかりは、百歩譲ってもこのバリケードだらけの部屋には無いだろう。

「とにかく、この部屋を出ない事には事態は進展しない、か」

物陰から素早く顔を出し、次のバリケードに目標を定めて音を立てずに走る。到達、クリア。未知の空間では迂闊に移動出来ないが、ゴツイバリケードのお陰で少しは安全を確保しやすくなる。待ち伏せする敵にとっても同じ事だが。

とりあえずこのただっ広い空間の外に出なければ話にならない。先の事は後で考えよう。

手に握った二丁の拳銃の重みを感じつつ前へ歩く。何が出てくるか分からない。さっきの変態ぐらいならまだ良いが（ちっとも良くないけど）、こちらの命に危険が及ぶような状況も想定できる。全神経を研ぎ澄まし、慎重に慎重を重ねて歩く。

その時、空気が動いた。

少なくとも俺はそう感じた。武器を構えなおして気配を探る……何もない。

（気のせいかな？）

フッ

（やっぱり、何か動いている！）

物陰に屈み、上半身を僅かに出して照準を目線に合わせる。十六夜

とルシフェルのハンマーを起こし、いつでも射撃出来る体制へ移った。

汗でグリップが滑る。

自分の呼吸音さえ煩わしい。

俺が四度呼吸した時……

何かが動いた。

「うわっ！」

唐突に迅速な動きで飛び出したソレが何かを確認する暇も無く、両手に握った拳銃の引き金を反射的に引く。右、左、右、左。

爆ぜるような音と鋭い反動が手首に伝わる。

しかし、目標が急に低く姿勢を変えて隣のバリケードに移動したので、弾丸は鉄壁に当たって火花を散らした。

「外した！？」

物陰から上半身を露出させて、ソレが？？おそらく人が反撃を仕掛けてきた。ライフルによる3点射で攻撃しているらしく、小気味良いカカカン！という音がする。どうやらこちらが隠れている遮蔽物に当たっているようだ。

「先制攻撃を当てられなかったのは、痛かったかな」

ひとまず呼吸を落ち着かせる。ハンドガンの射程は短いし、俺の戦い方も中近距離の接近戦を想定している。こちらから圧倒的火力で押し込む戦い方をすれば、チャンスを作れるかもしれない。

射撃音が止んだ。ふと隠れている遮蔽物を見ると、鉄板を銃弾が貫通して上部が穴だらけになっている。次のマガジンを装填されれば、バリケードごと蜂の巣にされるだろう。

「いまのうちに、いっちょやりますか」

両手の拳銃をフルオートにセットして、飛び出すと同時に小刻みに連射を加える。猛ダッシュしながら弾幕を張り、相手が身を乗り出す隙を与えない。目標バリケードまで、あと3メートル、2メートル……

障害物をクルリと回り込んで、残りの弾丸を障害物の背後に全弾吐き出す。フルオートの激しい反動が両手を震わせ、すぐにスライドが開いて弾切れを知らせる。完全に人間を沈黙させるには、十分な弾数を撃った。

（やったか？）

しかし、目標は沈黙していなかった。それどころか、いなかった（……）。

どこに行ったか、など考える暇も無く、俺は地面に押し倒され、ナイフの刃を喉元に押しつけられていた。受身を取る暇も無かった。

「Freeze, Cool Hollywood star.（動くなよ、イカしたハリウッドスター）」

金属の冷たさをここまで不快に感じられるなんて、想像したことも無かった。

フリーズ、ということは「動くな」ってことか。まさか、実際にこの言葉を聞くことになるとは。顔を見る限り男、歳は20代前くらい。日系か？ どこか影を持ったその眼は、人殺しの眼をしていた。これほどの相手は、穂波以上かもしれない。刃物の腕前は涼と同程度。にしても、

「は、ハリウッド、スター？」

恐怖で渴いた口で俺がそう言うと、男は眉をひそめた。

「お前が、タカヤマキョウスケか？」

今度は流暢な日本語だった。どうやらこの男は俺の事を探していたようだ。

「そうだけど……アンタ誰だ。それと、このナイフ退<sup>ど</sup>けてほしいんだけど」

聞いてみた。打ち付けた背中が痛い。



「この世界について知っていることを全て吐け」

「聞いてちやいなかった。とりあえず、あの変態に聞いたことを全て話す。」

「んで、同じ境遇の魂を探してるんだけどさ……」

男はそうか、とだけ呟くと俺の喉元からナイフを外した。起き上がってもいいみたいだ。

「さっきの質問に答えてくれ。アンタ誰だ」

ナイフを腰のホルスターにしまう男に尋ねる。改めて見ると、男の格好は異常だった。少なくとも、普通の人間がする服装ではない。

黒の戦闘服に、ポーチをやたらくつつけたボディーアーマー。背中にはハンドガードと銃身の短い突撃銃がスリングで吊られていた。

「俺はアルバート・リヨウ。そうだな、話を聞く限りだと、お前と同じ境遇の魂だ」

「そうなのか？」

助かった、と思った。こんだけ強い奴と組めれば戦力としては申し分ない。

「おい、タカヤマキョウスケ。お前はどやって死んだ？」

「恭介でいいよ。本屋からの帰り道、痛車に轢かれたんだ」

アルバートは苦笑いを浮かべた。初めて表情を変えたな。

「そこまで同じか」

「じゃあお前も？」

「我ながら間抜けな死に方だ。ふざけてやがる」

「とりあえず、アンタは仲間ってことでいいんだな？」

「ああ、よろしく頼む。それと、俺の事はアルバートと呼んでくれ」

「分かったよ。よろしくな、アルバート。あと、聞きたいことがあるんだけど……」

「何だ？」

「その……アルバートは何の仕事してるんだ？」

「対テロ特殊部隊みたいなもんをアメリカ力でな」  
道理で英語だったわけだ。

「俺からしたら、そっちの方がハリウッドスターに見えるけどね」

「そうか？ 2挺撃ちほどではないと思うが」

「まあ、そうだけど」

「こっちも質問してもいいか？」

「いいよ、何？」

「お前の職業は？」

「高校1年生」

アルバートはかなり驚いたらしい。そりゃそうか。

「いつから日本はそんな物騒になったんだ？」

「まあ、色々ありまして……」

そうだよなあ、普通じゃないよなあ。普通の高校生は銃で的確に急所を狙い撃つ方法とか考えてないよなあ。

「何も無い人間なんていない。いいんじゃないか？ 少なくともそのおかげで俺は助かるが。それで護れる人がいるのなら、銃を握ることに意味はあると思う。何もしないよりはな」

意外だった。そんなことを言う人間じゃないと思ったんだけど。

「まあ、銃を握っても救えない人だっているが」

どうやらアルバートも、昔色々あったようだ。

「そんなわけで、よろしくな、相棒」

アルバートが手を差し伸べる。俺はそれを握り返した。

「なんとしても、元に戻ろう。アルバート」

「ああ、俺にはやらなきゃいけない事がある」

そう言ったアルバートの眼は、殺意に溢れていた。まるで、殺さなくちゃいけない仇がいるような。

「俺も、腹をすかせた居候2人が帰りを待ってる。買った本もまだ読んでないし」

待っているはずの居候2人によって、その言葉が後に裏切られることを俺はまだ知らなかった。

出口はすぐに見つかった。部屋の横に鉄の大きな扉があったのだ。

「これ、入ったときには無かったよな？」

「死者同士で喋ってるくせに、今更何を驚く」

早くもこの訳が分からない世界に順応している事に自分でも驚く。

「まずはここを脱出する事が先決だ。外に出てみよう」

恭介が扉に手を掛けようとする。

「いや、俺から行く。何かあれば援護してくれ」

俺は彼を退かせて、自分がドアのすぐ脇に立つ。

後ろへ、と左手でサインを送ると、彼は素直に俺の後ろに立つ。

（5秒後に突入、援護を）

もう一度ハンドサインを出す。

「えっと、アルバート？ それ……何やってんの？」

「なんだ、分かんずに後ろに下がってたのか……」

一通り、ハンドサインの意味を大ざっぱに教える。いざ銃撃戦になった時におけるハンドサインの有効性も説いておく。

「一度片方の拳銃をホルスターに納めてでも、アクションの前には必ずサインを出せ。あらかじめ予め仲間がする事が分かっていた方が、味方は的確な行動ができるんだ。敵に音が聞かれる事も無いし、声が聞こえないほどの銃声が鳴っていても意思疎通が出来る」

恭介は納得したみたいだ。一応片手で10まで数を表す方法と、突入、援護、停止のサインだけを教える。

「それが出来るだけで随分違うぞ。お前に戦う仲間がいるかは知らないが、きつと戦闘中のコミュニケーションが円滑になるはずだ」

「ああ、ありがとう。早速生きて帰ったら仲間に教えるよ」

「生きて帰ったら、か。文字通りの意味だな」

二人で顔を見合わせて笑う。全く、こんな状況で笑うなんて事が出来るなんて、つくづく人間の適応能力の高さ、というか俺達の神経の図太さを思い知らされる。

（2秒後に突入。5秒後に援護を）

左手でサインを出した後、ライフルを構えながら重い扉をゆっくり開けていく。

金属の軋む音が不気味だ。

人が通れるだけの隙間を作ると、ライフルから先に滑り込む。部屋の隅から隅までを索敵し、敵がいれば引き金を引く。ただそれだけだった……

だが、そんな動作は全く必要無かった。

5秒してからアルバートの抜けた扉から抜け出す。それと同時に銃口を前に突き出すように構えた。

「……今度は、部屋じゃないのか」

屋内戦闘を想像していたので拍子抜けしたけれど、今度は

街だった。

ただ妙だったのは、そこが真っ暗だった事。ふつう都会って、「眠らない街」とかいつて夜でも電灯やネオンサインが光ってる物だろ？それが全く無いんだ。

暗い都市の中で、街灯の蒼い蛍光灯だけが街を照らしている。

だんだん目が慣れてきて、少し離れた所のアルバートを見つける事が出来た。

「アルバート、ここは……何処なんだ？」

答えは当然帰ってこないと思ったが

「東京だ」

即答だった。彼は看板を指さす。確かにそこには「新宿駅」と書いてある。どうやら駅の真ん前にいるらしい。

「だが、俺達の知っている東京では無いらしいな。生物の気配一つすらない」

アルバートがライフルを構えるのを見て、あわてて自分の武器を準備する。

「気をつける……何が来るか分からんからな」

「わ、分かった」

先行するアルバートの背中に着いて行きながら、不気味な街を見回す。人どころか、猫1匹見えない。まるで、煙にでもなつて消えたかのように。

と、アルバートが左手を上げた。止まれの合図だ。慣れないと辛いな。

「何かが居る。見えるか？」

アルバートが細い路地を指差す。肩越しに覗き込むと、何かがこちらの事を見ているのが分かった。しかし暗くてよく見えない。

「残念だけど、何なのかまでは分からないな。居るのは分かる」

「行くぞ、うまくいけば情報が手に入るかもしれん」

黙つて頷く。とにかくこの世界のことを知りたかった。2人で銃を構えて走る。すると、その影は危険を感じたのか逃げ出した。

「Freeze！」

影の進む先にアルバートが銃弾を叩き込む。威嚇にはそれで十分だった。影は観念したのか、立ち止まりこちらを向いた。かなり小柄な、どうやら人のようだ。

「そのまま両手を挙げるんだ。恭介、アイツの後ろに立って銃を構えろ。何をするか分からないからな」

「え？ あ、分かった」

俺が頷いた瞬間、

「き、きょうすけ？」

聞き覚えのある声が出た。影が喋ったのか。

「へ？ アンプ？」

思わず間抜けな声が出た。何でこいつがこんなところに？

「きょうすけなの？」

「お前、どうして」

アンプがこっちに走ってくる。

「動くな！」

アルバートがライフルの銃口を向けた。　　っておい！　引き金に指掛かってんじゃねーか！

「待ってくれ！　こいつはうちの身内だ！」

ギリギリでアルバートの腕を掴む。

「身内だと？」

「ほら、さっき言っただろ？　うちにいる居候だよ。名前はアンプ」  
シルバーフィールド」

アンプが怯えたように俺の後ろに隠れる。こいつは感情表現が下手なだけで、内面は人より敏感だ。アルバートはしばらくその様子を眺めると、銃を下ろした。

「どうやら、本当みたいだな」

「間違いない、こいつは俺の知ってるアンプだ」

ほつと胸を撫で下ろしたのもつかの間、アンプが言った。

「とにかく移動したほうがいい。やつらが来たら」

「奴ら？」

「からっぽの体をねらう悪いたましい」

「何で俺たちが狙われるんだよ」

「やつらは、わたしたちが体のありかを知っていると思ってる。だから」

「移動するぞ、何かに囲まれている」

アルバートがアンプの言葉を遮った。

「囲まれてる？　アンプ、頼む！」

アンプが黙って俺の手を握る。アンプに異能によって俺の感覚器官が　増幅　された。

「なんだってんだ、こりゃあ……」

どうやら囲まれているのは本当みたいだ。にしてもこの敵って……。鋭敏になった感覚で脱出ルートを考える。はじめだったら、もうちょいマシなものを考えるんだろうけど。

「アルバート、正面に進んでこの道を抜けて、右に進んで強行突破しよう。そこが一番薄い」

「何でそんなことが分かる？」

「それは後で説明するから早く！」

「分かった、信用する」

「頼んだよ、相棒」

俺たちは市街地を走り出した。

相変わらず謎だらけだ。街で出会った白銀の髪に白銀の瞳を持つ10歳ほどの無口な少女。彼女は恭介の家に居候しているらしい。そこまでならまだ分かるが、分からないのはその後だ。どうして恭介は敵の配置まで分かったのだろうか。それもあの少女が手を握った瞬間に。

彼は後で説明すると言った。なら、それを信じるとしよう。

そんな事を考えていると、先程恭介から右に曲がると指示があった角に差し掛かった。壁に背を預け、道を覗き込む。

「何だアレは……」

思わずそんな言葉が漏れた。だってそうなるだろ？ 死人みたいな顔をした人型が呻き声を上げて歩いてるんだから。

「バイオハザードかってんだ」

横にいた恭介が呟いた。全くその通りだ。あんな連中に体に乗っ取られたらと思うと吐き気がする。

と、その後ろからちかちかとライトの様な物が光った。アレは……車のヘッドライトか？

俺がそう思った直後、

「こんばっばー！」

音楽活動部のケバケバしいプリントがされた4輪駆動車がゾンビの群れに突っ込んだ。

「今度は何だつてんだよ！」

恭介が半ばキレ気味に叫んだ。これ以上敵が増えるのはまずいな。

「あ！ あん時の痛車！」

恭介の2挺拳銃がフルオートで火を噴いた。そのドアに次々と穴が開いていく。そんなに撃ったら運転手が蜂の巣になるだろうが！  
せつかくの情報源が！

煙を上げて動きを止める自動車。ガソリンに引火しなければいいが……ん？ ドアが開いて男が降りてきた。

「何してくれるんだ高山君！ 私の愛車が蜂の巣じゃないか！」

男はアジア系の顔立ち、恐らく日本人。眼鏡を掛けたその顔からして15、6歳ほどだろう。

「知ったことかよ！ ってか何でお前もここにいるんだ！？」

「恭介、知り合いか？」

「知り合いも何も、このイタイ奴が俺の所の作者だ」

男は俺に気づき、片手を親しげに上げる。

「やあ、初めましてリヨウ君。キミの事はXナンバーからよく聞いている。私の名前は逆逆三里と言うんだ。嫌いな言葉は『セロリ』。どうぞお見知りおきを」

「……お前、Xナンバーを知っているのか？」

「知っているも何も、同じ高校で同じ部活に所属している友人さ」  
そうか、どうりで醸し出す雰囲気がアイツに似ていると思った。きっとその学校、部活とやらには、コイツ等みたいなのがうよう湧いてるんだろう。廃人養成機関だな。考えるだけで身の毛がよだつ。  
「そんな事よりも」

恭介が割って入る。

「俺を殺した責任取れよ！ 轢き逃げつてのは流石にマズいだろ！」

「高山君、キミは大きな勘違いをしている」

逆逆は溜息をつく。

「キミを轢いたという痛車、キャラクターの髪の色は？」

「……黒だ」

恭介は死ぬ間際の事をしばし思いだして回答する。

「ほーら、見たまえ高山君。このキーボード担当の女の子の髪の色



を。それにこの特徴的な眉！ 見間違い無かるう！？」

クソッ、この逆逆とかいうやつ、Xナンバーと同じぐらいキテるみたいだ！

「質問が2つある。1つ目は何故お前のような『作者』がここにいるのか。もう1つは俺達の肉体がどこにあるのかだ」

俺はとりあえず銃を突きつけ、尋問を始める。

「順番に答えていこうか」

逆逆は面倒臭そうに伸びをすると話し始めた。

「作者、つまり私やXナンバーのような人間は、世界を『想像（imagine）』によって『創造（create）』する事が出来るんだ。ただ、この過程が厄介でね。『創造』の際にはかならずゴミが出るんだ」

「ゴミ？」

「そうだ。いわゆる『書けなかったアイデア』だな。筆記という動作を通じて具現化出来る『想像』はごく一部だ。その為にその『想像』は行き場を失い集まって、自らで世界を作り出してしまふ。これが『平行世界』と呼ばれる物だ。こうなってしまうえば我々作者も干渉出来なくなる。平行世界の構築は自動的に行われる物だからな副産物によって作られた平行世界の要素は、もしかしたら俺達の世界の要素の一つになっていたかもしれないという事か。

「つまり、この世界こそがそうだと言いたいのか？」

「その通りだ。まあ、干渉は出来ないが観測が不可能という訳ではない。こうやってちよくちよく色々な平行世界を見て回っているんだが、ここはヒドい。負のオーラがするよ。これが1つ目。

2つ目としてだが、たまに私達の精神が著しい躁あるいは鬱状態になった時、通常の世界にもランダムに、何というか……『暴走』が起こる。そういった時にはイレギュラーな事態が起こりやすいんだ。たとえば、異なった『作品』との境界が消えたり」

「平行世界に飛ばされたり、か……」

「ああ、そこら辺をもうちよつと詳しく説明したいところなんだが

……」

逆逆が俺達の後方に眼を向ける。

「どうやら、彼らは待つてくれないようだ」

そこには、ゾンビ（？） がひしめいていた。

「とにかくそんな訳だから、我々作者人としても何もできないんだよ。頑張つてね！」

そんなことを言いながら、いそいそと蜂の巣になった車に乗り込む逆逆。

「ちよ、どこ行くんだよ！」

恭介が手を伸ばして彼の肩を掴もうとするが届かない。

「んじゃ、バイナラー」

ケバケバしい車は敵を蹴散らしながら走り去っていった。

「畜生が！ あの野郎、次に会ったら蜂の巣だ！」

「きょうすけ、そんなことより敵が」

アンプの言うとおり、とにかくこの場から抜け出すことが先決だ。

バババツ、とアルバートが撃った3点バーストの発射音が聞こえる。俺は2挺の重さを確かめながら逆手の銃剣を振り回して発砲した。なんせ敵の数がとにかく多い！

「アンプ、とにかく怪我すんなよ！」

「わかってる」

横にいるアンプに声を掛ける。そういえば、こいつはなんで死んだんだろうか？

「恭介、下がれ。グレネードを使う」

アルバートがパイナツプル型の手榴弾を投げた。ってこのままじゃ、俺とアンプが爆風で……

「うわぁ！」

とっさにアンプを抱えて横に飛ぶ。その直後、路地に爆風が轟いた。

飛び散った細かい破片を背中に受けながらアンプを抱きかかえる。  
無茶し過ぎだつて！

爆煙が風に流されて消えた後、どこにも敵の姿は無かった。にしても、

「アルバート……信じてくれとは言ったけど、過信してくれとは言つてないぞ」

「お前ならやつてくれると思った」

「俺は、まさかやつてくれるとは思ってなかったよ！」

とりあえず助かったようだ。このバグだらけの世界に夜明けがあるのかは知らないが、

休めるところが必要だ。

「とにかく、ここが現実の新宿と同じならホテルぐらいはあるはずだ。今はそこに行つて、敵がいらないようなら休もう」

アルバートも同じことを考えていたようだ。

今は一時の安らぎが欲しい。

## 第2話：Pones are completeness

ホテルはすぐに見つかったが、やはりそこも無人だった。アルバートがフロントにあるコンピュータをいじって俺達3人の名前を書き込む。勝手に泊まる訳にもいかないだろう。

「日が昇って人間が出てくるようなら、銀行に行ってドルを換えてくる。学生身分じゃ安宿の代金も高くつくだろ」

客室までの廊下を歩きながらアルバートは声を掛ける。

「あ、ありがとう」

「日が出ても人がいないか、最悪このままずっと夜なら、暫く滞在させて貰おう」

「……」

このままずっと夜なんてあり得ないと思った。しかし逆逆が言うには、あり得ないという言葉自体「あり得ない」のだ。自分の世界の常識は殆ど通じないだろう。改めて不可解な境遇に置かれている事を実感する。

「アンプ」シルバーフィールド」

突然アンプが切り出す。

「わたしの名前。よろしく」

アルバートと握手を交わすアンプ。

「Well, you're not seems to be Japanese. Where are you from? I'm American. (ええと、君は日本人に見えないが、どこから来たんだ？俺はアメリカ人だ)」

「From Russia. (ロシアから)」

アンプは英語でアルバートの問いに返答する。

「？ (ロシア語を話すか?)」

「There's no need. (必要ない)」

（ありがとう）「

「Oh , . (おや、失礼) By the way , Gyakusaka said this world is . . . (所で、逆逆が言うには……)」

二人は英語とロシア語を混ぜて話してる……意味不明だ。

「二人とも、何ヶ国語しゃべれるんだよ」

二人が話を中断して首を捻りながら指をバシバシ折り始めたのを見て、俺はグローバル化の波を肌で感じていた。

「603号室……ここか。お前達は待つてろ」

扉を開けると同時にハンドガンを引き抜いて周りを見渡す。

バスルームには何も無い。

クローゼットの中も大丈夫だ。

ベッドの下……クリア。

後はテラスか……

外が暗いせいでガラスの向こうが見えない。だが

カチャッ

カチャッ

畜生、固いものが触れ合う音がする。

またさっきのゾンビかもしれない。音を立てずにテラスに近づき、ガラスを開ける。

人影が椅子に腰掛けている。テーブルにはティーカップ、ソーサー、スコーン……

ん？ 何故だか見覚えが？

もう少し接近してみる。1歩、2歩……

「ふう、異世界でも、紅茶の美味しさは普遍ね」

やっぱりそうか？ でも彼女であるはずが無い！ 何故彼女が死んでいる??

その刹那、ちょうど真上から先程と同じようなゾンビが飛び降りてくる。それも二体。牙を剥いて戦闘態勢に入った状態で、紅茶を嗜むブリティッシュの前に立つ。

「でも、やっぱり本部に置いてあるアールグレイが美味しいのよね」しかし彼女は動じる事無く、紅茶の入ったカップをソーサーに戻し、机の下に立てかけてあるSCAR-Lを手に取った。指はMk40グレネードランチャーのトリガーに掛かっている。

シュボン！

40mm擲弾が2者の中心に着弾し、そのまま爆発が床を犠牲にしてゾンビをただの粉にする。それを見届けると、彼女は再び紅茶の香りを愉しみだした。

やっぱり、お前か！

「何だ、さっきの爆発！」

恭介とアンプがこちらに駆け込んでくるが、それも視界に入らない。

「……Hey, why are you here? (おい、なんでお前がここにいるんだよ!)」

俺は彼女の目の前に立つ。

「Marshah! (マーシャ!)」

「Ah, Al! Small world isn't it?

(ああ、アル!世界って狭いわね) Hey, let's ha

ve a tea time with your friend

! (ほら、友達も誘ってお茶にしましょうよ!)」

そこにいたのは俺の仲間、マーシャ・アーチボルトだった。

「アルバート！ 敵か？」

「待て恭介、こいつは敵じゃない。俺の仲間だ」

後ろから飛び出した恭介が拳銃の銃口を向ける。それを右手で制した。さつきも見た光景だ。

「（ねえ、この子達何なの？ どうやらお茶会のマナーを知らないみたいけど）」

「（さつき知り合つてな。俺達とは協力関係だ。それより、何でお前がここにいるんだ？）」

「（あなたがいなくなつてから、なんだかよく分からない請求書がたくさん来てね。それがあまりにもとんでもない額だったから、シヨックで後ろに仰け反つたら……そこで記憶が途切れたわ）」

カップ片手に微笑むマーシャ。俺も人の事を言えないが、なんて間抜けな死に方だ。

「なるほど、ありがとなアンプ」

どうやら恭介はアンプに通訳してもらつたらしい。これは楽だ。

「なあ、アンプ。一体君はどうやって死んだんだ？」

そういえば聞いていなかったことを思い出して尋ねる。

「買い物にでかけたきょうすけをずっと2人で待っていたけど、いつまでたつても帰つてこないからさすが「ご飯を作る」って言うてできたものを食べたら意識がなくなつて……ここに」

どうやら、マーシャはアンプと同じ境遇の魂ではないようだ。つまり、このまま行くと恭介の世界から1人、俺の世界から1人、最低は出てくる計算になる。

「ゴメンなアンプ……俺が早く帰つてこないばかりに、涼のダークマターを……」

「（ダークマター？ あの子、ダークマターって言った？）」

恭介の言葉にマーシャが反応。どういう事だ？

「（ああ、言つたがそれがどうした？）」

「（何でか知らないけど、エミリオが私の作った食事を食べて、あ

まりの美味しさに昇天した時に言った言葉と同じなのよ。どういうことかしら？」

マーシャの生まれはイギリスだ。そのせいなのか、彼女が作る料理は殺人的な不味さを誇る。ある時などは、「目標を戦闘機で爆撃するよりも、マーシャのメシを食わせたほうが確実に死ぬ」と言われたほどだ。さらに、本人にはその自覚がないのだからタチが悪い。という事は、

「（チツ、もう1人はエミリオか！）」

「まさか、もう1人は涼か！」

俺と恭介は同時に声を上げた。

「どういうこと？」

アンプが恭介に尋ねる。それは俺も氣になるところだ。必要ならば保護に向かわなければならぬ。

「その、マーシャさんが暗黒物質製造装置だとしたらたぶん、同じ境遇の魂はうちの居候だ。だって俺とアルバートはある程度共通点があるし、その法則で行くとき、あいつしかいない」

「俺とお前の共通点？」

「作者に振り回されるツツコミ役ってところ」

なるほど。疑問顔のマーシャに翻訳する。ちなみに恭介の安全のために『暗黒物質製造装置』のところは『すばらしい腕の料理人』に変えておいた。テーブルマナーだけは素晴らしいんだけどな、本当に。

「んで、そっちのエミリオっていうのは？」

「ああ、うちの暗黒物質製造装置の飯を食った奴だ。話を聞く限り、恐らくアンプと同じ境遇の魂だろう」

よりによってエミリオとはな。早いとこ見つけてやらないと。

「（とりあえず私の知らないことを知ってるみたいだから、教えてくれないかしら）」

「（分かってる。後でな）」

今日のところはゆっくり休みことにした。



突然出てきたマーシャという赤毛の女性。ゾンビを少しも恐れずに粉碎した彼女は、アルバートの知り合いらしい。まったく、とんでもない部隊だ。もし俺がテロリストだったら迷わず投降するよ。

「信じてもらえないかもしれないけど、俺とアンプはよく分かん組織に入っていて夜な夜な怪物と戦ってるんだ」

約束通り、アルバートに俺達の事情を説明した。

ポカンと口を開けるアルバート。そりゃそうなるか。俺だって最初メナスメシアの事を聞いたときにはそうなった。アンプから通訳を受けたマーシャが爆笑する。

「（何それ！　レイが聞いたら大喜びしそうな話ね！）」

「んで、俺達は　異能　っていうやつが使える。俺のはあらゆる銃器の構造を触れただけで理解して、扱う力。まあ、言っても信じてもらえないだろうから。アンプ」

「わかった」

俺の呼びかけでアンプが前に出る。そのまま備え付けの机の天板に手をかけた。

「こいつの異能は、あらゆる力を増幅するんだ」

アンプの小さな手が天板を易々と引き剥がす。

「なんだ、それは……」

「さつき、俺が敵の情報を知っていたのもこの力のお陰なんだ。自分の感覚を増幅するってやつでね」

「俄に信じがたい話だな。だが、証拠がある以上否定出来ない……怪物だって似たようなモノをこの目で見てるんだ。お前達の言う事は信じる」

アルバートは初めこそ驚いたが、すぐに落ち着きを取り戻した。切り替えの早さがプロなのだろう。

「さて、こっちの自己紹介だが、先程も話したように民間の特殊部

隊、『Demoniac Pigeons』をやっている。所謂傭兵とは違って、対テロ犯罪を専門としている組織で一流の連中が所属している。俺は指揮と近接戦闘、マーシャは擲弾手をやっている。コイツの事は呼び捨てで構わない」

マーシャは一言、ヨロシクと微笑んだ。片言の発音から推察するに日本語は出来ないのだろう。

「自己紹介としちゃ、こんな所だ。とにかく、一眠りしてから2人を探しに行こう。その涼という子もどうせメナスメシアの戦闘員なんだろう。お互い生き延びている可能性は十二分にある。今は我々の休養が先だ」

アルバートは自分のライフルとハンドガンをベッドの下に隠す。俺もそれに倣ってハンドガンを抜いた。

「（その銃、見せて貰えるかしら）」

マーシャがルシフェルと十六夜を見る。

「触っても良いか、とマーシャは聞いてる」

アンプが通訳するので、弾倉を抜いて彼女に見せる。

「（Hk社のUSPの延長型をベースにして、フルオートシアに対応させるために各部をチューンアップしてる。フィニッシュをブルーイングからニトロカーブライズに変更してるし、何より特徴的なのはそれぞれに装着された銃剣……フォールディングする刃をマガジンベースに固定しているのね。ふうん、よく出来てるわ）」

「マーシャの家はその……裏家業で武器を扱っていてな。俺達の装備もアーチボルト家から調達しているんだ」

「アリガトウ。Very fine.」

って事は今、ルシフェルと十六夜は数々の銃を見てきた人間のお墨付きを貰ってるわけか……

「サ、サンキュー」

きつと、名前は知らないが開発者が知ったら喜ぶだろうな。

「（そうだ、二人を回収したら補給に行きましょうよ。近くにアーチボルト家の隠し倉庫があるわ。きつとあの調子でゾンビが出てき

たら弾も尽きるでしょうし。弟に言ってサービスしとくわ)」

「（前にスペインの倉庫に行ったときは品揃えに圧倒されたな）」

「（その5倍はあるわよ）」

「……」

「沢山銃をマーシャが用意していて、わたし達にくれるらしい」

「なるほど。ありがとうマーシャ。サンキュー！」

「ドウイタシマシテ」

マーシャはふわりと笑みを返す。いつも優雅に微笑む人だよな、笑う時は笑うけどさ。

「それじゃあ、俺は下に行って隣の部屋を取ってくる。マーシャとアンプは隣に移っておいてくれ」

次の日。日の出には少し早い時間に俺は目を覚ました。隣のベッドで恭介が寝息を立てている。起こさないように下から銃を取り出し装備した。

「どうやら、夜は明けるようだな」

窓の外を見ると東の空が明るくなっていた。しかし、明るくなったとはいえゾンビ共がやってきた時の事を考えると気分は沈む。何とかして打開策を考えなければ。

「ん？ アルバート、もう起きたのか」

後ろを振り返ると、恭介が眠そうに眼を擦りながらベッドに腰掛けていた。

「ああ、まだ寝ていてもいいぞ。疲れているだろう」

「いや、いつもこのくらいの時間に起きてるからさ。ほら、昨日言った涼が朝に弱くて」

そんな会話をしていると外から銃声が聞こえた。

「何だ？ ゾンビに銃を使うほどの知能があるとは思えないし……」

「今の音 7・62mmか」

俺の呟いた言葉に驚いたのか、恭介がこちらを向く。

「分かるのか？」

「戦場にいたらこのくらいは分かる。行くぞ、もしかしたら涼つて子かもしれない」

「それは無いよ。涼は刃物使いだ。銃は撃てない。知り合いだとしてたらエミリオって人だよ」

そう言いながら恭介も銃を構えた。

「行こう、アルバート。朝の準備運動にはちょうど良い」

2人でエレベータに乗って一階へ降りる。アンプは危ないところに行かせたくないし、アルバートの話ではマーシャは寝起きがかなり悪いらしく、ゾンビと戦う前に怪我したくないなら近づくな、この事だった。

ベルが鳴ってドアが開く。アルバートが先行して敵影があるか確認。「クリア！」

俺もエレベータから降りて両手の安全装置を外す。ガラスの自動ドアの向こうを見ると2つの影が見えた。しかしかなり離れていてよく見えない。

「何だあれは？」

アルバートが呟く。とりあえず外に出て近づいてみることにした。ゾンビか？ でもそれにしちゃ、しっかり立ってるよな……。と、片方の後ろからどう考えてもゾンビっぽい歩き方をした、第三の影が襲い掛かった。つまり、あの2つの影はゾンビじゃない？

もう1つの影が何かを叫び、襲い掛かられたほうの影が腿のホルスターから拳銃を抜いた。

ズダン！ という発砲音と共にゾンビ（？）が倒れる。つか、もう片方の影戦えよな、さっきからおろおろしてるだけじゃん。でも、どっかで見覚えが……

「あの動きはエミリオか！」

アルバートが声を上げた。どうやら仲間のようだ。そして、そのエミリオがもう1人の影に何かを言っている。さらに近づいてみると、辛うじて声が聞こえてきた。英語だった。

「Oh, thanks. Well, I must be dead if ya didn't tell that. By the way... Hey, You're so Hot, huh? what's ya name? Let's go somewhere to play with me if ya don't mind. (ありがとう。全く、キミが教えてくれなかったらどうなっていたか。にしてもキミ可愛いね、名前何て言うの？ よければオレと遊ばない?)」

「あの馬鹿っ！」

アルバートが吐き棄てるように言う。別に英語が得意なわけじゃないし、日本から一步も出たことが無いから分からないけど、男の様子を見るにナンパしてるらしい。もう1つの影は何を言われているのか分からないようで、首を小さく傾げるばかりだ。それでもなんとなく雰囲気で察したのか、何かを必死で考えるような動きをとったのちバリバリの日本語発音で言った。

「え、え〜と……あい、でいてすとゆー！ げ、げっと、あうとおぶ、ひやー、あつとわんす！」

日本語に訳すと「私はお前の事が反吐<sup>へど</sup>が出るほど大嫌いだ。とつとこの場から失せろ」。あんな乏しい英語力しか持っていない人間を俺は1人知っていた。

「……酷いな」

アルバートが呟いた。全くだ。エミリオさん日本にトラウマ持つちまうだろうが。あゝあ見てみる、頭抱えてうずくまっちゃまったじゃないか。

「(エミリオ！ こっちに来い、とりあえず)」

アルバートがエミリオに声を掛けた。と、彼は弾かれたように立ち上がるとこっちに向かって走ってくる。

「(おお、アル！ 何やってんだこんなところで！ それより聞いてくれよ、ここんところ酷い目に遭いっぱなしだ!)」

「(みたいだな、聞いた話だとマーシャの飯を食ったそうじゃない

か。これは自業自得だと思うが)」

「（イギリス人に舌が無いってのは本当だったんだな……）」

英語で何か言葉を交わしたあと握手する2人。なんか一挙手一投足が格好良いな。

「（そうなんだよ。なあ、そのキミ。そんなに酷い断り方するのを見ると、彼氏でもいるのかい？）」

エミリオが振り向くが、影はちつとも反応しない。銃をホルスターにしまった俺の方をじっと見たまま固まっている。しょうがねーな、呼んでやるか。

「よう涼。このふざけた世界へようこそ」

「恭君……？ 恭君なの？」

「疑うなら、お前が小学校の調理実習でフライパンの底溶かした話してやってもいい」

「車に……轢かれたんじゃないの？」

「まあ色々あってこの世界に、」

そこから先は言えなかった。涼が俺に抱きついてきたからだ。

「……よかった、よかったよっ！」

「ななな何だよ！」

「もう会えないかと思って……もう話せないかと思って……心配したんだからっ！」

泣きながらそんなことを言う涼。……ったく、しょうがねーな。

「ありがとな、心配してくれて」

涼の頭を軽く撫でる。アルバートに眼で合図。

（悪い、もうちょい掛かりそうだ）

（俺達は先にホテルに戻るから、落ち着いたら来い）

（分かった。ありがと）

泣き続ける涼を軽く抱きしめながら俺は頷いた。

立ち並ぶビルの向こうから太陽が昇ろうとしている。

この世界に朝が訪れようとしていた。

よし。

俺は気合いを入れるとマーシャのいる部屋のドアをノックする。  
当然返事など帰ってくる筈が無い。

扉の奥からはユサユサという音と、「Wake up!（起きて！）  
」という声しか聞こえない。

「Amp! Please open the door if  
you want to wake her up.（アンプ！

彼女を起こしたいならドアを開けてくれ）」

しばらくした後アンプが扉を開く。

「起きない」

日本語で呟くと、後は任せたとばかりに下の食堂に降りていく。

「……さて、起こすとするか」

俺はズボンのポケットからフォールディングナイフを一振り取り出し、刃をカチャリと開く。

「今日も一日が始まるぞ、マーシャ！」

俺は握っているナイフの刃先を真下に向け、マーシャの胸に真っ直ぐ振り下ろす。丁度心臓の位置だ。

「……ッ！」

マーシャはすんでの所で体を回して刺突をかわす。俺も刃先がベツドに触れるか触れないかの所でナイフを止め、そのまま横になぎ払って追従する。

彼女はそれも頭を下げた避けて、手刀をナイフの峰に直撃させる。ナイフは吹き飛んで床に落ちるが、その前に俺は拳を突き出す。

「畜生！」

「Zzzz...」

しかしその打撃も受け流される。互いに打撃を与え合い、それをやり過ごす。マーシャが12回目に突き出した掌底。その位置は高く、彼女の重心は浮いていた。

「もらったっ！」

「……!？」

彼女の腕を取って足を払い、ベッドの上に押し倒す。そのまま抵抗の隙を見せずに左手でポケットナイフを抜き、首筋に突き当てる。

「Checkmate.」

マーシャはそのまま硬直すると、そのまま気を失ったように眠りだした。エクササイズは終了だ。

軽く汗を拭くと、マーシャをつつく。

「Good morning Marsha. (おはようマーシャ)」

彼女はもぞもぞと布団の中で動くと、とろんとした目でこちらを認識する。

「Good morning Al. (おはよう、アル)」

さて、今日も爽やかな朝だ。

俺は一つ伸びをすると、恭介たちと合流するために階下に降りて行った。

ホテルで簡単に朝食を取る。食堂にそれなりの人間が集まっている所から見て、昨日のように全く人がいないという訳じゃなさそうだ。

「それどころか、活気すらあるな」

一人呟く。人々は思い思いに談笑し、それぞれの人生を謳歌しているようだ。まるであんな恐ろしいゾンビなどいなかったかのように

「……何かの悪い夢だと思いたくなる」

アルバートは俺の隣に座って溜息をつく。もちろん、そんなことはあり得ない。あり得ないという言葉こそあり得ないと分かっているが、

「アルバート、銀行に行くんだろ？ とりあえず、俺も外に出て色々見てこようと思うんだ」

先程考え付いたことを提案してみる。アルバートはしばらく思索した後、頷いた。

「情報が必要だ。ただし、二人一組で正午には帰ってくるようにし



る」

「何で？」

「二人一組なのは、いつ敵に襲われても迎撃できるように。正午までというのは、その後アーチボルト家の武器倉庫に行くからだ」

「アーチボルトって言うത്マーシャの家か。確かに銃については不安はないが、所詮、弾が無くなったら、銃剣が付いているとはいっても銃なんてただの鉄の塊だ。俺の手元にあるのはマガジン2本分。これではあまりにも心もとない。」

「分かったよ。涼を連れて行くから、アンプに基本の情報とこれらの方針を伝えておいてくれ。あと、エミリオさんのことも」

「アイツのこともマーシャと同じで呼び捨てで構わない。今度は、離れないようにしろよ？」

悪戯っぽい顔をするアルバート。この人、こんな顔もできるのか……

「なにを？」

「彼女さんの手をだよ」

俺は飲みかけていた紅茶を噴出しそうになって、むせ返った。

「ちっちゃがつ、違うって！俺とアイツはただの幼馴染ってだけで！」

「そうか？　すごく似合っていたと思うが……」

「んなわけないって！俺がアイツと一緒にいるのは、危なっかしくて目が離せないってだけだから！」

「さっきだって、抱き合っていたじゃないか。少しは気があるんじゃないか？」

「だから違うって言ってんだろ！あれはアイツが泣き出したからで！」

笑いながらそんなことを言うアルバート。朝から調子が狂うな。そんな会話をしていると後ろからマーシャが声を掛けてきた。

「（おはようアルバート、キョウスケ。ねえ、聞きたいことがあるのだけれど）」

なんとかグッドモーニングくらいは聞き取れたので挨拶を返す。ア

ルバートに通訳を頼むと、どうやら問題が起きたらしい。

「（どうしたんだ？）」

アルバートが尋ねる。

「（さっき忘れ物をしたから部屋に一旦戻ったんだけど、私のベッドに知らない子が寝てるのよ。それにさっきエミリオがいたし。どういうことかしら？ アンプに聞いてみたら、どうやら知り合いらしいんだけれど）」

そういえば、さっき涼が「昨日の夜は寝てないから寝る」って言うてアンプに連れて行かれたんだっけか。アルバートが早朝の出来事について説明する。

「（なるほど。それで、そのスズなんだけど……ちつとも起きないのよ。どれだけ揺らしても、耳元で大きな音を出してもね。あれほど寝起きが悪い人間は初めて見たわ）」

「（俺は一人知ってるよ……）」

アルバートが疲れたように呟いた。お互い苦労しているようだ。

「ちよっと起こしてくるよ。アイツは俺じゃないと起きないんだ。

それと、マーシャにごめんって伝えておいて」

アルバートにそう言っ、俺は涼を起こしに部屋へ向かう。

「すずく起きろくメシ抜くぞ」

ベッドの上の掛け布団がもぞもぞと動き、寝起きでばさばさな、色素の薄い頭が顔を出した。眼が半開きだ。

「ふえ？ おはよ恭君」

「皆待つてるから、下に行くぞ」

「あ、うん。そだね」

こいつは異世界でもこの調子か。……いいのか？ これで。

「で、色々調べて回ったわけだけど」

マーシヤの倉庫へ向かう道中、恭介が口を開いた。現在午後1時。周囲の喧騒がこちらにも聞こえてくる。昨日のことが嘘のようだ。

「あのゾンビは夜にならないと出てこないみたいだ。昼間にいた人たちはゾンビのことを知らなかった」

「知らない？　だってあんなにゾンビが居たら、どんなに夜とは言っても誰か気付くよ」

涼の言葉に恭介は頷いた。

「あと、気付いてたか？　これだけ物物しい格好のアルバート達がウロウロしてるのに警察が来るどころか騒ぎすら起きなかっただろ？　服の下にホルスターを付けてる俺やグルカナイフをケースに入ってるお前は別としてもさ。やっぱ、この世界に俺達の常識は通用しないみたいだ」

言われてみればその通りだ。恭介たちならともかく、俺達の装備は玩具の域を逸脱してしまっている。しかし、それについて誰も触れてこない。まるで、それが当たり前の光景のように。

さらに、と恭介は続けた。

「もしかして、これがパラレルワールドってやつならもう一人の俺も居るんじゃないかって思ってたさ。公衆電話で電話してみたんだ。そしたら元の世界で俺が使っているはずの番号は存在しなかった。これは俺の仮説だけど……逆逆の馬鹿逆さくろうが言ってた『書けなかったアイデア』ってのに、もしかして俺達は存在していないんじゃないかな」

「そんざい、しない？」

アンプが彼を見上げた。それは俺としても気になるところだ。

「俺や涼、アンプがいるブランクブレイン……アルバートやマーシヤ、エミリオがいるThe War in Manhattan……」

…そのどちらでもない物語の舞台がこの世界だとしたら」

「（おい、だからどういうことなんだ？ はつきり言ってくれよ）」  
俺から通訳を受けているエミリオが続きを促した。

「本来出てこないはずの作品から出てきたキャラは、本来の作品に強制的に戻される。作風に合わなければ邪魔なだけだからさ。でも、俺達には戻されるべき体と魂が揃っていない。つまり、」

「（体が護っているはずの魂が、強制的に戻されるときダメージを受けるってことかしら、キョウスケ？）」

マーシャの通訳を聞いて恭介が頷く。

「ああ、一種の拒絶反応ってやつだ。元の世界に帰るのはその拒絶反応に任せるとしても、体を見つけないことにはまずいことになるかもしれない」

どうやら状況は思ったより悪いらしい。急がなければならないことは分かるが、手がかりがないことには迂闊に動けない。こんなときにXナンバーの奴は何をやってるんだろうか。あの廃人、俺達を放っておいて遊んでやがった時には……いや、待て。落ち着けアルバート。そうだった、はじめからあいつは殺すはずだったじゃないか、ハハハ。

「あの、アルバートさん？ 眼が怖いよ……？」

涼が俺の顔を見て言った。それで正気に戻る。

「ああ、すまない。ある男のことを思い出してな」

そんな会話を交わしていると、目的の建物に着いた。アーチボルト家の武器倉庫だ。外見は薄汚い8階建ての雑居ビル。しかしその地下に広がる空間は地上階より遙かに広く、古今東西あらゆる銃器とその弾薬が大量に揃えられている。さらに射撃場まで完備されていて任務に就く俺達もかなり世話になった。といっても、日本にある倉庫を実際に見るのは俺も初めてだ。

「（確か……ここだったかしら？）」

マーシャは外壁のタイルに指を這わせると、その継ぎ目にカードを差し込んでスライドさせた。

それからビルの中に入ると、埃っぽい床の一部が外れかかっているのに気が付く。

彼女は床板をどかすと、ついて来いとの合図。その直後、彼女の姿は穴に消えた。

床板の中には梯子があり、それは地下の奥深くまで続いていた。

一番最後に降りていった俺は、扉の前に立つ彼女と一同を暗闇の中で視認する。

「Para bellum. (戦争に備えよ)」

マイクが彼女の声を拾い、声紋を認識する。しばらくの後、重厚な観音開きの扉がゆっくりと開いた。

「Welcome.」

マーシャは優雅に微笑んだが、他の皆は馬鹿みたいに口を開けているしかなかった。

広すぎる。

「(……おいマーシャ、いつからループルは日本に越して、銃ばかり置くようになったんだ?)」

エミリオがようやく口を開く。

そこは柔らかな照明が大理石の磨き上げられた白い床を照らし、順路を示す矢印が壁に貼ってあった。そこは美術館だ、と説明しても誰も疑わないだろう。

しかし、そこでスポットライトを浴びているのは数々の銃、銃、銃。

「(なるほど、ループルとは言い得て妙ね。確かに銃器の博物館としても通用するわ。ベレッタ・ミュージウムも真つ青でしょ。地下一階の半分は第二次世界大戦終戦までの銃を中心に置いてあるわ。

ここらへんは時代もあるから欠損しているモデルも多い。残り半分と地下二階は第二次世界大戦から現在に至るまで。M16、AK系のバリエーションはすべて三階よ。地下四階はシューティング・レンジと手入れ、調整ができるファクトリーがある。弾薬とマガジンもここ。どこでも好きなように移動して構わないわ。しばらく時間がたったら放送で呼び出すから)」

「（……本当に博物館だな）」

南北戦争に使われたミニエー銃が並び、その少し向こうにはマクシム機関銃と思しきデカい円筒がある。歴史的な価値も高いだろう。

「貴重なモノもあるから、無闇に手を触れるなよ」

「うわあ、見て見て！ 変な形のリボルバー！」

「って全然聞いてないし……ん？」

彼女が手に握っている回転式拳銃。トップオープンフレーム。引っ込んだトリガー。のっぺりとしたバレルを持つその銃は……

「（おいマーシャ。あのテキサス・パターソン、可動品か？）」

「（ええ、もちろん。私があれのレプリカを置くとでも？）」  
クソッ！

「お、おい、涼ちゃん。そのまま、持っている拳銃を、ゆっくり、元の場所に、戻すんだ」

「……？」

「テキサス・パターソン・リボルバー。コルトが手がけた最初期の拳銃。製造数が元々少なく、現存する完璧なモデルはもっと少ない。それ故、高値がついていてな。その上物なら……ざっと10万ドルは下らないだろう」

「じゅうまんどる……じゅうまん、ひゃくまん、せんま……い、1千万円！？」

涼はそのまま固まる。

「あわわわわどうしよう！ ててて手が震えてうとうとう動かないよおおお」

「落ち着け涼！ ほら、そのまま慎重に戻すんだ」

恭介が彼女の手を握ってそのまま壁のフックまで誘導する。彼女の痙攣は収まったようだ。代わりに頭から湯気噴いてるが。

「（なんで気づかないのかねえ、あの少年は。あんなカワイイ子に一途に好かれるなんて、本当に果報者だぜ）」

「（こっちの世界じゃ、いつもあんな調子）」

エミリオとアンプがスペイン語でヒソヒソと話しているが、当の本

人達は意味を理解していなかったのか、はたまた気づかなかったのか……

地下の『博物館』で、俺は拳銃の並ぶ壁を前にして一人立っていた。

「（どうしたの？）」

声に振り向いたが誰もいない。

「（下）」

視線を下げると、そこにはムスっとしたアンプの姿があった。

「（いや、すまん。少し考え事をな）」

「（考え事？）」

俺は自分の考えを話す。

「（そっちの世界と、俺達の世界。創った人間は違う筈なのに、平行世界は一つだ。作者の思考から生まれる副産物なのに、何故その副産物が融合しているのか……逆逆とかいう奴が言っていただろ、『ここはひどい世界だ』と。奴も平行世界が融合していることを理解していないのかもしれない。『作者は平行世界に干渉できない』という言葉信じるなら、俺の所の作者もおそらくシロだ）」

「（つまり？）」

「（何らかの外的要因が平行世界を一つにしたという説を考えた。俺達も作者も知らないような第三勢力。それが何らかの力で世界を融合させ、俺達は死んだショックでそこに迷い込んだ。あるいは誘い込まれた）」

「（おもしろい思考。所で、これは私の考えだけど……）」  
アンプは言葉を探す。

「（あのゾンビのようなものを操る、もつと高位のモノがいると思う。アレはそれほど知能があるように思えないけれど、私達の肉体を奪おうという意志が感じられた）」

「（五感を『増幅』させて読みとったか。便利なものだな。続けて）」

「（つまり、その高位存在が指令をゾンビに下し、私達の肉体を探

しているのだと考えた。で、あなたの説と合わせて考えると」

「（……世界を融合させた存在が俺達の肉体を必要としているという事か）」

「（そういうこと。勿論、目的までは分からないけど）」

彼女はテクテク棚に向かって歩き、ハンドガンを見上げる。

「（当情報収集の為に動く事になる。この仮説を確かめなきゃ）」  
「（利発だな、全く）」

俺は並んでいるハンドガンの中から一丁を取り出し、彼女に手渡す。

「（ルガーMk.3。弾は.22LRを10発だ。威力は小さいがその分反動が低く、扱いやすい。精度の高さを生かして頭を狙え。」

……遠距離用の武器が入り用なんだろう？）」

「……ありがとう」

「わざわざ日本語か？」

「かんしゃのことは、にほんごがきれい」

俺はそうか、とだけ返した。頭の中は、この謎だらけな世界について考える事で一杯だった。

俺達は各々の弾薬を補給し、予備の銃もいくつかもっていく事にした。特に俺と涼、そしてアンプには動きを妨げないボディーマー、グローブに戦闘服が支給された。

「コイツがあれば防御力は上がる。最初は重いかもしれないが、すぐに馴れるだろう」

装備を一段階グレードアップしたのか、一層強固なボディーマーを着込んだアルバートとマーシャ。弾薬のポーチはベルトにまで増設されている。デジタル迷彩が施された戦闘服は都市戦で有利に働くだろう。

「あれ？　そういえばエミリオは？」

「奴ならまだライフル弾の調査をしているはずだ。ちょっと見に行ってくる」

「俺も行くよ」



ライフル弾の調合なんて、どんな事をやっているんだろう。少し興味がある。

扉を開くと、エミリオが機械を使って弾頭を薬莖に押し込んでいた。なるほど。ああやって銃弾は作るのか……

「（またパウダーの合成か？）」

「（ああ。スナイパーにとって常にベストな弾薬を準備する事は女の次に大事なんだよ。ああ、そうだキョウスケ。お前の名前が書いてある銃があつたぜ）」

彼が指さした先。それは……

「カノンハウルじゃないか！」

俺の愛銃である、50口径中折ライフルがそこに折り畳まれて横たわっていた。

「驚いたな、こんな所にあるなんて」

「お前の世界の銃も、どうやらこちらの世界に持ち込まれているらしいな。弾を切らすなよ。よいしょっと」

アルバートは、50ブローニング弾を一箱担いで荷物に加えた。

すぐ隣には、エミリオの物と思しきライフルがある。精悍な黒のストックに、すらりと延びたバレル。装着されたスコープとバイポッド。すごくかっこいいライフルだ。俺は思わず手を伸ばした。

「DO NOT TOUCH IT！」

ライフルに手が触れるか触れないかで、エミリオはものすごい剣幕でこちらに歩いてきた。

「（スナイパーの銃に触れるなんて、お前はこういう脳味噌を授かりやがったんだ！）」

アルバートの通訳を介すまでもなく、俺は自分の過ちを認めた。

「あ、アムソーリー」

「（ふっ、まあ、触れてないならいいが。今回は許す）」

エミリオはふとこちらを向く。

「（なあキョウスケ。100ヤードの距離から175グレインの弾

頭を秒速2600f/sで飛ばす時、角度が1°。ズレた場合には何インチの着弾誤差が出ると思う?」

は……? なんだか、フィートとかグレインとか耳慣れない言葉が聞こえたけど……? アルバートの通訳を聞いても、理解できない。ああ、そうか。これはもはや言語ですら無いじゃないか。

なんだ、数字か。

次の瞬間、俺の視界はブラックアウトした。

「(何ソレ……)」

マーシャは呆れて声も出ないようだ。

「(きょうすけに数字は毒)」

「と、とにかく、恭君も起きたんだし万事解決でしょ?」

なんだか女性陣に哀れみの目で見られているような気がするけど、別に何ともない。うん、いつもの事だ。

「まあ持病みたいなものだ。3桁の足し算引き算までは大丈夫なんだけど、4桁になると眩暈。5桁になると吐き気。それ以上複雑になると意識障害がでるんだ」

目が覚めた時はもう日が沈むかという頃。急いで夕食をかき込むと来るべき日没に備えた。

「さて、もうすぐ日が沈む。銃の点検を」

ボルトやスライドを引いて初弾を装填するガチャガチャという音がする。つてかアンプも拳銃貰ったのか。

「……また、あんなのが来るのかな」

涼がグルカナイフを引き抜いて軽く振る。金属が空間を切り裂く音がした。

「来るなら、倒すまでだ」

カノンハウルと二丁拳銃の薬室には、既に弾丸は装填されている。

「Stand by!」

その一声で周囲が緊張する。日がだんだんとビルの谷間に消えていく。

それと同時に、周りを歩いていた人間も、

闇が訪れた時、そこは俺達と、

化け物しかいなかった。

奴らの叫び。くそつ、今回は数が多い。

「（十分に引きつけて！）」

マーシャがトリガーに指を移動させる。

「5！」

アルバートがカウントに入る。

「4！」

俺もトリガーに指を掛け、涼は構えの体制に入る。

「3！」

だんだん近づいてきた。

「2！」

輪郭がはつきり見える。

「1！」

「こんばつぱー！」

轟くエンジン音が全ての緊張をぶち壊して俺達の左側からやってくる。

「……まさかつ！」

アルバートが驚きの表情を見せる。

750ccエンジンの重いサウンド。だがそれを操る男が乗っているのは、バイクでは無かった。

「ロデオボーイ……」

「ロデオーイだつて！？」

まさか、あの男はあのシェイプアップ機器に、エンジンを取り付けてやってきたつてのか！？

一体何者なんだ？

中央が凹んだウェスタンスタイルの帽子に、チェックのシャツとジ

「インズ。革ジャンと革のブーツを身につけて、腰にはガンベルトでリボルバーを2丁吊っている。手に持っているのは、レバーアクションのウィンチェスター・ライフル。これはどこからどう見ても、西部劇か……？」

男は手にしたライフル、M1873を馬（？）上で発砲し、瞬間に装弾数14発を用いて14のゾンビを地獄へ送り返した。射撃の腕は中々らしい。

彼は口 オボーイを俺達の眼前に止めると、鞍（？）についたホルスターにライフルをしまう。

「やれやれ、腹筋シェイプアップコースは良い具合に鍛えられるな」意味不明な言葉を呟きつつ、乗り物の後ろに積んであるラジカセのスイッチを入れる。

「イントロが終わるまで生かしておいてやろう。地獄へ帰れ、亡者共」

曲が流れ出した瞬間、俺は夢だと思った。恐ろしい早さでリボルバーを抜き撃つガンマンと、流れてくるエロゲの曲とのギャップ……いいのか、これで？

ファストドロー、ファニング、トリックシュート。様々な射撃法で45LCの弾頭を脳天に叩き込んでいく。6発撃ち終わればお手玉のように左手と右手の拳銃をスイッチして再び撃ち始める。それは実に鮮やかだった。バックミュージックがここまでイタくなければ12発目を撃ち終わったとき、彼は銃をくるくる回してホルスターに戻し、曲の歌詞を小声で、あくまでダンディーに呟くのだった。

「あつとめいと」

……何だコイツ……

「（つーか、スゲエな……いろいろと）」

エミリオが呟いた。無言で俺も同意する。

「あの曲知ってるよ！ わたし以外にも持つてる人居たんだ！」

持つてんのかよ涼。俺は思わず仰け反った。と、横からどす黒い

殺意のオーラが。敵かと思って振り向くとアルバートだった。何事かをブツブツと呟いている。

[illegible]

へ？ 何言つてんだ？ 俺がそう尋ねる前にアルバートは銃を構えて突撃していった。

「Xナンバー！ 貴様に会える日がこれほどまで早く来るとはな  
！」

「おおアル！ 私もキミの顔が見たくて夜も眠れなかったんだぜ！」  
変態のほうもロデ ボーイから降り立って、アルバートに向かつて  
両手を広げる。

「こっちは今夜からぐっすり眠れそうだし、てめーのツラを拝まないですむと思うとな！」

アルバートが放った弾丸が、突然現れた変態の顔面に吸い込まれていく。

「ハハハ、無駄だよ無駄！」

変態はポケットから取り出したトマトでそれを受け止めた。ぐしゃぐしゃぐしゃ、と音を立ててトマトが潰れる。あんまり食い物粗末にすんなよな、と専業主夫モードの俺。

「俺、あのシーン知ってる。実際にやれる奴居たんだ……」

「見たことあるの？ 恭君」

後ろで涼が仰け反っていた。

「（アルがあんなに取り乱すなんて。あの変な奴とかなり深い因縁があるのかしら？）」

「いみふめい」

アンプがマーシャの言葉に首肯した。

「クソツ！ 殺しきれないかッ！」

マガジンの中身を全て吐き出して銃口が沈黙する。アルバートが悪態をつきながら呼吸を整えた。変態は顔面をトマトまみれにして笑っている。

「やーやー皆さん。おいらの名前はずっとXナンバー。とれたて新鮮な君たちの味方さ！」

果たしてこの変態さん、日本で一般的に使われている言語 すなわち、国内では日本語、世界共通語では『ジャパニーズ』と呼ばれるものは通じるのだろうか。

「ん？ キミは恭介君かね！ わーいわーい！」

俺を見止めると、嬉しそうに両手を振ってきた。これまで、16年とちよつとの人生の中でこんなぶっ飛んだ人類と知り合いになった覚えはない。だって忘れるわけないだろ、絶対にトラウマになるはずだ。

「……誰？」

俺の言葉に変態は「なんだって」と叫ぶとオーバーアクションで額を押さえた。そうしたいのはこっちだ。

「聞いてないの？ 逆逆君に、何も？」

「逆逆の、知り合い？」

「では改めて。やーやー皆さん。おいらの名前はずっとXナンバー。とれたて新鮮な君たちの味方さ！」

「そっからかよ！」

思わず突っ込んでしまった。何だこいつ……格好から中身に至るまでツツコミどころが満載じゃねーか。

「うーん、良いツツコミだ。速さ、鋭さ、共に満点。すばらしい！ えゝくせれんとっ」

はつきり言つて、ウザかった。いちいち動作が目障りだ。しかし、この変態を見ているとどうにも逆逆の事が思い出される。目の前の男は、どこかアイツに似ていた。

「皆も状況は把握したよねっ！ じゃ、本題にいつてみよ」

『待て待て待て』（注・この中に、英語、スペイン語、ロシア語、日本語を含む）

その場に居た全員が、首と手の平を同時に横に振った。おお、異なる国が足並みを揃えた瞬間だ。異文化交流ってすばらしい。

「何だ、意外と飲み込み悪いんだね」

全員の額に血管が浮き出た。おお、異なる国が足並みを以下略。

「「これまでのお前の発言で状況が飲み込める奴が居るとしたらそれは嘘をついてるか、お前自身かどちらかしかない！」」

俺とアルバートがきれいにハモった。どうやらアルバートは日系みたいだけど、アメリカ国籍だから　おお、異なる国が以下略。

「しょうがないなあ、一から説明するよ、全く……めんどくさいなあ。逆逆君、やっといてって言ったのに……最近買ったゲームが佳境だから任せたって何だよなあ」

あの野郎、俺達がこんな状況だったのに自分はゲームやってんのかよ！　Xナンバーは1つ咳払いをすると真面目な顔になった。

「この世界はキミ達が居た世界とは全く異なる軸にある。つまり、この世界ではキミ達は存在しない事になる。そして、当然その存在は邪魔だ」

どうやら俺の推測は当たっていたらしい。だとしたら急がないとな

……

「（邪魔、ってどういうことなんだ？）」

エミリオが尋ねた。Xナンバーはふむ、と考え込むと説明を再開した。

「簡単に言ってしまうえば“逆境無頼力　ジ”の世界に突然“プリユア”が出て来る様なもののさ」

分かりやすい例えだ、変態にしては。でも、エミリオにそれが分かるのか？

「（なるほど。分かった）」

しかしエミリオはふんふんと頷いた。ジャパンアニメ、恐るべし。

「違う例えでたとえると、そうだなあ……」

いや、誰も頼んでないぞ。

「SHU FLEE! にゴ　ゴ13が出て来るみたいにな」  
「なるほど！」

涼が手を叩いた。何でこいつは分かるんだろーか。

「まあ、そこは恭介君辺りが解いているんだろうけど。逆逆君からは頭脳明晰と聞いているよ」

「そんなんじゃないさ」

「さて、ここでキミ達は違和感を感じないかな？」

何のことだ？ 全員が考え込んだ。そして、1つの疑問が浮かび上がる。

「何でマーシャの武器倉庫はこの世界にあつたんだ？」

「そう、そこだよ。本来君達が居ないということは、アーチボルト家も存在しない。にも拘わらず武器倉庫はこの世界に存在する」  
考えてみればそうだ。これでは俺の仮説と矛盾する。

「そこは、僕と逆逆君が頑張ったのさ！ 褒めて褒めてー」

Xナンバーが頭を差し出す。

ガッ！ っとアルバートが無言でアスファルトにそれを叩きつけ、ズシャーッと叩きつけたままの頭を裏路地にまでスライディングさせ、

グシャ！ っと中華料理屋の裏にあつた生ゴミが大量に入ったポリバケツに放り込んだ。

「大丈夫かな……？」

涼が心配そうに呟く。しかしそれは杞憂だったようで、Xナンバーは頭にアジの頭や林檎の芯や食いかけのチンジャオロースを載せた愉快的状態で立ち上がった。

「痛つてえ！ 俺の顔を秋刀魚の薬味にした拳句に生ゴミにする気か！」

「うるさい！ 気持ち悪いわ！」

アルバートがキレた。つかXナンバー……一人称、統一しろよ。

「こいつが俺達の作者だなんて、未だに信じられんな」

ああ。逆逆がそんな事を話していたような気がする。同じ学校で同じ部活だっけ？ 通りで雰囲気似ていると思った。

「まったく。マジメに話をしようと思つてたのに」

嘘つけ、と言いたげな視線を浴びつつ、Xナンバーはゴミを手で払



う。ってかゴミ綺麗さっぱり落ちてるし。作者パワー？

「さて。キミたちがこの世界で邪魔者だという所まで話したかな？」腰のリボルバーに弾丸を込め、レバーアクションライフルにも肩掛けベルトに挟んだ弾薬を装填しつつ、Xナンバーは一息ついて天を仰いだ。

「平行世界と通常の世界ってのは、対極に位置している。陰と陽つてやつだね。光と闇、破壊と再生、男性と女性、正物質と反物質。対をなす存在があつてこそ、世界は安定するんだ。政治だつて保守派と革新派のバランスがとれていないと崩壊するだろ？」

「片方が強力になれば、当然バランスが崩れ、それは自壊する。女性性が沢山いても、男性が一人ならばゲフッ」

Xナンバーが盛大に鼻血を吹いた。一体何を妄想したってんだ。予想はつくけど。

「と、とにかくそれは好ましくない事態。シーソーは傾いたままとなり、シーソーとしての役割は果たせなくなるわけだ。それがこの世界でも起こり始めている。キミたちも見ただろ？ 夜になると全く別の世界に切り替わっていく様を。平行世界が対になる世界を夜だけとはいえ、完全に塗り替えているんだ。つまり」

「平行世界が大きくなっているって事かな？」

「ザッツライ！」

涼の言葉にスマイルとサムアップ。本当にテンションが高い奴だ。

「オイチャンもよく分からないんだけど、ボクと逆逆の平行世界が寄せ集められてるらしいんだ、人為的に。それで私と逆逆は原因究明の為に、この世界に潜入した。するとビックリ、キミたちも又この世界に紛れ込んでしまったじゃないか！ 理由を聞いて二重に驚いたよ。キミたちは『死んで』ここに来た。だが何故キミたちが死ぬんだ？ ある種の創造主である俺達の改変無しに、何故キミたちが死ぬ？ 答えはたーんじゅん。何かがキミたちを呼び寄せたんだ」

「（つまり、ワタシ達を必要としているモノ、あるいはヒトがいる

「ってこと？」

「（正確にはキミたちの軀<sup>からだ</sup>だ。必要としているだけならそのまま拉致すればいい）」

マーシャの質問を一部肯定するXナンバー。ってかコイツ英語話せるのかよ。なんかム力つくな。

「拉致……そういえば！」

アルバートが何かを思いたし、Xナンバーに問う。

「俺と恭介がさらわれた時、スーツを着た、丁度お前みたいな変態と出会ってな。そいつが『Xナンバーの協力無しには君をここに連れて来れなかった』と言っていた。Xナンバー。お前はこの件について、何か囓<sup>か</sup>んでいるのか？」

「スーツ……姿？」

熟考するXナンバー。皆が見守る中、時間だけが過ぎていく。ぽつくぽつくぽつく、ちーん。

「僕チンよく分かんない。最近記憶が飛び気味なの」

「死ぬ」

アルバートがその首を片手で締め上げた。奴の両足が宙に浮き、その口から変な音が聞こえて来る。しかし誰も止めに入らない。ストレス溜<sup>ため</sup>まつてるからな。

「ぽつくり！」

Xナンバーが白目を剥いてぐったりとなった。……死んだか。にしても自分の口で「ぽつくり」って言う奴、いるんだな。世界は広い。アルバートがソレをボロ雑巾のように放り投げる。哀れ奴の体は再び中華料理屋のゴミ箱に突き刺さった。

「これで少しは世の中も良い方向に向かうだろう。行こうか、皆」

「ちょっと待てやい！」

「何だ、死んでなかったのか」

「ひどくない!？」

Xナンバーはポケットから「山猫は獲物を逃さない」と書かれた扇子を取り出して広げた。ちなみにゴミ箱に入ったままだ。頭には色

的にやばそうな感じの酔豚が乗っかっている。

「しかし、スーツの男ねえ。ふん、面白くなつてきやがった」

「格好つかないから酔豚どかせ。眼も当てられない」

俺が声を掛けるとXナンバーは嬉しそうに顔を輝かせた。

「キミはそれがしに声を掛けてくれんの！？ やつさし！ それ  
が美少女だつたらなお良いんだけどなあ。そういえば聞いてるよ  
？ 逆逆君から。キミ、女装ができむ」

言い切る前に、俺はこいつの口にルシフェルの銃口を突っ込んだ。

「黙って死ぬか、しゃべって死ぬか、好きなほうを選ばせてやる」

「どっちも死んじゃうよね？」

「みたいだな」

「分かった、言わない、約束する」

こくこくと頷くXナンバー。もう一度睨むと俺は銃口を外した。

「んで、正直なところどうなんだ？ 覚えあるのか？」

俺が尋ねるともう一度熟考するXナンバー。

「いや、どうやら我々作者陣も調査する必要があるみたいだねえ。

というわけで、ここいらで退散させてもらふヨン」

そんなことを言いながら奴はロデオーイにまたがるとラジカセの  
ボタンを押した。しばらくして、悲しい旋律のピアノが聞こえてく  
る。

「何でショパンの『別れの曲』……」

アルバートが呟いた。全くだ、理解がでせん。

「ではさらば！ 願わくばまた出会わんことを！」

できれば二度と会いたくない。そんな俺達的心情を知ってか知らず  
か、Xナンバーは颯爽と走り去って行った。

はあ、思わず溜息が出る。

横を見ればアルバートも同じように溜息をついていた。

「（おい、夜が明けちまつたぜ）」

エミリオが空を見る。東の空から太陽が昇ろうとしていた。いや、  
いくらなんでも早過ぎないか？

「ここではわたしたちの世界のじょうしきは通用しない。それを言  
ったのはきょうすけ」

アンプが俺を見上げて言った。

「……ああ、そうだったな」

俺達は朝の光に眼を細めた。とにかく、今は情報が必要だ。逆逆や  
らXナンバーが何か掴むまでは戦い続けるしかなさそうだ。……い  
いのか？ これで。

## 第4話：T a s t i n g P e a c e

疲れていたもので、日中に眠る事はさほど苦ではなかった。一日二四時間で体内時計を動かしておかなくては後に障る。

「（やっぱりオレ達には、なんも出来ないのか？）」

朝食の席、エミリオは慣れない箸でメシを食いながら俺達に問う。

「（作者が深く絡んでいる問題である以上、アイツ等を探さなければ）」

俺は味噌汁を飲むと立ち上がる。

「（どこ行くんだ？）」

「（シューティング・レンジだ。腕を上げることは難しいが、鈍らせるのは簡単だからな）」

ここのところ、難しい事を考えすぎている。少し気分転換をしたかった。

「（そうか。にしても、このハシつてのは使いにくいな。何でアジア圏の人間はこんなんで飯が食えるんだ？）」

首を傾げるエミリオ。ナイフやフォークに慣れてしまった人間には使いにくいものだろう。マーシャはすぐに使えるようになったんだがな。

「（郷に入っては郷に従え、だ）」

「（そんなもんかねえ）」

彼は天井の蛍光灯に箸をかざし、ペン回しの要領でクルクルと回し始めた。行儀が良くない。

シューティング・レンジに行くと、すでに恭介が右手に握った銃を的に向かって構えていた。

「おはよう恭介。……恭介？」

声を掛けるが反応しない。真面目な顔で的を狙っているままだ。聞こえていないのか？

「あ、アルバートさん。おはようございます」

声のしたほうを振り向くとイヤーマフを着けた涼が手を振っていた。そして申し訳なさそうに苦笑する。

「恭君、こうなっちゃうと反応しないんです。本を読んだときとかはそれに入り込んで、地震があつたのに気付かなかつた事もあつたなあ」

そのときのことを思い出したのか、涼がくすつと笑った。そして近くにあつた休憩用のベンチを指差す。

「座りませんか？ 少しお話したいです」

「すごい集中力だな。どうなってるんだ」

ベンチに座って、銃を構える恭介の背中を眺めながら思わず呟いた。涼がそれに頷く。

「ほんとにねえ。だけど、昔からわたしが困ってたときには一番最初に気付いてくれるんですよ」

嬉しそうに微笑む涼。この際だから前々から気になっていた事を尋ねてみようか。

「君は……彼のが好きなのか？」

それを聞いた瞬間、彼女は耳から首まで赤くなって俯いてしまった。おいおい大丈夫か？

「わかります？」

しばらくして涼が小さく口を開いた。

「……まあな」

そりゃ、あれだけ過剰に反応していれば誰だって気付くだろ。バレていないとも思っていたのか？

「よく言われるんです、考えてる事が手に取るように分かるって。だけど恭君だけは未だに気付かなくて」

「信じがたいが、そうなんだろうな」

これだけ分かりやすい反応をする彼女の想いに気付かない人間ってのが一番近い位置に居るのは、かなりもどかしいんだろう。

「なあ、君はどうして恭介の家で暮らしているんだ？」

このままでは彼女が赤面しすぎて死ぬ可能性があったので話題を変える。

「あ、そっか。アルバートさんは知らないんだっけ。わたしが小学生のときに両親が2人とも死んじゃって、恭君のお父さんに引き取られたんです。それからはずっと一緒に」

「その、大変だったんだな」

彼女の明るい表情からは想像もつかなかったが、かなり重い過去を背負っていたようだ。申し訳なさそうにする俺を見て、涼は慌てて首を振った。

「だ、だけど皆が励ましてくれたから、今はもう寂しくないですよ？ 恭君もアンプもいますから」

「そうか、よかったな」

「はい！」

笑顔で頷く涼。すると恭介がシューティングレンジから出てきた。

「おはようアルバート。涼も」

「ああ、おはよう」

「うん、おはよ」

「なあアルバート、聞きたい事があるんだけど」

「何だ？」

「銃剣の練習をしたいんだけどなんか良い方法あるかな」

なるほど。的だけじゃ撃つ練習しかできないか。どうしたものか、マーシャに尋ねてみるか。

「それと、涼。お前は何で死んだんだ？」

そう聞かれた涼は少し赤くなりながら答えた。

「びつくりしたから……」

「は？ びつくり？」

「恭君が車に轢かれたって連絡が来て、ショックでそのまま……」

そりゃそうだ。普通の反応だ。

「ちよつと待て。お前にその連絡を入れたのは誰だ？」

恭介が首をかしげた。ん？ そう言われてみれば、確かにそうだ。

俺達が死んだのを知っている人間はいないはず、それは肉体が次元の狭間とやらに放り込まれているからだ。それをなぜ……？

「うーんと名前は聞かなかったんだけど、スーツ着てたよ」

「スーツ？ それってまさか、ちよつと背が高くて、変な事ばっか言っただけか？」

涼はしばらく考えると頷いた。

「そう、たぶんその人だと思う」

「俺、アルバートがひき逃げ……アンブとエミリオはダークマター

……涼とマーシャはショック死……？ まさか、でもそんなハズは

……いや、ありえない事はない、か」

何事か呟いた後、恭介は俺の方を向いた。

「アルバート、これは仮説だけど……」

「何か分かったのか？」

「だから仮説だって。俺達の死因、バラバラなようだけど共通点があるかも」

「共通点？ どゆこと？」

涼の言葉に頷くと、恭介はポケットからメモ帳を取り出した。

「俺とアルバートの死因、ひき逃げだよな。それをやった犯人が同じ人間、もしくは同じ思想で動いていた人間達って仮定しよう。俺が死んだ場合、高山家でメシを作れる人間がいなくなる。アルバートが死んだ場合、部隊の資金が動かせなくなるんだよね？」

「ああ、あいつらに貯蓄なんてものはないからな。同じようにメシが食えなくなったはずだ」

恭介がメモ用紙にさらさらと何かを記入する。

「うちは、それで涼が飯を作ってアンブが食って死んだ。そしてそっちは、」

「金のないエミリオがマーシャの飯を食って死んだ……」

「さらに、こっちは誰かが涼に俺が轢かれた事実を教えるショック死させた」

「マーシャは謎の請求書が大量に来たショックで死んだ。恐らく俺



が死んだ事で溜まったツケだろう。……てことは、まさか」

恭介が頷く。

「この出来事が、誰かの思惑通りに動いていたとしてもおかしくはないんだ」

「へ？　へ？」

涼が一人で首を傾げていた。恭介が分かりやすく説明する。

「俺が死んだら飯が食えなくてアンブが死んだ。お前は俺が死んだショックで死んだら？　アルバートが死ぬと、金が動かせなくてエミリオが飯を食えずに死んだ。マーシャはその後の請求書でショック死。俺とアルバートが死んでから、ドミノ倒しのように皆が死んだ。これを狙っていた奴、もしくは奴らが居るのかも、って事。そして、スーツの奴が今のところ一番怪しい」

「そんなことができるのか？」

「ありえない事はない。そういうことだと思う」

兎にも角にも作者連中が情報を掴むまで指を咥えて待っているわけには行かない。今のところはスーツの男を捜す事にしよう。

「お前、よくそんな仮説を立てられるな」

「昔から本だけは読んでたからさ、伏線の予想はよくやるんだ」

恭介はそう言って苦笑した。

「で、銃剣の訓練か」

アルバートは腰から抜いたM9銃剣をSG552に装着する。チャキツと金属同士が噛み合う音がした。

「元々銃剣は、単発式先込銃を持つ兵士が再装填の際、騎兵の突撃に反撃できるように装着したものだ。つまり、長い銃ほど槍のように扱え、地面から効率的に馬上の騎士を貫けるというわけだ」

ところが、と人差し指を立てる。

「塹壕や市街地戦、ジャングル等の戦闘が増えるに従って、接近戦に有利なようにライフルを短縮化し始めた。強力な銃弾を遠距離で飛ばし合うのではなく、接近戦で反動の低い弾をばらまく戦い方が

主流になってきたんだ。良い例が第一次世界大戦から登場したサブマシンガンだな。第二次からはナチス・ドイツのStg44、アサルトライフルの走りが登場した。ベトナム戦争の時には米軍もM16ライフルを短縮した物を特殊部隊に提供していた。ただこれらの短い銃を使う場合、槍として扱う銃剣のメリットは落ちてしまう。だが俺は、短縮した得物ほど着剣するメリットは高いと俺は考えている」

「どういう事だ？」

「近年トレンドの、『CQB』だ」

「I CQB……Close Quarters Battle（閉鎖空間における戦闘）。武装勢力が建物内に人質を取る事件が多発する中で編み出された戦闘方法だ。室内という狭い環境内でいかに素早く制圧を行うかに特化されたライフル、ハンドガンそして徒手格闘の扱い。彼ら民間特殊部隊Demoniac Pigeonsは正に専門家だろう。」

「刃物は銃に間合いこそ劣るものの、圧倒的なアドヴァンテージがある」

それは攻撃範囲だ、とアルバートは続ける。

「銃弾はその口径の範囲のみ高い殺傷能力を有する。広くてせいぜい直径1cm程。だがナイフを始めとする刃物を使えば」  
ビュッ！

着剣した銃を真横に振り抜く。

「より広範囲に攻撃ができるんだ。つまり、銃剣の間合いになれば銃よりもこちらが有利という事。剣での戦闘もまだまだ廃れたわけじゃないというのが、俺の意見だ。槍としてのみ使うだけでなく、銃全体を武器として扱う。これにより只ナイフを持つよりも攻撃にバリエーションが生まれる。というわけで、早速始めるか」

「……始めるって、何を？」

「訓練がしたいんだろう？」

ニヤリと笑うアルバート。何だろう、イヤな予感がする。

「どつからでも来い」

「どつからでもって、これ真剣なんだぞ？ 危なくないか？」

「だからプロテクターを付けているんだろ？」

的を取っ払ったシューティングレンジの中央に、俺とアルバートは互いに刃先を突きつけ対峙する。剣道の防具を3割増にしたようなアーマーを体中に着ているが、これ本当に大丈夫なんだろうな？

ほんとに、いいのか？ これで。

「安心しろ、銃持っただけの高校1年生に負けるようじゃ対テロ部隊は務まらない。お前ごとき、大した相手じゃないしな」

無性にム力つく言い方されてるけど、慎重に行かないと。

「頑張つてねー」

涼の声が届く。アルバートがニヤツと笑った。

「ほら、彼女が応援してるぞ？ 格好悪いところ見せられないな、彼氏としては」

作戦変更。速やかに鎮圧、場合によっては殺傷も可。

「だから違うつて言っただろ！？」

間合いを一気に詰めて右の銃剣を振り上げる。逆手に握った銃剣が風を切る音がした。

「やる気になったか？ だが動きが直線的過ぎる」

アルバートに体を僅かに逸らしただけでかわされた。がら空きの脇に拳を叩き込まれる。

「これで1回死んだ」

とん、と体がよろめく。とりあえず距離を取って体勢を立て直した。

「お前の銃剣は逆手、1撃1撃を確実に当てないと反撃されたときに防ぎようがない。リーチはせいぜい30cmだから相当踏み込まないといけないし、かなり変則的な動きを要求される取り扱いが難しい武器だ」

と、余裕で解説するアルバート。

「逆にアルバートの銃剣は間合いが長い分、懐に入り込まれると振

り回しづらい。違うか？」

「その通り。よく分かってるじゃないか」

「仲間に同じような武器を使ってる奴がいるんだ。槍に似てるやつ」  
アルバートの弱点は懐。何とかそこまで入り込まないと勝機はない。  
ここは、とっさの思いつきだけどやってみるしかなさそうだ。

「再開だ、恭介」

走り出し、さつきと同じように右で斬り上げる。アルバートが首を  
傾げながら軽くかわした。

「聞いてなかったのか？」

「聞いてたよ。その上でっ！」

体を左に反転。脇腹に迫る拳を左の銃剣で防ぎ、右の銃剣を右から  
左へ振りぬく。刃がアルバートの眼前を掠めた。 浅かったか！

「今のはやるじゃないか」

「お褒め頂光荣の至りだ」

今度はアルバートが距離を取る。

「次はこちらからだ」

低く構えた刃が地面を舐めるように迫ってきた。突きか！

「あつぶね！」

とっさに左の銃剣で弾く。しかし彼の動きは止まらなかった。右ひ  
ざが鳩尾に入る。いくらボディーマーしてるとは言っても結構痛  
いんですけど……。

「だ、大丈夫？」

涼が心配そうに立ち上がる。何とか頷くと俺は立ち上がった。

「蹴りとか、アリですか……」

「戦い方にアリもナシもない。生きてる奴が勝者だ。それと、銃剣  
で攻撃を防ごうとするな。刃が痛むし、状況にもよるが大抵はかわ  
した方が次の行動に移りやすい」

やつぱ、そこら辺は戦場を生きてきた人間なんだな。一緒にメシ食  
ったりしてたせいで失念してた。

「今日は最後まで付き合ってもらっからな、アルバート」

「お前が強くなるのはこっちとしても嬉しい事だ」  
こうして朝の時間が過ぎていく。

「（これ、何やってんだ？）」

「（銃剣の訓練だつて。きょうすけが）」

「（おおアンプか。マーシャは？）」

「（起きないからそのまま）」

「（だろうな、あの眠り姫は）」

後ろからスペイン語が聞こえる。エミリオとアンプか。

「せつ！」

何回目になるかも分からない恭介の斬撃をかわす。俺達が訓練を始めてから2時間が経過しようとしていた。

にしてもこいつ、上手くなるのが速すぎないか？ 今のはかなり危なかったぞ？

「また外した……次こそつ！」

いよいよ動きが読めなくなってきたな……。そういえば聞きたい事がある。

「お前、なんで、涼に、指導を、頼まないんだ？」

体を左右に振って刃をかわしながら尋ねる。答えはすぐに返ってきた。

「あいつ、いつもは、あれだけど、刃物握ると、めちゃくちゃ、強いんだ。だから、銃剣、だけじゃ、レベルが、高すぎて、練習に、ならない、つと」

左から来た銃剣を後ろに仰け反って避ける。一旦後ろに下がり呼吸を整えて恭介が続けた。

「俺の異能は銃にだけ有効だから、銃剣は効果がないんだよね。

そろそろ休憩する？」

「疲れたのか？」

「いや、まだいけるけどさ」

「だったら続けるぞ」

夜まではまだ時間がある。今のうちにやれる事をやっておかなければ。

「おなか空いたー」

涼が呟いた。恭介がそちらを見ずに答える。

「分かった分かった。後でチャーハン作ってやるから、今は我慢しとけ」

「ほんとに？」

「こんな事で嘘ついたってしょうがないだろうよ……って」

俺の突きをバックステップでかわす恭介。そこへ追撃に斬り上げた。しかし、それも首を上逸らして避けられた。

「チャーハン？ 何だそれは？」

「アイツの好物なんだよ。昔っから、せがまれては作っててさ」

「そうか、確かここにはキッチンもあるから後でマーシャに案内してもらえ」

恭介の右の銃剣が突き出される。手首を掴んで逸らし、そのまま捻り上げた。その腕から銃が落ちる。彼が膝をついた。

「痛い痛い痛い！ アルバート！ ギブギブ！」

解放すると、手首を擦りながら立ち上がる。その目に少し涙が溜まっていた。少し力を入れすぎたか？

「いけると思っただけだな……やっぱり敵わないや」

「当たり前だ。戦闘の技術っていうのは一朝一夕に身につくものじゃない」

再び間合いを取り対峙する。

「よし、これで最後だ。メシの時間もあるしな」

「よっしゃ、来い！」

下から風音を上げて迫る刃。フェイントだ。腰を軽く捻って回避して、本命の左手を弾く。だが弾かれた反動を利用して、陽動としていた右手を突き出される。ライフルのレシーバーで防ぎ、牽制の口キック。恭介は飛び退き、またもや距離が離れる。

「……なかなか技のバリエーションが増えたじゃないか。変則的な

行動は相手のミスを誘う」

「なかなかミスしてくれないじゃんか」

「バレバレだ。もっとダイナミックに攻撃を仕掛けなきゃならない」  
俺は空中にSG552を放り投げる。驚きに見開かれた恭介の目は明らかに（武器を捨てるなんて……）と語っている。俺は勝ちを確信した。

落ちてきた愛銃を、俺は思い切り彼に向かって蹴り込む（……）。同時にダッシュ。恭介が飛んでくるライフルを避けるために屈む。行動に思考がついて行っていない良い例だ。

宙を飛ぶ武器のハンドガードを握り、予め与えた加速に遠心力をつける。恭介が武器を向けたその時には、折りたたみ式ストックがまるで斧のように、彼のヘルメットを真上から強打していた。

「頭蓋骨陥没、脳内出血で死亡だ」

「……痛つてえ〜！」

「『変則的な行動は相手のミスを誘う』。分かっただろ？」

「身をもつて理解したよ……」

延長したバレルからM9銃剣を抜き取り鞘に戻す。蹴飛ばして殴ったぐらいでは、このスイス製のタフなライフルに影響は無い。

「さて、腹が減っては戦は出来なからな。メシだ。マーシャを起こしにいこう」

「何だよこれ……」

食堂のドアを開けると、寝巻き姿のマーシャが紅茶とスコーンを用意してティータイムを楽しんでいた。いや、楽しんでいたとは語弊があるかもしれない。

「寝てる……よな？」

「寝てる……ね……？」

「ZZZZZZ……」

寝ながら紅茶を入れて飲んでるってのか？ うん、目を閉じてるし

……寝息立ててるし……

「長年の習慣が、軀に染み着いているんだろうな。恐ろしい女だよ……」  
横にいたアルバートが呟いた。イギリス人がみんなこうで無いことを切に願うよ。

このままじゃ昼に遅れる。とりあえず彼女を起こすことにした。

「もしもし？ もう昼だけど」

俺が彼女の肩へ手を伸ばした時。

「危ないっ！」

気がついたら涼がグルカナイフを峰打ちで振り下ろしていた。

ガッ！ と音がして地面に転がったのはマーシャの拳銃 C Z 7

5 S P - 0 1。

何があつたのかを認識する前に、彼女はフォールディングナイフを抜いて俺に襲いかかってきた。何だってんだ！？

「うわ！」

とつさに身を翻してかわす。前髪が少し切れたらしい、目の前を舞っていった。

「Z z z z z . . .」

大きく体制を崩したマーシャが振り返りながらナイフを振った。すぱん！ と花瓶にささっていた花が床に落ちる。……おいおい勘弁してくれよ、今は防具着けてないんだぞ？

「どーすりゃいいんだ？ こういうときは」

アルバートに尋ねる。彼は腕を組んで答えた。

「いくつかあるが、一番手っ取り早いのはあいつを倒す事。二番目は時間が経過するのを待つ。最後はお前が殺される、だな」

「ちなみに、時間はどれくらい？」

「最短で5時間だ」

はあ、やるしかないのか。

「勝てばいいんだな？ 攻撃は寸止め？」

「ああ、止めは刺さなくていい」

俺は双銃を構える。その横に涼が立とうとするのを眼で制した。



「やばくなるまで手を出さないでくれ。これが今日の課題らしいから」

「だけど……」

「頼む」

「……分かった。でも、ほんとに危なくなったらわたしも入るからね」

しばらくして、涼は渋々グルカナイフを下ろした。

「ありがとな」

「どうせ言ったって聞かないんでしょ。　マーシャさん、構えを見ただけで分かるけどかなり強いみたい。気をつけて」

その言葉に頷くと俺はマーシャに眼を向ける。構えはどの攻撃からでも対応できる中段。

「……くう」

彼女が突然間合いを詰めてきた。横薙ぎに刃が振られる。クソッ、何て速さだ！　インストール 狂制御　状態の俺と同レベルじゃねーか？

「だけど、浅い！」

間合いがアルバートと違って短い。お陰で回避に移れる時間が長かった。それを食堂の中央に設置された長テーブルの天板を転がって避ける。その上から容赦なくナイフが振り下ろされた。刃渡り10センチほどのフォールディングナイフが天板に突き刺さり耳元で、ガッ！　という音が聞こえる。なんていうか、バーサーカー 狂戦士って奴？

「なんとか反撃に回らないと……後手になってるな」

とりあえず、牽制で近くのイスを一脚投げてみた。

「……すう」

真っ二つ。二つになったイス（だったもの）が左右に飛んでった。この人直死の魔眼でも持つてんじゃねーのか！？　吸血鬼程度さくつと殺しそうだぞ！？　いいのか？　これで！？

「寝ている状態のそいつは化物だ。並の人間なら即死だな」

「つまり、想　真心状態ってか」

アルバートと涼が首を傾げる。分かるのは俺だけか……少し悲しい。

「……ぐう」

どうやらマーシャはナイフが抜けなくなっただけらしい。これはもしかして？

「もらったあ！」

（多少の罪悪感を感じつつ）腕を蹴り飛ばして長テーブルを飛び越える。後ろによるめく彼女の背中に回り、組み伏せようとした。

「その程度でやられるような人間はうちの部隊にはいない」

アルバートの言葉と同時に、俺の手から銃が消える。一瞬の事で分からなかったが、どうやら手首に食らった手刀で弾き飛ばされたらしい。膝を突く俺の遙か後ろで銃剣が床に突き刺さった。あれの回収は無理か。

「なるほど…… 武器はナイフだけって訳じゃないんだよな」

しかも今までの動きは全て片手でやっていたらしく、もう片方の手には刺さっていたナイフが握られていた。

「恭君、もう！」

涼がグルカナイフを構える。俺は溜息をついて頷くと言った。

「ああ、分かった。お前を一回だけ頼る。だから、そこにある掃除用のデッキブラシ取ってくれ」

「へ？ ぶらし？」

もう一度頷く。少ししてこちらに飛んで来たデッキブラシを掴んだ。ちよつと軽いけど長さはこれくらいだったっけな。

それでマーシャの腕を弾いて一旦下がる。距離は5歩分。

「恭君、それって……」

デッキブラシをバトンのようにクルクル回してから下段に構える。かつて、将の家がやっている槍術の道場に通っていたときに習った構えだ。

「俺だって武器が銃だけって訳じゃないんだ」

まあ、そんな見栄を張ったところで俺が槍術を習ってたのって2年くらいだし、デッキブラシじゃ相手の攻撃受け止めたところで真つ二つなんだけど……。だから、

「先手必勝！」

デッキブラシを前に突き出す。

当然のようにジャンプでかわされた。

横から柄で叩く。

右腕でブロック。このときにマーシャが着地。

上から振り下ろす。

横に転がって避けられた。

追い討ちで下段で左に振る。打撃こそ当たりはしなかったが、ブラシの丁の字にとこに襟首が引っかった。

ラッキ！ そのままテーブルまで引きずって、

「これでっ、終わりだ！」

角に頭が当たるか当たらないかの所で寸止め。しかし勢いまでは殺しきれなかったのか、彼女の首が絞まって変な声が漏れた。しばらくして呻くような英語が聞こえてくる。

「（どうしてこんなところで寝てたのかしら？ 襟にブラシが引っかかっているし、ねえアル……あら？ キョウスケ？）」

どうやらマーシャは無事に眼を覚ましたようだ。……疲れた、二度とやりたくねー。

「寝起きで悪いんだけど、キッチンどこかな。昼飯作りたいたいんだけど」

「（……ああ、もうそんな時間なのね。分かったわ、こっちょ）」  
アルバートの通訳を聞いた彼女が頷く。後は材料が揃ってれば良いけど。

「（お疲れ様、アルバート）」

カウンター式のテーブルに着いて一息ついていると、横からアンプが声を掛けてきた。俺の右隣の席にちょこんと座り、足を振りながらこちらを見る。

「（疲れた？）」

「（いや、そうでもない。こちらで鍛えられるしな）」

「（そう、ならいい）」

それだけ言っと、彼女はカウンターの奥でフライパンを振る恭介に眼を向けた。

「（きょうすけ、楽しそうだった）」

「（楽しそう？）」

俺が尋ねるとアンプは恭介を見たまま頷いた。

「（きょうすけの両親は、きょうすけが中学生のときに海外に行っちゃったから……たぶん年上に思いつ切り全力を出せる機会がなかったせいだと思う）」

「（なるほど、それであの料理の腕か。涼は飯が作れないらしいし、あいつが作ってるんだろ？）」

彼女は眉間にしわを寄せて言う。

「（死んだときのこと思い出させないで。ほんとに不味かったんだから）」

「（すまん、そうだったな）」

「（よお、二人でなに話してんだ？）」

いつの間にやら左隣にエミリオが座っていた。

「（ああ、たいした事じゃない。それよりお前達、訓練の途中から姿が見えなかったが何をしていたんだ？）」

「（ん？ イイ事）」

「（エミリオ、お前まさかッ）」

俺が問いただそうとする前に、エミリオが手を着いていたテーブルに9mmパラベラムがめり込んでいた。見ると、恭介がルシフェルを握って立っている。その姿は、まるでその銃の名の通り墮天使だった。

「I dare you to say that again.  
（もう一回言ってみろ）」

「待て恭介！ なんかお前英語喋っちゃってるぞ！」

これ、キャラクターの設定としてかなりやばいんじゃないだろうか。しかもこいつ、若干目が紅くなっていたような……？

「べつになにもしてない。ただ書庫で調べ物のてつだいをしてもらっただけ」

アンプが日本語で答える。しばらく考えた後、彼は銃を下ろした。「何だ〜ちゃんと言ってくれないと、勘違いしちゃうじゃんか〜」笑顔でフライパンの前に戻る。しかしその背中からは、「次ふざけたら……どうなるか分かるよな？」みたいな殺気が放たれていた。「遅くなっちゃった〜ってあれ？ エミリオさん、どしたの？」後から来た涼が俺に抱きついたままのエミリオを見て首を傾げる。しばらく考えて、

「あゝ、そういう趣味の人なんだっ！」

「（違う！）」

エミリオが声を上げた。こうして昼の時間は過ぎていく。

## 第5話：Another's.

夜。皆で情報収集のために動き出した。

というか、あの武器庫から出ないとゾンビに突破されたらヤバくね？ ということで、しばらく出歩く事になったのだ。

そんなわけで俺達は夜の大通りを歩いていた。もちろん各々武器は構えている。

その頭上には紅の月が輝いていた。アルバートが見上げて呟く。

「赤い月か……不吉だな」

全くだ。先程から道に影は見えない。呻き声一つしない、俺達の足音だけが響く世界。不気味にもほどがあるよ、これ。

「！」

突然アンプが立ち止まる。何か感じたようだ。

「ん、どうしたアンプ。敵か？」

「し。なにか聞こえる」

俺が尋ねると人差し指を口に当てて耳を澄ませた。しかし、よく聞き取れないようだ。

「だめ、もつとちかづかないと」

さつき以上に警戒を強めながら、さらに前に進む。5分ほどしてなんか聞こえてきたぞ。つーかさつきからアンプの顔が若干うんざりした様に見えるのは気のせいかな？

『うーさぎうさぎっ、なーにみてはーねるっ、じゅーごやのおつきさーまみてはーねるっ』

歌か？ それと何かを打ち付ける様な音も聞こえる。

「あれ、人か？」

アルバートが呟く。そう言われてみると、2人の人間が見えた。しかも片方は見覚えがある。

「お前ら、何やってんだよ……」

そう、俺達の作者。逆逆とXナンバーだった。何で公道のと真ん中

で歌ってんだろう。しかも杵と臼で餅つきながら。ちなみに逆逆がこねる係りで、Xナンバーがつく係りのようだ。どうでもいいけど、っていうか何だよその頭につけたウサミミは……ちなみに逆逆が垂れ耳で、Xナンバーが立ち耳だ。本当にどうでもいいけど。

「やぁ高山君。見て分らないか？ 餅つきだ餅つき。こんなに良い月が見えたのでな、我々の餅つき職人としての魂が揺さぶられたんだZ E！」

「はいはい、んでなにしてんだお前ら」

「……対応ちべてっ」

Xナンバーが小声で言った。

「それはそうと、餅食べる？」

「この前に言った、この世界について調べるってのはどうしたんだ？」

逆逆が差し出したいいろんな種類の餅が乗ったお盆を無視してアルバートが尋ねる。二人は仲良く首を傾げると同時に答えた。

『僕チンよく分かんない。最近記憶がとび気味なの』

『死ぬ』

俺とアルバートが同時にその首を締め上げた。

『えいめん！』

「どこの神父だお前等！」

二人はほぼ同時にアツチの世界に旅立ったようだ。たぶん「永眠」と掛けたんだろう。面白くない。

「あつ、これおいしい」

「食うなよ！」

涼達はお盆から餅を取り出して口に運んでいる。

「おい恭介、このヨモギ旨いぞ。冷めない内に食べ」

「アルバート、あんただけは信じてたのにつ！ って本当に旨いな！」

結局みんなでお餅を道端ではおぼる事になった。実は夜が早く来たので、夕食を食べていなかったんだ。この餅をついた人間は道端で

伸びてるけど、まあいいや。考えると食べ物がマズくなる。

「勝手に無視するなっ！」

チツ、まだ生きてやがった。

「凄い生命力だな……お前等ゴキブリかよ」

「？ ウサギだよ？」

二人して余った餅を食べながら、臼の周りを「イナバ！ イナバ！」とか叫びながらぴょんぴょん跳ねている。きつとコレがやりたかっただけなんだろうな。なんかもう面倒くさい奴らだ。

しかし彼らはぴたりと動きを止めると、耳をピヨピヨと動かしただ。それ動くのかよ……

「おいウサギ壱号、何か不穏な音を感じるねえ」

「そうだねえウサギ弐号。特にあのビルの陰が怪しいねえ」

「……きょうすけ、なにかいる」

各々が武器を構えて警戒する中、二匹（？）は杵を手にビルに突撃していった。

『こんばつぱー！ うさちゃんだよっ！』

返事は耳をつんざくような声だった。2 mほどの鱗に覆われたボディに、鉤爪のついた4本の手。人のような形をした頭からは、妖しく光る牙が一对生えている。正に異形だった。

「そうだ、餅たべる？」

Xナンバーがお盆を出す、返事は爪の一突きだった。餅よりも肉が食いたいらしいな。

「わおっ、攻撃的っ！ だったらこつちも！ てゐっ！」

逆逆が杵を振り下ろすが、一気に間合いを開けられる。杵はアスファルトに当たって鈍い音を立てた。

「ばーか、近距離でつつこむとも思ったのかい！？」

作者陣は背負ったライフルで遠距離から容赦ない攻撃を加える。M1873と……FNCか？ 5・56mmと44・40が降り注ぎ、化物はたまらず膝をつく。ライフルの弾が切れると拳銃を引き抜く。シングル・アクション・アーミーとCz75初期型。45と9mm



mの雨あられを受け、ようやく敵は沈黙した。

「何だよアイツ……ゾンビじゃない？」

「新手だね。だけど一つ言える事がある」

俺の言葉にXナンバーは指を一本立てる。

「あの程度のスペカもかわせないなんて、大したこと無い敵だという事だ」

「いやスペカって何だスペカって」

「（今までの野郎とは違って俊敏で、防御力も高かったな。やつこさんも上級になったって事か……）」

「（アレがゾンビのように沢山出てくれば……苦戦するわね）」

エミリオとマーシャが呟いた。全くだ。だけど、これは……

「ナイトウォーカー!？」

「だね」

俺達の世界に時折現れる化物にそっくりだった。それも、これはかなりの上位種だ。

「知っている敵か？」

アルバートがこちらを向く。

「俺達が戦っている連中だ。おい、逆逆。これは一体……」

尋ねた先に逆逆は居なかった。その向こうにある道路の角を見つめて固まっている。

「どう、したんだ？」

「ああ、あっちのほうに……キャワイイおにやのこの気配がするんだZE!」

「マジで!？ どこどこ？」

Xナンバーが風のような速さで飛んでいった。先程まで視線を向けていた道路を曲がり、直後 化け物の叫び声と銃声が響く。

「何だよ今度は!」

まさか、他にも人が居たつてのか？ 次は誰だ!？

「おにやのこ確保!」

どうやらこいつ等、頭はアレなくせして戦闘技術はかなり高いらし

い。一人の少女の手を引いて帰ってきた。

「おや、君は……」

逆逆が意外そうな声を上げた。涼は少し驚いているが嬉しさを隠し切れないようだ。アンブは首をかしげている。そりゃそうか、こいつは 彼女 の存在を知らない。

「何者だ、お前」

アルバート含め、部隊の皆は警戒を緩めない。

「

俺か？ 何も言えなかった。だってそうじゃないか、何でこいつがここに居るんだ。何で、どうして

「どうして恭子がここに居る……？」

そう、居るはずがない。だって 彼女は…… 俺 なのだから。

とりあえずその場から移動する事にした俺達は、とあるファミリーストランに居た。先ほどXナンバーがつれてきた少女、名前を恭子というらしい。彼女は今、涼の隣で体を縮めていた。無理もない、あんな化物に襲われた挙句に、こんな得体の知れない武装集団に囲まれているのだから。

にしても、さっきの恭介の取り乱しようは何だったのだろうか？ まるで幽霊でも見たようじゃないか。

「（エミリオ、女性を前にして声を掛けられないなんざ珍しいな。どうしたんだ？）」

「（違うんだ）」

エミリオは首を振る。

「（彼女は『彼女』じゃあ無い）」

「（何よソレ。あの子が男だとでも）」

「（そのまさかだ。オレには分かる）」

マーシャの言葉に頷く。彼のセリフは信じられなかった。目の前に

いる恭子は中々美形で、だれもが女性だと確信を持って断言できるだろう。だが数多く女を口説いて回っているエミリオの事だ。信用に値するデータである事は間違いない。

「（自分から言い出すまで待った方が良いと思う。彼女　彼女と呼ぼう　が伏せておきたい事実という可能性もあるしな）」

逆逆が自分のライフルを持ってこちらのテーブルに走ってくる。ドリンクバーから飲み物を頂戴してきたらしい。

「敵はここにはいないみたいだね。ほれ高山君、コーラだ」

「あんたにしては気が利くな……って苦甘っ!？」

「ふっふっふ……それはコーラとコーヒーを1：1の割合で混合しているかぐべらっ!」

恭介のチョップが延髄に入ったのか、へなへなと床に崩れ落ちる逆逆。

「クスッ」

彼女の固い表情が一瞬崩れる。良い間の取り方が出来た。周りの空気が少し和らぐ。しかし、恭介の目は厳しい。恭子を睨んだまま動かなかった。

「どうしたの？　きょうすけ」

アンプが心配そうに彼の顔を覗き込む。恭介は目を伏せると、席を立った。そのままドリンクバーで水を汲んで口をすすぐ。無口な彼の表情はどこか思案しているようにも、怯えているようにも見えた。「アンプの言うとおり変だね、恭君らしくない」

涼も恭子の肩を抱きながら頷く。しばらくして、恭介は有無を言わせぬ口調で言った。

「悪いんだけど、恭子はトイレにでも行って席を外してくれるか。皆に言っておきたいことがある」

「話って何だ？」

恭子が居なくなったら店内で恭介はテーブルに手を着いた。

「恭子の事なんだけど……あんまり信用しないほしい」

「どうして？ 恭子さんはわたしの友達だよ？」

「分かってる。だとしても、俺はあいつを信用すべきじゃないと思うんだ」

「（あの子が敵かもしれないって事？）」

マーシャが問う。恭介は涼の方を見ていた。頷かない。

「そんなわけないよ！ だって、だって恭子さんはわたしの恩人で友達なんだよ？ そんな人があんな化物の味方なハズない！」

涼が声を上げた。しかし恭介は続ける。

「俺の考えでは、十中八九あいつは敵だ」

「どうしてそんな事言うの！？ どうして分かるの！？」

「それは言えないけど……でも本当だ。俺には分かる」

「恭君に分かったってわたしが納得できない！ そんなカンタンにわたしの友達を敵扱いしないで！」

ついに涼は立ち上がってしまった。俺含め全員が面食らう中、一方の恭介は落ち着いた様子で言った。

「頼む、話を聞いてくれ。理由は言えないけど、あいつは信用できない。用心に越した事ないのは分かるだろ？」

「わかんない！ わかんないよ！ どうしてそんな事言うの！？ 恭子さんは敵なんかじゃない！」

そんな涼を放置して、とにかく、と恭介は話を切り上げた。

「あいつの前でこれからの方針や弱点やなんかを言うのは控えてほしい」

「何で疑うの！？ 恭君ひどいよ！ 今度ばかりは頭きたからね！」

そう叫んで涼はファミリーストランを飛び出してしまった。その背中を恭介は眺めるだけだ。

「追いかけないのか？」

俺が尋ねると彼は少し俯いて弱弱しく笑った。

「少ししたら頭も冷えて帰ってくるよ。アイツはいつもそうなんだ」

そのまま席に座ると、さっき逆逆が持ってきたコーラとコーヒー1：

1ドリンクを飲み始めた。どうやら味が分かっていないらしい。

「（どうなんだアンプ、いつもこんな感じなのか？）」

「（わたしが二人と一緒に暮らし始めてまだ日は浅いけど、喧嘩なんかした事ない。いつもきょうすけは、ずっと意見がぶつかっても最後には曲げるから）」

隣のアンプに尋ねてみると、彼女は少し戸惑ったような顔になった。そして、「トイレ」と言って歩き去っていく。

「（だろーな。見てみるよ、あいつの手。テーブルの下でよく見えないけど、かなりイライラしてるみたいだぜ）」

見てみるとエミリオの言うとおり、彼の指は手の甲をつねったり絡めたり、せわしなく動き回っている。まるで自分を必死に落ち着かせようとしているみたいだ。

「（ねえキョウスケ。どうしてキョウコが信用できないのか教えてくれないかしら）」

「ごめんマーシャ。今は言えないんだ」

困ったように笑って、再びドリンクを飲む。相変わらず指は忙しく動き回っていた。

「ねえ……きょうすけ」

トイレから戻ったらしいアンプが少し青い顔になって戻ってきた。どうしたのだろう。

「何だ？ 急ぎじゃないなら、後にしてくれないか？ 考え事してるんだ」

「あの……きょうこが居ない」

恭介が眼を見開いて立ち上がる。ガタン、と音がしてコップが倒れた。ドリンクがテーブルに広がる。

「な」

「（マジか！？ もしキョウコが敵だったとしたら！）」

「恭介！ 行く、ぞ……」

俺が振り返ったときにはもう、恭介はいなかった。

夜明けまでまだ時間がある。俺は夜の街を走り続けていた。

（俺のせいだ……俺がちゃんと説明しなかったから……）

当てはないけど、涼がどこに行っただのかは分からないけど捜すしかない。

「インストール 狂制御、スタート 開始！」

頭に小さな痛みが走り、俺の双眸は紅く狂気を宿した。この世界にも 狂気 は流れていたようだ。俺の目が涼の移動したルートを見る。あとはそれを追うだけだ。

「涼！ どこだ！」

この辺りに、あいつの気配を強く感じる。もうすぐだ。角を曲がると5体のゾンビが襲い掛かってくる。俺は舌打ちして銃を向けた。

「お前らに構ってる暇は、ない！」

2秒で殲滅。正面に眼を向けると、金属がぶつかる音とそれで生まれた火花が見えた。涼だ。

「涼！」

俺が叫ぶとアイツが振り返った。かなり息が切れてる。普通の状態じゃねーぞ？

「ごめんね、恭君の、言うとおりだったよ……」

彼女と対峙する影、それは果たして恭子だった。

「涼！ 頭下げてろ！」

9mm弾をフルオートで恭子に撃ち込むが、彼女は面倒くさげに軀を捻って回避する。

手に握っているのは二丁の拳銃。先には細身の銃剣が装着されている。涼とぶつけ合っていたのはコレだろう。

得物を一閃すると、ダッシュして同時に鋭い三点射。だが 狂制御 状態において、その攻撃を避ける事は容易い。

射線をギリギリの所まで引きつけて避け、9mmルガーを撃ち込む。

無限の長さを持つ剣として銃と対峙すれば、その斬撃を避ける事は容易い。

「お前、俺達に何の用だ！」

「答える義務も必要もねーよ」

『恭子』は俺と全く同じ声で、冷淡な返答を返す。

「只、お前達の肉体が必要なだけだ」

左手で突き出される銃剣を、腰の動作で回避。懐に入って剣を突き立てようとするが間合いを開かれる。

「俺の肉体が、何の意味を持つっていうんだよ！」

脇を見ると、涼が脇腹を押さえて……クソっ、やっぱり出血してやがる！

「人間のカラダは多くを語るからな。ひはっ、まあサンプルは取れた」

彼女は赤い液体　涼の血が……　小瓶をこちらにかざす。

「後は俺が直接手を下す事もねーか。後片付けは他がやる」

パチン！と指を鳴らす恭子。その音とほぼ同時に、無数と言って良い程のゾンビとナイトウォーカーが現れ、周りを包囲される。

「肉骨片が残っていれば良い。んじゃ、制圧」

踵を返しその場を歩き去る彼女。俺は銃弾を撃ち込むが、射線上にゾンビが重なり盾となる。

「畜生っ！」

「……恭君………」

へたり込んでいた涼が口を開く。出血の為か顔面が白い。

「……このまま………終わりなのか………な………？」

「……なに縁起でも無い事言ってるんだよ」

「サイゴになるなら……恭君に………伝えたい事が………あるの………」

「話は後で聞く……。今は黙ってる、体力使うぞ」

涼は悲痛な表情で首を振る。

「恭君………今じゃなきゃ………わたし………恭君の事………」

ズガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガ！

「足を取りに行ってた。遅れてすまない」

「円周防御陣形！」

「（マーシャ、  
ファーストエイド  
応急手当を頼む）」

マーシャが運んだガンケースを蹴り開けると、一丁のアサルトライフルと大量の予備マガジンを入れたチェストリグ（腰部弾倉入れ）がそこにあつた。

(ドイツ製のHk-33。5・56mmを30発装填可能。作動方式はローラーロッキングバルトシステム。射撃準備として、マガジンをハウジング前面に引っかけつつ……)

「（キョウスケ、思いつきりかましてやれ!）」

「  
「  
「  
Let's  
Roll!  
「  
「  
「



介に驚くが、恐らく彼の話した「力」のなせる業なのだろう。

俺のシグが弾切れを起こす。その場に屈み、満タンのマガジンを取り出して空弾倉をダンプポーチに入れる。

「カバー！」

恭介がこちらの分の敵をしばし相手しているのを横目に、フル装弾のマガジンを叩き込む。ボルト・リリースを押し上げて薬室に弾を送り込むと、ガシャンとボルトの音がした。

「アップ！」

三点バーストで頭を粉碎する。射撃を続けたお陰で銃身が加熱するが、ここで止めるわけにはいかない。

「（エミリオ！ そっちはどうだ！）」

「（百発百中だ！ スコープを覗く必要なんて無いぐらいだぜ！）」  
彼の使うM24狙撃銃は連射性に劣るが、命中精度と弾丸のエネルギーは格段に優れている。弾頭にスチールコアのFMJ（被金属弾頭）を使っているからか、2、3の敵を同時に貫いている。足元には5発装弾の空マガジンがいくつも転がっており、今はボディーマーに直接差し込んだ弾丸を一発つつ装填している。

「カバー！」

恭介が俺の動作を真似てかがみ込むので援護射撃をしてやる。

「半径3m以内に近寄るな！」

恭介は怒りの形相で怪物に弾丸を叩き込む。

「（半分の弾倉を使った！ まだ終わらないのか?!）」

マーシャが傷口に包帯を巻く。傷自体は浅いようだが、これまでの出血のお陰か涼の意識は朦朧とし始めていた。

「（終わったわ！ 退路を開いて!）」

「よし、アップ！ M240を使い！」

装甲車の上面にある銃座が機械音をあげて動くと、異形達をバリバリと薙ぎ倒していく。今、中からアップがコントローラーを使い、テレビゲームのように画面に映るゾンビを射撃しているはずだ。

「（Move!）」

エミリオとマーシャが涼の服をつかんで地面を引きずる。二人は空いている方の手で拳銃を握り、牽制射を放つ。進路と退路にそれぞれ恭介と俺。機関銃で出来た屍の間をフォーマンセルで移動する。

「涼はどうなんだ?!」

「(輸血とはいかなくても輸液が必要ね。早くストライカーに戻らないと)」

その時、マーシャの背中から「バシッ」と乾いた音がした。ひっくり返る彼女。ボディアーマーに被弾したらしい。殴られたような衝撃だろう。

「(何!? 連中も銃を持つの??)」

俺達の目線の先には、大量のゾンビの集団がいた。彼らは今までとは違い、MP5機関短銃を腰だめで構えている。

「(Holy Shit... 走れ!)」

次々に飛んでくる弾丸。何発も防弾プレートに受け、その痛みで片膝をつきたくなるが走る、走る、走る。

「応戦するな! 装甲車まで走れっ!」

涼を引きずったまま、俺達は遮蔽物となる装甲めがけて疾走する。片腕で出鱈目に弾丸をばらまくが、当たったかどうかは分からない。当たった所で戦局は変わらないだろうが。

「(Xナンバー! 彼女を奥に!)」

二人が車内のXナンバーに涼を預け、自らも乗り込む。エミリオが車内から輸液パックを見つけ、針を静脈に刺す。これで当面は安心だ。Xナンバーはウサギの耳を取り外すとピンを抜き、外に投げ捨てる。すぐに濃いピンク色の煙幕が敵の視界を遮った。

「ふたりとも、のって!」

アンプが声を上げた瞬間、俺達はストライカーの車内に身を投げ込んだ。

「出しますよつと!」

逆逆がドライブにギアを入れると、八つのタイヤが動き出す。

「後部を開けて射撃しながら撤退しよう!」

Xナンバーが自分のライフルを取り出すと、レバーアクションで弾を吐き出す。俺達も後部スペースから得物を突き出し、追ってくるゾンビを近寄らせない。

「こっちの援護も頼むよ、高山君！」

C275をフロントに開けた隙間から突き出して前方の敵を運転しながら射殺する逆逆を、恭介がライフルのフルオート射撃でサポートする。

前方、後方そして車載機銃。これだけの火力があるのにも関わらず、敵の数はいっこうに減らない。

「（榴弾を使うわ！）」

マーシャがグレネードランチャーを撃ち込み、十数の敵を一度に粉微塵にするが、まだまだ敵の追撃と射撃は終わらない。そろそろ弾も尽きてくる……

「きじゅう、かわって」

突然、アンプがXナンバーを押しつけて火線に入り、ルガーを構える。

「おい、アンプ！ お前何やってるんだよ！」

運転席から振り向く恭介。

「わたしのちからは、増幅」

彼女は引き金を引く。パンツ！ と・22LR独特の乾いた音がしたような気がしたが、それもつかの間。弾丸のエネルギーは増幅

され、ストライカーの後方直線上200メートルに存在していたモノは、全て消えた……。

さらに運転席に近寄り一発、いや一撃。射線と同軸線にあった異形は、何も残さずに消滅した。

クリアになった視界の、遙か遠くに見える影……

「（恭子だっ！）」

目の良いエミリオがすぐに判別する。彼がスコープを覗くと、薄ら笑いを浮かべた恭子の姿がそこにあった。

既に弾が尽き、拳銃を使っていたエミリオは、M240車載機関銃

の予備弾薬箱から弾を二発抜き取り、自分のライフルに装填する。

「（アンプ、俺の感覚を 増幅 させてくれ）」

「（わかった）」

ブローン（伏せ撃ち）体勢を取り、安定用のバイポッド（二脚）の足を立てる。アンプが隣に伏せて、彼の腕に自分の手を重ねる。

「（距離 1・28 km、風向き北北西、車の揺れのサイクルを把握、気温 15、湿度 20%、自転周期により 0・3 mile 目測修正、ライフリングの磨耗把握、バレルの加熱把握、弾薬のパウダーによる初速不足の為 2 mile 下に調整、偏差 0、スコープのパララクス把握……）」

彼のブルーの目が地球の真理を悟ったかのように澄んだ瞬間、彼はトリガーを真っ直ぐ、ゆっくり引いた。  
重い銃声と、遙か前方で散る血飛沫。

「（1st shot、自標左脚部に命中、損壊。第二射装填）」

ボルトを引き、弾丸を装填して戻し、再び射撃体勢に入る。車内のだれもがこのあり得ない距離でのあり得ない精度を持った狙撃に注目している。逆逆もブレーキをかけ、クルマを停止させていた。

「車体停止。要素から車体の揺れを除外。2秒後に射撃する」

きつちり2秒過ぎた後、バレルから 7・62 mm 口径の銃弾が狙ったその場所まで飛んでいく。再び遠くで上がる悲鳴。

「（2nd shot、自標右脚部に命中、損壊）」

アンプが手を離すと、エミリオはそのままパタリと床に倒れ込む。通常の何倍もの精度で狙撃をしたお陰で精神力が切れたのだろう。アンプも力を使いすぎたのか、エミリオの横で座り込んでいる。

俺はXナンバーの隣に移動し、銃座のモニターカメラをズームして恭子の姿を捉える。

横たわった彼女と、吹き飛ばされた足首。地面に広がる大量の血。通常の間人ならば5分と持たない状況だ。だが涼をあそこまで追い込んだ彼女。この程度で殺されるとは誰も思っていなかった。

「急いで引き返せ、逆逆。恭子を尋問するぞ」

俺がそう言つと、逆逆は「がつてんだあ！」と叫んでストライカーをバックさせた。

奴のところまで、あと10メートル……7メートル……4メートル……。その時だった。

「止まれ！」

恭介が叫んだ。

「どうしたんだ？ 恭介」

俺が尋ねると、彼は恭子を指差して答えた。その手は微かに震えている。

「あいつ……再生してる……」

「何だと？」

見ると、周りに広がった大量の血痕がゆっくりとテープの逆再生のように奴の体の吸い込まれていた。散らばった足首の肉片もパズルのごとく元の場所に収まっていた。

ついには、完全に足が元の形に戻ってしまった。この再生能力は人間じゃない！

「ひはっ、やってくれるじゃねーか」

立ち上がると、前に下がった髪を振り上げて、首に手をやる。ゴキッ、っと音がして奴の首が嵌る。こちらを睨むその眼は、片目だけだが 紅く染まっていた。

「ま、ご覧のとーり、この体は死なない。分かったよな？」

こちらに両手を広げて尊大に説明する。そして口元に残忍な笑みを浮かべて後ろを向いた。常人離れた跳躍力で二階の窓枠に手を掛けて登ると、屋根を駆けていく。その姿は、あっという間に闇の中へ消えた。

「何だっただ、あれは。紅い眼だと？」

俺が呟くと、恭介は無言でこちらを向いた。その双眸は、奴と同じように紅かった。

「お前、その眼は……」

「おい逆逆。俺のほかに インストール 狂制御 ができる奴っていたか？」

「いんや、君だけだ。他にはいない」

彼は、そうか、とだけ呟いて涼のほうを振り返った。その顔には疲労の色が浮かんでいる。

「……ごめん」

それだけ言つと、恭介は崩れ落ちるように倒れた。とつさに俺が腕で支えると、弱弱しく笑った。

「おい、大丈夫か!？」

「悪い、このモードになると消費が激しいんだ……」

逆逆が無言で頷いて、ストライカーを武器倉庫のほうに発進させた。今は回復が最優先だ。

翌日。俺は涼が眠っているベッドの横にあるイスで目を覚ました。

壁も床も純白の医務室。心なしか頭が重い。昨日は無理をしすぎたかな。

「何だつたんだ、あいつ」

その問いに答えるものは居ない。涼は重症ではないものの、今日一日は絶対安静だ。アンプとエミリオは精神疲労が大きいし、アルバートとマーシャは装備の点検をしなくちゃいけない。その上、あの作者共は、栄養剤として出された点滴を見るやいなや「痛い」のイヤーーーーー!!!!!!」とか叫んで居なくなりやがった。俺は

インストゥル 狂制御 の副作用で、頭痛が酷い。たぶん、昼には抜けると思う

んだけどな。

「守れなかった……」

涼の寝顔を見つめながら、自分を責める。アルバートに銃剣術を教わっても、インストゥル 狂制御 をしても、この世界での俺は……こんなにも無力だ。自分の大切な人一人守れない。

と、ドアが開いて誰か入ってきた。片言の日本語でアニソンを歌っている。この声は……

「イキノコリタイト、イキノコリタイト、マダイキテタクナル」  
「グットモーニング、マーシャ」

「（あら、まだ居たの？ キョウスケ）」  
「えっと、イエス」

通訳が居ないから、コミュニケーションが取りにくい。俺が考える様子をしばらく眺めていたマーシャは小さく笑うと、俺の隣に座って膝の上にノートパソコンを置いた。立ち上がった画面にソフトを1つ起動させる。これは、翻訳ソフト？

画面を横から覗き込む俺を一度見て、彼女は何かを入力した。

「ん？ 昨日はしっかり寝た？ これで筆談しようって意味か？」  
パソコンを差し出す彼女に俺が問うと、マーシャは首をかしげた。

「あ、そっか。えっと、一応は、っと」

俺達は交互に文章を打っていく。

「そう、ならいいんだけど。……心配なのね、彼女が」

「俺、守れなかった。コイツと喧嘩して、危険な世界に1人きりにして、その挙句に怪我させた……これじゃ、保護者失格だ」

「保護者？」

「本当に、コイツとは小さな頃からの付き合いでさ。眼を離すと、すぐに転んで、手を切って、頭ぶつけて……いつもどこかしら怪我してたんだ。 فقط」

マーシャは無言で聞いていてくれる。その沈黙がありがたかった。

「こんな大怪我はした事ないんだよ。その上、元の原因がそれを一番気をつけていたはずの俺だったなんて……」

「それは違うと思うわ、キョウスケ」

俺は顔を上げた。彼女は微笑みながらキーを叩く。

「あなたは、スズが1番危険だと判断したから、レストランで「キョウコを信用するな」と言ったんでしょ？ 詳しくは知らないけれど、この子とキョウコは友達だったみたいだし。警戒を解きやすいから、標的になり易いと思った、違うかしら？」

「その通りだよ。よく分かったな」

「だけど、どうしても分からない。何であなたはキョウコを信用すべきじゃないと思ったの？」

「……涼の奴、目は覚まさないかな」

「昼間までは起きないと思うわ。でもなぜ？」

俺は溜息をついて文字を打った。

「恭子は……俺なんだ」

マーシャに、俺が女装したときに涼と鉢合わせして、再会した話をする。スゲー恥ずかしかった。

「なるほどね、言いたくなかった訳だわ」

「頼むから誰にも言わないで……つまりこの世界には、俺が2人存在する事になるんだ」

「生き別れた兄弟って可能性は？」

「無い。俺は一人っ子だから」

「2人のキョウスケ……分からないわね。謎は深まるばかりだわ」

「全くだ。ありがとう、マーシャ」

「べつに、お礼を言われるような事は何もしてないわよ。ただ単に、気になる事を尋ねただけ」

「それでもさ。ところで今何時？」

「10時丁度。食事にしましょうか」

「そっか、俺はもうちょっとここに居るよ」

「分かった。だけど、何か胃に入れておきなさい、いいわね？」

「ああ、ちょっとしたら俺も行くから」

マーシャを見送って、柵にもたれて涼の顔を眺める。っと、なんかめちやくちゃ眠くなってきたな……

「ちよつとだけ、寝るか……」

再び眼を覚ますと、天井のスピーカーから正午を知らせるチャイムが鳴った。

「2時間か……頭痛は、無いな」

ベッドを見ると涼が居なかった。マーシャの話では昼間には眼を覚



ますってことだったから、もしかしたら先に行っただのかもしれない。

「……何だ？ これ」

俺の肩に毛布が掛かっていた。涼が掛けてくれたのか？

「目が覚めたんなら、起こせよな」

医務室を出て上へ登る。目指すは食堂だ。

「おかしいな」

さっきからみんなの気配がしない。食堂のドアの前に来てても音がしないのはどう考えてもおかしい。

「まさか……！」

## 第6話：PENS

「おい！ みんな何処にいるんだ？」

ガンラックの森の中を、二丁拳銃でクリアリングしながら歩く。  
不気味な程に静かだ……

カッ！

「！」

後ろに軍靴の音を感じ、転じて反撃に移ろうとした時にはもう遅かった。

「動くなっ！」

背中突きつけられる銃口。それも二つ。

「……なんだ、高山君じゃないか」

銃を下ろす逆逆とXナンバー。逆逆はTシャツにプレート・キャリアを着けた軽装で、短縮したM4ライフルを装備している。一方Xナンバーはカウボーイ装備から第二次世界大戦のナチス・ドイツ軍装に着替え、ドラムマガジンを装着したMG42機関銃を脇に抱えていた。

「お前等、どこに行つてたんだよ……」

「「ちゅーしゃがこわいつ！」」

「答えになつてねえっ！ そんな事よりも、涼やアルバートが何処にいるか知らないか？」

「何処にいるかは知らないけど……」

Xナンバーは言葉を濁す。

「誰といるかはたぶん知ってる……と、思つ」

「なんだよコレ……」

ホールの中央。そこには薙ぎ倒された棚、銃弾で穴だらけになった壁や天井、そして異形の死体がそこかしこに広がっていた。天井には一箇所、一際大きな穴が開いている。

「ところで逆逆君。これを見てくれ」

Xナンバーは床に落ちた空薬莢の内、一つを拾い上げる。

「こいつを見てどう思う？」

「……すごく………大きいです………」

「5.56mm口径のカートリッジ？」

「あうっ、無視しないでっ………」

「そう。そして、これと、これと、これ」

7.62mm×51の薬莢、40mmグレネードのデカイケース、45口径ピストルカートリッジ、9mmそして.357SIG……

「……もしかして、アルバート達が戦闘に巻き込まれたのか？」

22LRの薬莢が無く、必要以上の破壊が行われていない事を考えると、アンプは安全な場所に隠れているんだろう。死体には……長い刃物で切断した跡は無い。という事は涼も一緒にいる可能性がある。戦闘したのは、アルバート達 *Demoniac Pigeons* のメンバーだけか。

「恐らくはそうだろうねえ。そして何者かが車をビルの外につけていた映像を、監視カメラから入手した。すぐにレンズを破壊されたけど、データは無事だったよ」

そう言つて、どこから取り出したのか、逆逆はテレビとビデオデッキを取り出して、そこにテープをセットした。しばらくして映像が画面に映し出される。部屋の斜め上から撮られていたものだ。

10時30分、皆が食堂に集まっている様子が記録されていた。その15分後、涼が部屋に入ってくる。無理をさせないように、さりげなくエミリオが椅子に座らせていた。軽いんだけど、やっぱりいい人なんだろうな。

そこからは、のどかな風景がずっと続く。異変が起きたのは11時だ。

「この時だ。アルちゃんが何かに気付いた」

Xナンバーの言うとおり、画面の中でアルバートが顔を上げた。皆に何かを伝える。マーシャが涼とアンプに何事かを言うが、涼は首を振って拒否する。しかし、その時にもアイツの手は脇腹 傷口に当てられていた。

「無茶しやがって……」

1人で呟く。アンプが涼の手を取って、引きずるように掃除用具のロッカーに隠れる。その直後

「敵だねえ、どう見ても」

天井を破って、ナイトウォーカーやらゾンビやらが降ってきた。Demonic Pigeonsの皆が発砲する。カメラにノイズが走り、画面が揺れる。敵影が薄くなった瞬間、ロッカーに隠れていた2人が部屋から脱出するのが映った。再び降ってくる異形。その群れにアルバートたちが隠れ……

「どうやら、ここまでのようだね」

映像はそこで終わっていた。監視カメラが力尽きたんだろう。

「何だよ、皆はどこに行っただ？ 涼とアンプは？ どこだよ！？」

逆逆の襟首に掴みかかる。詰め寄る俺に、逆逆は首を振った。その顔は、暗い影を落としている。Xナンバーも同じだった。

「我々にも分からない。しかし、この映像が撮られてから、まだ15分しか経っていない。君なら追えるはずだ。 狂制御 なら」

「こつちも色々探してみるからさ、ではさらばだ。 恭介君」

2人は食堂を出て行った。俺は目を閉じて呟く。

「インストール 狂制御、開始ッ」

俺の双眸が紅く狂気を宿した。

「別々に行動してるとは考えにくい……アイツらの行きそうところ……」

アンプは、無理をさせないレベルで涼の意思を尊重するはずだ。そ

して涼、普通は真っ先に逃げるところだけど……アイツの場合は……  
「まさか！」

敵の死体が転がる道を駆け戻る。医務室に続く廊下に敵影1、背中にでかい角が5本あり、太く鋭い爪が生えた丸太のような腕を振り上げて、こっちに背中を向けている。その向こうに　いた！

「涼ッ！ アンプッ！」

アンプは気絶しているようだ。その小さな体を庇うように涼が両手を広げている。その顔は恐怖と苦痛に歪んでいた。目をぎゅっと瞑っている　間に合ってくれよ！

狭い廊下の壁を蹴り上げ、化物の背中を飛び越える。逆さまの体勢で空中に浮かんだ俺は双銃の狙いを奴の顔面に付けて、引金<sup>トリガー</sup>を引いた。

「うちの身内に手エ出してんじゃねえ！」

その初撃で化物は後退した。しゃがんだ状態で着地し、間髪入れずにその腕を、右の銃剣で斬り付ける。

「大丈夫か！？」

目だけを後ろに遣って尋ねる。涼は恐々目を開けた。大丈夫みただな。

「恭、君……」

「怪我、無いか？」

「うんっ……」

「ならいい。こいつは俺が片付ける。だからここに居ろ、いいな？」

「うんっ……」

「泣くなよ。まだ終わってないんだから」

「うんっ……怪我しないだね……」

お前が言うなよ、俺はそう返して前方に視線を戻す。いつの間にやら、数は10に増えていた。叫び声を上げながら、こっちに走ってくる。後ろは行き止まり。退路は無い。だけど、

「群れてきやがって……化物風情が！」

退却する気も無かった。更に　狂気　を取り込む。強化から狂化へ

昇華させる。

「千切れ飛べ」

駆け出す。左手で背中に吊ったCANNON - HOWL 02を展開、そのままの姿勢で発砲する。咆哮が轟き、異形の山が吹き飛んだ。CANNON - HOWL 02を畳み、両の銃剣を構えて跳ぶ。空中で3体の首と胴体を分けた。着地と同時に、双銃をフルオートで撃つ。6体が崩れ落ちた。

「ラスト1!」

マガジンを取替え、左の銃剣を腹に突き刺して、グリップの下に付いたアタッチメントを捻る。銃口が切っ先と同じ方向を向いた。そのままフルオートで引き金を引く。銃弾と、衝撃で震える刃が2重でダメージを与え、目標は完全に沈黙した。

「これで、全部だっ!」

ドッ! と倒れる化物。どうやら、涼とアンプの首はまだしばらくくっついていられそうだ。

CANNON - HOWL 02に弾丸を装填し、彼女達の元へ駆け寄る。

「この状態は長く持たないから手短に話す。アルバート達を助けに行く。車庫から適当な車を使って彼らの痕跡をそのまま辿る。戦闘になるかもしれないから二人は引っ込んでいろ。いいな」

「でも……」

「涼、俺に掴まれば歩けるだろ。行くぞ」

でも、私も役に立ちたい……

「ソレ、返してくれないかなあ」

Xナンバーが目の中の女、いや男 恭子に愚痴る。奴の両目は、  
紅く揺らめいていた。

「ソレが無いと困るんだよう。どれくらい困るかっていうと、バツ

クアップを取る為にハードディスクを取りだそうとしたら、静電気で新旧どっちのディスクもお釈迦にしちゃった時ぐらい、困るんだよ。ちなみにいゝ実体験です てへっ」

二度の破裂音。Xナンバーが飛び退く。恭子が右腰から銃剣の付いたM9A1拳銃を抜き、発砲したのだ。

「まあまあ。乱暴はよろしきようお。ところでソレ、返してくれないかなあ」

前に出る逆逆。

「ソレが無いと困るんだよう。どれぐらい困るかっていうと、（禁則事項です）中に（放送できません）してたら、誰かがちょうど（見せられないよ！）のタイミングでやってきた時ぐらい、困るんだよ。ちなみにいゝ実体験かどうかはあゝ、御想像にお任せします てへっ」

十三回の破裂音。逆逆が飛び退く。恭子が右手に握った銃剣の付いたM9A1拳銃を全弾、発砲したのだ。

「てめえら……ふざけてんのか!？」

「ふざけじゃないよ？」

まさか、といった顔で二人は振り返る。

「ふざけじゃないよ、ウサギだよっ！ ウサミミ装着、シャキーンっ！ そーれイナバ！ イナバ!」

「……こいつぁ末期だな」

「全くな」

横でエミリオとマーシャが呟いた。ナチス軍人とPMCオペレーターがウサギに扮して踊っている様は、実に奇怪だ……

ここは巨大なビル。元々電気店だったみたいだが、夜の世界で店なんていうチンケなシステムは意味を成さない。

俺達は侵攻を受けた後内臓を食い潰される事も無く、どういいうわけかこのビルに縛り付けられた状態でこのコントにもならない冗談をただ眺めている。命あつての物種というが、涼がコテンパンにされた所を見るに、十中八九なぶり殺すつもりなんだろうな。

「二人のお嬢さんは無事かな？」

「無事……だと良いが。恭介がなんとかしてくれてる事を祈るしかないな」

「で、アイツがわざわざ武器庫まで取りに来たのが、アレか……」

「そんなに重要な物なら、もつとちゃんと管理してよね……死にかけたんだから。にしても、そんなに大事な物なのかしら。あのキョウコが握ってる……」

二本のボールペン。

「急げ！ 急げ急げっ！」

アクセル全開で運転しているキャラバンを飛ばす。本当はストライカーが良かったんだけど、果たして逆逆の物だったらしく車庫には無かった。他の高機動車や装甲車は全部マニュアルで運転方法が分からなかったたので、忘れられたように停めてあったATの日本車を頂戴したというわけだ。

「恭君、道分かるの！？」

「分からないけど、感じるんだっ！」

ブレーキで急減速して角を曲がる。後ろでガシャガシャと音を立てるケースに入った銃器。彼らが捕らわれているのなら、こちらから武器を持って行かなくてはいけない。手近な物をつっ込んだが、彼らはプロだ。使い方がうまいは分かるだろう。

サイドミラーがぶつかってポキッと折れたが、そんな些細な事は気にしてられない。

「みんなの気配と、恭子の気配が道に残ってる！」

頼む、急げっ！ 狂化が切れる前に、仲間にかある前にっ！

「ん……ここは？」

どうやら目を覚ましたらしい、アンプが体を起こした。頭を押さえ、首を振る。

「大丈夫か？ 今、アルバートたちを助けに向かっているんだ」



「……きょうすけ？ 無事なの？」

「ああ。だけど、詳しい話は後だ。今はちょっと集中しなきゃいけない」

俺の狂化はせいぜい10分が限度だ。タイムリミットは、あと1分程度。俺達は今、大通りに差し掛かっていた。もうすぐのはずだ。その時、俺の頭を激痛が走った。そのせいで大きく手元が狂う。

「くそっ！ 掴まれ！」

キャラバンは、ガードレールに激突した。どうやら、もう動かないみたいだ。と同時に、俺の狂化も解除される。体を一気に疲労感が襲った。だけど、休んでいる場合じゃない。

「涼、アルバート達がどこに居るか 把握 できるか？」

涼は頷くと、少しの間目を閉じた。そして、一軒の電気店を指差した。

「たぶん、あそこだと思う。でもどうするの？」

「俺だけで行く。お前らは、どこか安全なところに隠れてろ」

俺がそう言うと、涼は首を横に振った。

「わたしも行く。これ以上護ってもらう訳にはいかないから」

「そんな事言ったってお前、怪我してるだろ」

涼は上着の裾を持ち上げた。露わになった脇腹には、傷跡も残っていない。

「どういうことだ？ だってお前、さっきまで……」

「よく分からないけど、もう塞がってるの。たぶん、この世界の影響じゃないかな。だからわたしも戦える」

そう言うと、キャラバンからグルカナイフを取り出した。俺の言う事を聞く気はないらしい。

「アンプ、お前は？」

アンプは首を傾げると、小さく頷いた。

「だいじょうぶ。目が覚めてから、ちょうしがいいから」

「無理すんな。キツくなったら言えよ？」

「たぶん、いちばん疲れてるのは、きょうすけ」

そうかな、とだけ答える。しかし、彼女の言うとおり俺の体は限界だった。恐らく、あと一回 インストール 狂制御 したら、確実にぶっ倒れるだろうな。

「さて、行こう。きっと連中は最上階だ」

俺達は、そびえ立つ電気屋を見上げて頷いた。

「ねーねー、返してよー。私のニーソックス返してよねっ」

M9 A1バンバンバンッ！ トマトグシャグシャグシャ。

「無理だよXナンバー。新しいの買おうよ。僕、おなか減ったよ」

「いやだいやだいやだーあれじゃなきゃダメなんだよ！ だってあれは……」

「あれは？」

「おいちゃんが昔、小学校の運動会で参加賞に貰った奴なんだぞー」

「な、なんだってー」

「ねえアル」

「どうした、マーシャ」

「あいつらの茶番劇、いつまで見なくちゃいけないのかしらね」

「これが解けるまでってか？ 冗談じゃないぜ」

「て、てめーら……人質とられてるって分かってんのか？ ふざけんのも大概にしるよッ！」

恭子が切れた。声が恭介と全く同じだ。そして、その突っ込み方もやはり、アイツと関係があるんだろうか。

「ワッ怒った怒ったー。怖いよー」

「大丈夫さ、うちの主人公が助けに来てくれるヨン」

「でも、彼は僕達の事が嫌いなんですよ？」

「そこは心配無用。だってあの子は、ツンデレ」

「じゃねーってんだろうがッ！」

爆音と共に、アホ共の横にあった壁が吹っ飛ぶ。恭子が腕で顔を覆

いながら、爆心地へと眼を向けた。その顔が残忍な笑みへと変わる。  
「ひはっ、待ってたぜ」

「ここなら逃げ道はない。さあ、お前の正体も目的も、洗いざらい吐いてもらうぞ」

コマンダーよろしくCANNON-HOWL 02を肩に担いだ恭介が、壁の残骸を跨いで部屋に入ってきた。その後ろに、涼とアンブが続く。

「ほーら、言ったとおりでしょ？ でしょでしょ？」

何故か、逆逆がすごく偉そうだった。すごく腹が立った。

「よし、援護援護っ！」

逆逆とXナンバーが頭に手を伸ばしてウサミミを取り外し、根本にあるピンを引っ抜いて投げる。部屋を満たす煙。

「うあっ！」

恭介達とはつさに腕で防御の姿勢を作るが、恭子は間に合わず視界を遮られる。

「クソっ！ 何しやがるんだっ！」

「涼！ 今のうちに救出を！」

「分かったっ！」

ダッシュでアルバート達の元に駆け寄り、縄を切断していく涼。

「ハッ！ 逃がすかよっ！」

煙を払った恭子が右手を振り下ろす。後ろには多数のMP5を持ったゾンビ兵士。

「ぶっ放せえ！」

拳銃弾が軽快に奏でる死の16ビート。今遠距離での反撃手段を持っているのは恭介と作者陣のみ。時間稼ぎの為に牽制射をルシフェルと十六夜で放つ。

「アルバート！ 車の中に銃がある！ そこまで退却だ！」

「分かった！ MOVE！」

丸腰のアルバート達は涼を先頭に、走って穴から脱出する。

ヴァアアアアアアアアアアアアアアアアン！ ヴァアア  
 アアアアアアアアアアアアアアアアン！  
 XナンバーのMG42『ヒトラーの電気ノコギリ』の音が室内に反響する。

バダダン！  
バダダン！  
バダダダン！

隣で射撃を続ける逆逆。彼の短縮されたM4も余剰ガスがバレルから吹き出して、轟音と火炎をまき散らしている。俺は2人に叫んだ。「ゾンビは頼む！俺はあいつを、恭子を倒す！」

最後の 狂制御。頭を鋭い痛みが襲う。だけど、止って居る暇は無い。全力で駆け出した。銃剣を振り上げる。狙うは首だ。殺すつもりで行く！

「来いよ！ 遊んでやるぜ！」

恭子が左の銃剣で、それを捌いた。体の勢いを下に逸らされる。俺は舌打ちすると、床に手を着いて足を振り上げた。奴の拳銃を跳ね飛ばす。こんな動き、インストール狂制御 中じやないとできない。奴の顔が渋面に変わった。

「お前、誰なんだよ！」

「それは、お前が一番よく知ってるんじゃないの？ ま、分からねーとは思うがな」

着地して、間合いを置く。距離は10歩ほどだ。銃を使えなくしたところで、あいつはまだもう1丁持っている。安心はできない。汗が頬から流れ落ちた。

「お前ら、大丈夫か？」

作者連中を見遣ると、あいつらはゾンビの群れに囲まれていた。背

中合わせに何か言ってる。Xナンバーが口を開いた。

「やれるか？ この数」

「あと1体増えたらヤバいかもな」

「そうか」

そして2人はトリガーを引く。その弾丸は、敵の活動を確実に止めていた。そして逆逆はニヤツと笑う。

「なんだ、お前も戦うのか」

「お前らなあ！ カツコつけてる場合じゃないっての！」

すると2人は、こつちを振り返って文句を垂れた。

「なんだよ、良いとこだったのにい」

「そうだそうだ。君は主人公だから、いいかもしれないけどさ。我々はおくまでモブキャラだからね？ ここで目立っておかないとさ」  
モブだったが目立つなよ！ と内心突っ込みを入れているところに、恭子の声が入った。

「よそ見してる場合じゃないんじゃないの？ お前の相手は、俺だろぅがあっ！」

奴が握っている左の銃剣を、後ろに仰け反って紙一重にかわす。

こいつ、速いけどアルバートほど巧くない。どこかで見たことがある軌道だ……

「インストール 狂制御 にその格好、お前は何なんだよ！」

銃撃を交えながら斬り付ける。恭子の右腿から血が噴き出た。

「おーおー、ひっでーなこりゃ。やってくれるねえ」

「どうせ再生するんだろぅが！」

さらに左腕と首筋。だけど、浅いかっ！ 奴を仕留めるまではいかない。

「制服が血塗れだ。こつちは再生できねーんだぜ？」

「知るか！ お前はここで沈める！」

「できたらいいな。あの作者共はしばらくこつちに来ねーだろ。つーわけで、『止まってる』」

奴の右目が蒼くなっていて、その瞳はまるで、時計の文字盤のよう

に……そこで俺の意識は途絶えた。

恭介が握る両手の銃剣が正確な軌道を描き、恭介の両腕を切断する。血が鮮やかな噴水のように噴き出し、地面に紅い幾何学模様を描く。  
「アッー！」

「それは色々違うよ逆逆っ！でもアレは……」

「『ボールペン』を使ったっ！」

恭介はそのままピツタリと動きを止めている。

「細かい『執筆』は出来ないけど、あの程度なら……第三者にも扱えるのか！？」

「ひはははっ、なかなか使えるじゃねえか。じゃ、いただきます、つと」

「うそ……恭君っ！」

「恭介！畜生がつ！」

アルバートは崩れ落ちる涼をひつつかみ、停めてある車に急ぐ。

「恭君が、恭君がつ！」

「（スズ！今は走って！）」

アンプが前方の敵を一掃するのを確認して、マーシャが叫ぶ。

「鍵を」

エミリオが錯乱状態に陥っている涼からキーを奪い、トランクを開ける。

ケースの中にはナチスドイツのカンプピストル（擲弾発射拳銃）とMP40機関拳銃、旧日本軍の九九式狙撃銃、そしてM1カービン（騎兵銃）が換えの弾薬と共に押し込まれていた。どれも第二次世界大戦で使われた骨董品だ。

「装備を」

マーシャがカンプピストルを腰に提げ、シュマイザーMP40を手にする。エミリオは九九式のボルトを引いて初弾を装填し、俺はM

1カービンにM4銃剣を装着した。使い方は昔習った。大ざっぱだが分かる。

「これで、戦えるっ！」

小さな・30カービン弾を薬室に装填し、へたり込んだ涼を起こす。  
「涼、カレシを助けにいくぞ」

「まずい、高山君がつ！ Xナンバー、他に筆記用具は？」

Xナンバーはポケットに手をつ突っ込む。

「鉛筆ならあるよっ！」

「十分さあ！ 『執筆開始』」

「その時、彼、高山恭介の腕跡の周りに無数の蝙蝠コウモリが姿を現した。傷口の周りに群れる黒い影達。彼らが霧のように去ったあと、恭介の腕は再び拳銃を手にしてあるべき場所に戻った」

「これでっ！」

逆逆が宙に書いた文字を地面に叩きつけるようなモーションを取ると、恭介の腕の周りに蝙蝠が現れ、腕が再生した。

拳銃を手にしていなかったが、全てシナリオ通りだ。

逆逆が手を開くと、そこには灰になった鉛筆があった。

「アチャー、やっぱ平行世界で鉛筆を使うのは難しいなあ。拳銃も『創造』でできなかったや」

「涼ちゃんの傷を治した時は、ボールペンだったからねえ。ボールペンのほうが消えない分、強く刻めるんだろっね」

「うん。じゃ、サインペンだったら、もっと効果が期待できるんだろうか」

「……さあ」

俺が意識を戻すと、ニヤツと笑った恭介が佇んでいた。俺の腕を興味深そうに眺めている。と、今気づいたけど、銃が無い！

「おい逆逆！ 武器は！？」

「腕が精一杯。ゴメン」

「は？ 腕？」

俺が首をかしげていると、恭子が呟いた。

「ふん、『作者』のレベルまで行くと、鉛筆でも『創造』は出来るか……。なるほどな、おもしれえ。もうちょつと見てみたいんだが、どうしたもんか。もう目的は果たしたしな」

そう言つてポケットから小瓶を取り出す。そこには赤い液体が波打っていた。

（俺の……血？ それに、さっきのは穂波の タイムキーパー ……  
…なのか？）

「目的は、何だ？」

「あ？ 目的？ そうだなあ、俺の場合は 解放 とでも言つておこうか。ひははっ」

「解放？」

喋り過ぎた、と恭子が顔をしかめたその時

「FIRE！」

擲弾が穴から飛び込み、爆風と火炎、そして無数の破片が部屋の奥で爆ぜる。直後にバラバラと9mm弾が水撒きのように浴びせられる。

「Move, Move, Move！」

マーシャのGOサインと同時にエミリオがゾンビの頭に7.7mmをぶち込むと、独特のアリサカ・アクションで次弾を薬室に入れる。独特のスコップレイクルに苦戦するが、距離によるセンターを掴んでからは正確な狙撃を披露している。

アルバートはセミオート・カービンの軽快な速射で、敵に銃を構える暇を与えずに制圧していた。

「恭君！ 無事なの！？」

涼が突破口を開く為、両手のグルカナイフを振るい化け物の四肢を切断する。ただ数が多く、こちらまで到達できない。



「どうしたあ？ 頼みの援軍はこつちまで来ないぜえ！ 『止まっ

』」  
「武器をよこせっ！」

逆逆が右腰からグロック19を、Xナンバーが皮製ホルスターからワルサーP38を取り出し、それを俺に思い切り投げる。

「っ！」

両手でキャッチした銃の情報が頭になだれ込む。まずは装弾数の多いグロックで猛攻。相手が回避体勢に移った所でワルサーを撃ち込む。

「畜生、なかなかやるじゃねえかつ」

切札を封じられた恭子は舌打ちをすると、応戦しながらじりじり後退し始めた。残る下僕も残り十数体を数えるのみ。しかも数は減っていく。

「ヤツを逃がすな、お前等っ！」

銃剣を近場の敵に突き立て、止めをさしたアルバートが命令する。同時に火器という火器から銃弾が放たれ、アンデットを一掃して恭子の姿を射線上に露わにする。

「あんなことして、許さないんだから！」

涼がツーハンド・ホルドでナイフを握り、退却しようとする恭子に切りつける。

「お前も、千切れるっ！」

斬撃で腕が飛び、足がもげて血の海が出来上がる。

「チッ……クソがつ！ 邪魔ばかりしやがつて……貴様等！ 次は地獄だぞ！ ひはははははははッ！」

縦に振られた刃が頭を真つ二つにするが、頭蓋骨の中身をぶちまける前に恭子の姿は霧となって消えた。

## 第7話：Is there a safety place？

「消えた……逃げたか」

恭介が呟いて崩れ落ちた。涼が駆け寄ってその体を支える。

「大丈夫？ 狂制御インストールの使いすぎだよ」

「……みたいだな。おい逆逆、さっき、俺の腕がどうか言っ  
てなかったか？」

そういえば、恭介の両腕は切り落とされたはずだ。それが、今はぴたりくっついて、正常に動いている。如何にこの世界が異常だとはいえ、これはどういう事なんだ？

「ああ、それね。作者としての システム権限と云えばいいかな。説明するのが大変なんだけど……」

逆逆が、考え込むように腕を組んで目を閉じる。そして、

「zzzz……」

「死ね」

「ぎゃあ痛い！ 私の肘関節はそっちに曲がらないぞ！」

みし、みし、みし、ぽきつ。

「普通の湿布を貼ろうとしたら、かえって腰が痛くなった。アツ！」

Xナンバーがそんな事をほざいた。

「分かった、分かった！ ちゃんと説明するから！ お願いだから、私が縄抜けに困らない体に改造するのは止めてくれ！ 全く、右肘が逆に曲がつてるじゃないか。どうすればいいんだよ、これ」

「スタートボタンでサバイバルビューアを開いて、メニューからキ  
ュアーを選択して……」

Xナンバーが説明するのを聞かず、逆逆は空のマガジンを口に咥えて、左手で右の手首を掴むと、強引に元に戻した。え？ 今度は歯が痛い？ 知るか。

「さて、話を戻すけど。さっき、恭子が高山君の両腕を斬り飛ばした。こう、スッパーンってね」

そう言いながら、腕を手刀で斬るモーションを取る。恭介が顔をしかめた。

「さっき、俺が止まってたときか……」

「我々作者が、君たちが元いた世界を創り出しているのは知ってるよね。その 創造 と言う概念を形にしたのが、この世界で我々が使う、筆記用具なんだ。それを使うことで、さっきみたいに高山君の腕を復活させたり、桐臣君の傷を塞いだりしたわけよ。えへへ、偉い？」

「ちよつと待て。だったら、この世界自体を消すように書けば、消えるんじゃないのか？」

俺がそう尋ねると、逆逆とXナンバーは分かってない、と言うように首を横に振った。

「あのねえアルバート君。君は消しゴムで字を消せるからって、それによつて生じた消しカスが無かったことに出来るのかい？ そういうことなんだ。出来たらやってるっちゅうねん」

それもそうか。にしても、ム力つくなこいつら。死ねばいいのに。

「（それにしても不可解なのは、アイツ等、血液を取ってたわよね？）」

「（ああ。オレもきつちり搾り取られたぜ）」

エミリオが腕に残るナイフ痕を見せる。

「けつえきで、なにかできるの？」

Xナンバーはアンプの質問に腕を組む。

「そうだね……平清盛は墨に自分の血を混ぜてお経を書いたっていうからね。写経でもするんじゃない？」

「宗教的な倫理観はこれっぽっちも持ってなさそうだったじゃないか……」

「……あ」

逆逆がポン、と手を打つ。

「成分検索だ」

「成分検索？」

周りの目が逆逆に集中する。

「人間の血つてのは、海に近いって言われてるだろ？」

確かに、そんな話を聞いた事がある。生命が海から誕生した証拠だ。後ろでナチ野郎が「この海何？　なんて海？」とか抜かしてやがるが誰も聞いちゃいない。あとで銃床撲殺するか。弾も剣も勿体ないし。

「海つてのは世界の根元。だからその海の成分を調べれば、世界の構成成分が分かる」

「ほしいのら〜！　……え？　おいちゃんの番？　あつ、みんな止めてっ、ストック真下にして銃を振り上げないでっ！　ええと、ケホン。作者によって作る世界つてのはビミョーに異なる訳。ファンタジーやSFを書く人なんかを見てもらえば分かるけど。だから海水や血液を判定して、世界の違いを数値化する。ただ、それをやる為にわざわざ武装した人間を襲う必要なんて無いと思うんだけどな」

「特別に俺達が必要だった、って事か？」  
「そう考えるのが妥当だね。それじゃ、ぼくちはそろそろおいとまするよっ」

Xナンバーは拳銃の換え弾倉を3つ恭介に押しつけると、傍らに停めてある　デオボーイに跨る。ロデオ　ーイにはMG用の銃座が追加されていた……

「金曜ロードショーで『ダイ・ハード』をやるんだ。録画機器が家に無いから、リアルタイムで見なきゃいけないんでね。それじゃ、Auf Wiedersehen！」

Xナンバーはアクセルとエロゲの主題歌が入ったカセットのスイッチを入れると、ビルの三階から窓を突き破って

ガッシャーン！

バコーン！　グシャグシャッ！　バーン！

ロデオーイ大爆発！ 奴は真っ黒になって徒歩で帰って行った。  
「悪いな高山君。アイツをストライカーで拾っていかなきゃ。移動手段は確保してるよね？ んじゃ、バイナラー」

逆逆もグロックのマガジンを3つ恭介に押しつけ、さっきXナンバーが突っ切った窓から飛び降りた。

スタッ

「わーお、華麗なる着地っ」

（炎の真上）

「……………」

「うあっちちちちちちちちちっ！」

もう一人の作者は明るく道を照らしながら、奇妙なステップを踏んで車庫の方まで消えていった。

「（……とにかく、今オレ達が所持している装備品をカウントしてみようぜ。オレはアリサカ・ライフルが一丁だけだ。弾は銃に残ってる分を合わせて12発つてとこだ）」

エミリオがライフルを突き出す。全員の火力は不足している。早めに把握した方が良い。

「（MP40サブマシンガンとカンピピストル用の榴弾が2つ。短機関銃の方はまだ余裕があるわ）」

「（M1カービンだ。弾は撃ちまくれるほど無い）」

俺は、最後の手段だがな、と銃剣を指で弾く。

「アルバートからもらったけんじゅうだけ。のこり5発。だけど、増幅 が使えるのは2発がげんかい」

「わたしは刃物だから弾切れは無いけど……グルカナイフが2本だよ」

「俺の装備はP38とグロック19だ。弾はさつき補給を受けた」

「恭君、敵の銃は使えない？」

「そうだな。まだ使える奴があるかもしれない！」

恭介はゾンビの残骸に向かうと、しゃがみ込んで銃を探し始めた。しばらくして戻ってくる。

「ダットサイトが付いたMP7が1丁。マガジンは今付いてる奴しかないな。これだけか……他のはしっかり破壊されてやがる」

おそらく、俺たちが使うのを恐れた恭介が予め、そういう指示を出していたんだろう。抜かりの無いことだ。にしても、恭介の使う銃は何で毎回H & a m p ; Kばかりなんだ？ 作者の趣味か？

「（参ったな、ここから武器庫まで帰れるか？）」

「（戻ったところで、天井に大穴が開いてるわよ。他の場所を探しましょう）」

マーシャの言うとおり、俺たちの本拠地は敵に知られている。このまま戻っても「襲ってください」と言っているようなものだ。

「（つても、どこか休めるところは必要だぜ？ 特にオレみたいな狙撃手は翌日のコンディションに大きな差が出る）」

エミリオの言うことも一理ある。確かに 狂制御 <sup>インストール</sup> とやらを使う恭介や、先ほどまで負傷していた涼、 増幅 を扱うアンプにとって、これは死活問題だろう。それに、彼らは戦えると言ってもまだ子供だ。俺が腕を組んだところで、アンプが口を開く。

「もしかして、マーシャの武器庫がさくしゃによって作られたとしたら、きょうすけの家もあるかもしれない。ここからも近いし、もうすぐ夜明けだから」

「俺の家じゃなくて俺たちの家だろ。 まあ、その可能性はあるな。だけど、人様を呼べるほど片付いてるかどうか……」

「大丈夫だ。俺だって一人暮らしだからな、散らかってるのは慣れてるさ」

しかし、恭介は首を振る。どういうことだ？

「いやね、リビングはいいんだけどさ……涼の部屋が酷いんだよなあ」

その言葉に涼が抗議した。

「失礼な！ちゃんと片付いてるよ！」

「そうなのか？ アンプ」

その横にいるアンプが、恭介の問いに首を横に振る。

「ううん。ひとこと言うなら、混沌<sup>カオス</sup>」

「そこまでじゃないよ！ せいぜいハリケーン通過あと ってレベルだよ！」

それも酷いんじゃないか？

「(っていうか、部屋は足りるのかよ。ニホンの家は狭いつて有名なだからな)」

「ううん、エミリオの言うとおりだな。男女で分けなきゃいけないし……」

恭介が考え込む。しばらくして部屋割りを決めたらしい。

「親父の部屋と俺の部屋にアルバートとエミリオ。涼の部屋に、女性陣。狭いかもしれないけど、我慢してくれ。俺はリビングのソファで寝るから」

そんなわけで、俺たちは高山家に移動することになった。

カチャッ。

玄関ドアをゆっくり開け、各員と共に部屋をクリアリングしていく。足音も立てずにスルスルと暗闇を移動。一切ムダな動きが無い。

「OK. All Cleared」

「Roger that」

「（もう少しかかると思ったんだがな。やっぱり小さいんだな、日本の家ってのは）」

照明のスイッチを探り当て、エミリオが漏らす。

「（こっちは邪魔する立場よ。エミリオ、文句言わないで。アルバートのアパートより広いじゃない。客として紳士になりなさいよね）」

「（悪かったな、そちらの英国紳士とは似ても似つかない粗野な男で）」

「（なにもそこまでは言っていないわよ。只、ホストの環境に贅沢を言うのはマナーとしては……）」

「（ほら。長年の伝統に沿わない人間は野蛮人ってんだろ、ブリテン。どうせ俺はライフルを肩に、山奥で狩猟やってる方がマシだってんだろ?）」

「（ちよつと、何よその言い方！ 私は貴方の人間性や性格を否定した訳じゃなくって……）」

「（二人とも、黙ってる（Shit up）。そんな言い争いをする前に、恭介達に謝罪だ）」

俺はヒートアップする二人を引き離す。

「（謝罪? ……まあ、すまないとは思ってるが……）」

「（ちがう、そうじゃない。その……ローマに入ったらローマ人のように振る舞え、という諺はどこにでもあつてだな。その……、俺もUSでの暮らしが長くて忘れてたつてもあるんだが……）」

照明を付ける。

「（……日本じゃ、大抵玄関で靴を脱ぐんだ）」

「（……ああ……）」

泥のついた廊下と、玄関で苦笑いを浮かべる家の主達が、俺達の明るくなった視界に映った。

「悪いな、客人に掃除させるなんて」

「泥を拭くついでみたいな物だ。気にするな」



現在、俺達は大掃除を敢行していた。各小部屋は元の世界そのままだったが、リビングや廊下は埃だらけで、蜘蛛の巣まで張っていた。どうやらここまでは綺麗に復元できなかったらしく、廊下の壁には『ゴメンネ　これが精一杯なのっ　By作者Striker's』と空薬莢が何かで刻まれていた。ストライカーズって何だよ……

「（キッチンと風呂は掃除したぜ。冷蔵庫の中身は新品だ。飢え死にはしねえだろ）」

雑巾を片手にしたエミリオは冷蔵庫のドアを開けて中身を確認する。マーシャにマナー云々を説教されていたのは効いていないみたいだ。アンプは両手に持った殺虫スプレーでゴキブリを追い回している。ちょこまかとお互い忙しそうだ。

「そつえば、マーシャと涼はどこだ？」

「ああ。まだ涼の部屋で掃除してるはずだ」

作者陣はあくまで『忠実に』部屋を再現しておいたらしい。ドアを開ける音と共にモノが崩れ、二人の悲鳴が聞こえたのはついさっきの事だ。

「……ちよつと、二人の様子を見てくるよ」

「（あ、ちよつと待つてくれ恭介。気になる事がある）」

エミリオが俺を呼び止める。

「（お前、アンプとスズと、3人でここに生活してるんだよね？）」

「？　それがどうかしたか？」

通訳を待つ間、エミリオの顔がニヤリと崩れた。

「（他には、誰も、ここにいないんだよね？）」

「ああ。色々事情があつてな。親とは同居してないんだ」

エミリオの表情が面白くて堪らないと言わんばかりの笑顔に変わる。俺の肩を抱き、十数年ぶりに再会した友人に語りかけるような高いテンションで会話を続ける。

「（スズちゃん、いい女だよな、ハハッ！　そうは思わないか？）」

「何が言いたいんだ？」

「（そりゃあ、ねえ。一つ屋根の下、年頃の男女がする事といやあ、

一つしか」

そこから先は聞けなかった。いや、そう言うと言弊があるか？ 通訳がゆつくりと立ち上がり俺の脇からいなくなつたお陰で、内容が理解できなかったのが正しい。アルバートはエミリオの頭をスリッパでぶつ叩いたが、スリッパとは思えない轟音を立て、エミリオの意識はどこかに吹き飛んだ。

「（アイツは本当にそういう事しか考えられないのか……？ これって人選ミスなのか？ ミスだったのか？）」

アルバートは頭を抱えてブツブツと英語で独り言を呟いている。エミリオは一体何を話してたんだろう？ 気になるけど、聞いたら負けなんだろうな、きつと。

「」

スズの部屋はヒドい散らかりようだった。実家の使用人が見たら目を回すところだろう。

「（マーシャさん、それは左奥の棚に運んでおいて下さい）」

日本語は今一つ理解出来ないが、ボディランゲージと抑揚で意味はなんとなく掴める。英語と日本語で会話を交わすこともあるぐら이다。意思疎通は言語が関わらずとも、それなりに取れる事を初めて実感した。

（ん？ 何かしら、この箱）

私は正方形の目立たない、小さな紙箱を見つける。箱の上には黒字で何か書いてある。

（レイが使っていたPCに、確かこれに似た漢字があつたかしら……確か、「？」でOpen？ だから、「開」も同じ意味かしら？）私は指示に従って、箱のフタを持ち上げる。

作者からの情報が何かかと思つたけれど、それは全く違つた。

「キョウスケの写真？」

「（うあああああつ、何見てるんですかマーシャさんっ！）」

これはいけない。どうやら「Do Not Open」の意味だつ

たようだ。周りの文字が否定語だったのだろう。

「まあ、女の子には誰でもヒミツはあるし……」

「（……うとうう。みんなには秘密にしてくださいね？）」

真つ赤な顔でスズが俯く。こんなに分かり易い性格してるのに、当の想い人が一向に気付かないって言うのは問題があるんじゃないかしら。もはや犯罪レベルの鈍さね。と、溜息を吐いて掃除に戻る。

（つて、今度の箱は何かしら）

「（ひやわわわわわわっ！ 返してくださいっ！）」

それは、ゲームの箱だった。おそらくスズの年齢では買うことが出来ないはずの。

うーん、なんて言えばいいのかしら？ やたらと露出の多い女の子が笑顔でポーズをとっているイラストが描かれていて、その隅にはピンクの背景に両手をクロスさせたシルエットとR-18の文字が踊っていた。キョウスケじゃないけれど、いいのかしら？ これで「いつも、こういうのをやっているの？」

「（誰にも知られてなかったのに……。）え、えーと……. どんと、すぴーく、えにしんぐ、あばうとぎとっ！」

どうやら、「それについては何も言うな」と言うことらしい。私は苦笑いで頷いた。

「さてと、一応は俺の部屋も見ておくか。涼と違って掃除はしてるんだけどな」

一人呟いて部屋に向かう。その途中で涼の悲鳴が2回聞こえたんだけど…… 大丈夫なのか？

（俺のラノベコレクションは無事なんだろうか。もし、あれに万が一のことがあれば……）

俺の部屋の本棚には、無数のライトノベルが収まっている。可能な限り初版をそろえ、巻数も完璧。毎週毎週きちんと埃を払い、痛まないように、乾燥しつつも直射日光が当たらない場所に保管してある。

（まあ、何もないとは思っただけだね）

扉を開ける。暗い部屋の中に居たのは、2体のゾンビ。そして、その手には

「魔剣シリーズ3巻と12巻！ てめえら！ 汚い手で触れるんじゃないー！」

床を見れば、お気に入りだった数々のタイトルが紙屑同然に引き裂かれていた。

「あれの9巻と13巻……その4巻と6巻……てめえが今踏んだ1巻なんかなあ……今じゃ何処の本屋を探しても見つからねえんだぞ……！」

どうやら、この落とし前は高くつきそうだなッ！  
連中の頭を両手で掴むと、そのまま駆け出す。二階の、道路に面したベランダのガラスを突き破り、地面に叩き付けた。しかし、手は離さずに近くにあったブロック塀に投げ飛ばす。2体が重なって地面に落ちる前に、俺は右足を振り上げていた。いっばいに伸ばして、その鳩尾に突き刺す。その衝撃で、ブロック塀にヒビが入った。それでも俺の気は収まらない。足を引き抜くと、回し蹴りで5メートル程ふっ飛ばし、銃を取り出して銃床を頭に叩きつける。

「おらっ！ おらっ！ よくも！ よくも俺のコレクションを！」  
なんか、ゾンビの顔面がとんでもない事になってるような気もするけど、止めない。と、音を聞きつけたアルバートたちが玄関から飛び出してきた。

「恭介！ 大丈夫か？」

安心させようと、俺は振り返ると笑顔で手を上げた。

「ああ、安心してくれ。ちょっと“害虫”を“駆除”してただけだから」

しかし、アルバートはかなり驚いた表情で固まっている。

「ん？ どうしたんだ？」

「（おいおい、これじゃあどっちがバケモノか分からねえよ……）」  
後ろに居たエミリオが俺を指差して言った。改めて自分の服をよく見ると、返り血で真っ赤に染まっていた。

「あはは、やりすぎたみたいだ」

こ、怖い……………

幾多の銃火をかくぐつてきた特殊部隊員は、目の前の日本人高校生の前に真っ青になっていたとさ。

「で？ 奴らはこのまま奇襲をかけるつもりなんだね？」

「そう。見張りの連中が話してた。言語を操るって事は、化け物のランクが上がってるって事かな？ 格好も顔以外は人間みたいだったし」

私、逆逆三里は困惑していた。ついさっきまで、カーナビの方向に従って家に向かっていた筈だった。ただ、道案内の矢印を見て隣の相棒が、

「そつえば、塾でベクトルの試験があつて、全然出来なくてさあ」

と言った所から記憶が完全に無くなっている。Xナンバー曰く、「この世に在る全ての絶望をハンドルにぶつけたような運転」だったらしい。そして気が付くと、なんと敵アジト車庫の真ん前まで潜入を果たしてしまつたらしいのだ。ベクトル、恐るべし。

で、今はストライカーを路上駐車し、光学迷彩を施してある。Eye have you!……………と言ったところでXナンバーぐらいしか分からないよな。

現在は基地内に潜入。手頃な物陰に隠れて敵歩哨から情報を漏れ聞いている所だ。

「逆逆、敵歩哨がどっちゃり車庫への道を通つてる。武装はMP5機関短銃とMP7機関短銃。時々UMPを持つてるのもある。腰にはグロックを差してて、グレネードを入れたポーチも見える。装備はウッドランド調のシティカモの戦闘服。チェストリグをボディー

「アーマーの上から装着して、ケブラーのヘルメットを被ってる」

「Xナンバーが革製の背囊から双眼鏡を取り出し、詳細に装備を偵察する。」

「どうする？ 今なら制圧出来ない人数じゃないけど」

「MG42のファイディングカバーをポンと叩くXナンバー。」

「こんなメタル アミたいなシチュエーションで戦闘なんかしたら、こつちが絶対不利だね。向ここの動向を探ってみるのが一番じゃない？」

「私はXナンバーの手から双眼鏡をひったくり「ああつ、これナチの実物双眼鏡なんだか」兵士達を観察する。比較的広いスペースに整列する敵兵。格好だけは人と変わらないが、その顔には猛禽のような目と鉤のあるクチバシが付いている。人外だ。」

「大隊長殿の挨拶である、気をつけ！」

「リーダー格と思われるワシ頭が号令を掛けると、ざわついていた化け物が急に静かになる。そして壇上に上がるのは……」

「やはり恭子か……」

「よく聞け屑共。前回生み出したクズ共より、マシな働きをしろ。攻撃目標は、恭介、アルバート達が滞在している家だ。血液を検査した結果、特定作者が創造する分子の構造原子が割り出せた。センサーを使って住宅地をスキャンさせた所、作者が造ったと思われる家が発見された。アジトになっている可能性が高いから、そこをブツ潰せ」

「おいおい、アル達、ヤヴァインじゃないの？ ってかそっちのキヤラが暴走してるんだから、どっにかしてよ逆逆君」

「Xナンバーが耳打ちで不平を垂れる。」

「そんな事言ったってさあ……私だって知らないよ、まさか恭子君が出てくると思わなかったし」

「そうは言ってもどうにかしないとイケないよなあ、と私は天井を仰いだ。このままでは彼らの世界は滅茶苦茶になってしまう。一発当

てないと……。

「ねえXナンバー。あいつらの持つてる情報、全部違うものに変えてしまうのはどうだろうか。家の住所を変えちゃうとかさ」

「うーん、それがいいかも。てーかそれがベストだね」

そうと決まれば行動開始。とつととコンピュータの数値を改ざんして　　って、アレ？　恭子の演説が止まってる？

「だが、ブツ潰す前に、ここにいる害虫を2匹駆除しなくちゃいけないみてーだなア」

「おいおい。害虫扱いは酷いねえ、どうも」

Xナンバーが銃を構えて立ち上がる。やれやれ、バレちゃったかあ……。ゲームだったら赤いビックリマークが頭上に輝くところなんだけどねえ。

「どうやら、やるしかないみたいだ。疲れてるのに……」

濁流のように雪崩込む化物。迎え撃つしかなさそうだ。

恭介の豹変からしばらく経って、高山家。俺達はそれぞれ割り振られた部屋で休んでいた。1階から恭介の声が響く。

「おーい、メシできたぞー……ってこらアンプ！　つまみ食いすんなって！　涼！　どさくさ紛れて俺の肉となるな！」

「食事時からにぎやかだな」

「あら？　私達が一緒に食事をする時も、にぎやかじゃない？」

俺後ろで階段を下るマーシャ。確かに賑やかだが……

「何を言っているんですかエミリオ！　これからは人民元の時代だっというのに、報酬をわざわざドルで受け取るなんて！」

「ったく、やかましいなレイ。この国の自販機が全部、人民元でコーラが買えるようになりや考えてやるよ」

またいつもの言い争いが始まった……。今日の組み合わせはエミリオとレイか。このペアが夕食時に討論をする確率は……。34%って所

か。最近上昇気味だな。

「そういう小金の話をしているんじゃないです！ 資本主義による経済成長の停滞によって、USDとユーロは下落していますよ。そんな時に預金までドルにすれば、共産主義による人民元換算レートは大幅にドルに不利になります！」

「へえ、で、それ何処のニュースサイトからの引用だ？」

「しゅ、週間人民通信です！」

いや、それ、思いつきり自国寄り改竄入ってるだろ……

「程々にしときなさいよ」

マーシャは意にも介さぬ様子でスープをよそっている。完全に小さな兄弟のケンカを横目にする育児放棄気味の母親の目をしていた。実際、このメンツ間での言い争いじゃあ、銃を、『撃つ』所までエスカレートする事はないしな。俺達はプロだ。滅多なことで武力は公使しない。ただ、その直前まであつというまに行くのが嘆かわしいが……

「俺が給金の全てをUSDで受け取るのは、俺がアメリカに住んでるからだ。当然、他の国に行く時はその国の金を持って行くさ。で、お前は俺の財布の中身をハゲジジイの紙切れにとつかえさせて、一体何の特があるっていうんだ？」

「言いましたね……毛沢東同志をハゲ呼ばわりですか……！」

「言ったさ。それも何十万の反乱分子の首をすっ飛ばした最上級のクソ垂れ野郎だ！ 俺はナチが嫌いだが、時代錯誤のアカも嫌いだね、コミュニスト！」

「へえ、じゃあそのクソ垂れコミュニストのトラップに毎回背中を任せてるエミリオは、クソまみれのワイヤー付き指向性地雷を背中にくっつけた資本主義の犬って訳ですねっ！」

「ほう……口が立つようになったじゃないかアカのギーク！ そのお高くとまった鼻をふきとばしてやらあ！」

「上等だラテン野郎（Greaser）！ 星（red star）が刻まれた5・8mmの味、思い知らさせてやる！」



二丁の拳銃がファストドロウ（早抜き）され、照準線が一本に重なる。今のはエミリオの方が0・05秒ほど速かったなと頭の隅で考えつつ、二人の間に座っているクロトーにアイコンタクトを送る。彼は素早く両手を突き出し、それぞれのトリガー後部に指を突っ込み、引き金を無力化した。

「……食事の場で……クソだのラテンだの垂れ流すな……自分  
のブツを……気軽に抜くな……」

「……わあったよクロトー。……悪いな、レイ。個人思想はこの国じゃ自由だ」

「……気にしてませんよ。私が自分の意見を押し通したのが元です  
し」

二人は互い拳銃の銃把を、シャンパンのグラスのようにカツンとぶつけてホルスターに戻す。これで当分はナカナオリだ。

「さて、メシの前に祈れ。日頃のドンパチに白目むいてる神様じゃなく、自分の命を守る鉛弾にな」

「……どうしたの？ アル？」

「いや、『賑やかな食事風景』を思い出したら涙が出てきた」  
「そう……？」

元の世界に戻ったら、何とかしないと。俺はそう固く誓うのだった。

## 第8話：Can't leave from your gun

テーブルの上に並んだ空の皿を重ねて持つと、俺は流しに向かった。洗い物はさっさと片付けるに限る。

「にしても、これからどうすればいいんだろ」

誰に言うでもなく1人呟く。スーツの男を捜すにしても手掛かりは無いし、恭子を倒すにも火力が足りない。マーシャの武器庫も封じられたしな。八方ふさがりって感じだ。

「何か手伝うことあるか？」

声に振り向くとアルバートだった。客に手伝ってもらうわけにはいかない、そう答えて断る。いや、断ろうとしたというのが正しい。なぜなら、

「おい！ 恭介！ しつかりしろ！」

口を開く前に、俺の体が床に倒れたからだ。

恭君が倒れた。確かに 狂制御 はかなり使っていたし、戦闘に次ぐ戦闘だったけど、やっぱり消耗が激しすぎる。いつもそうだ、彼は肝心なことをわたしに教えてくれない。自分の体が限界を超えてるときくらい、頼ってほしかった。……たしかに、ちょっと頼りないかもしれないけど。

「すず、大丈夫？」

アンプがわたしを見上げて尋ねた。精一杯の笑顔で答える。

「うん、大丈夫。大丈夫だから……」

わたしが心配したってどうなることじゃない。それは分かっているけど、そう簡単に自分の感情はコントロールできないのです。ちなみに恭君はリビングのソファに横になっている。そろそろ額のタオルを換えよう、そう思ってわたしは立ち上がった。

「（いつも、こうなるのか？ なんだっけ、あの 狂制御 って奴だ）」

エミリオさんの言葉をアルバートさんに通訳してもらって、わたしは首を振る。

「いつもはこんなふうにはならないんです。せいぜい頭痛が酷くなるくらい。でも今日は連続で使ったからかな。こんなことに」

そこまで言って俯く。いつも、この世界に来てからずっと思っていたことを思わず口に出した。

「やっぱり、わたしがいないほうが恭君にとってはいいのかもしれないです。ずっと守ってもらってばかりで、足を引っ張ることしかしてない。ううん、この世界に来てからの話じゃない。元の世界にいた時だって恭君はわたしにつきつきりで、化物と戦うようになったそもその原因だってわたしがちゃんと事情を説明しなかったからで……やっぱりわたしがいたら、」

「それは違う」

アンプが首を振った。小さい、でも確かな声で続ける。

「このまえ、きょうすけとすずがけんかしたとき。すずが飛び出して、きょうすけはずっと心配してた。わたしが「きょうこが居ない」って教えたとき、一番動揺したのがきょうすけで、一番早く動いたのもきょうすけ」

「（ああ、気がついたらキョウスケの奴はキミを探しに走ってたぜ。それは、心の底から心配していたからだろうよ）」

エミリオさんが腕を組んで頷く。見れば、マーシャさんもアルバートさんも頷いていた。

「こいつには君が必要だ。居ないほうがいいなんて思ってるのを知ったら、たぶん恭介は本気で怒るぞ」

みんなの言葉が、心にすっと入ってくる。俯いたまま、だけど少し涙目になって言った。

「……ありがとう、みんな」

その日の夜明け。恭君のそばにいたわたしが少し目を閉じていると、恭君が目を覚ましたのか声を掛けてきた。

「……あれ、涼？」

「起きた？ 大丈夫？」

恭君は少し頭を振って頷く。

「ああ、大丈夫だよ。　　ずっと看ててくれたのか？」

「あ、うん」

彼は少し微笑むとわたしの頭に手を置いた。

「ありがとな。もう大丈夫だから、心配すんな」

ゆつくりソファから起き上がると、ベランダに向かって歩いていく。わたしもそのあとを追った。

「夜、明けちゃったな」

東の空が白んでいる。太陽が昇り、新しい一日が始まろうとしていた。

「うん、そだね」

しばらくその様を2人で眺めていると、恭君が唐突に口を開く。

「……今度は、護るから」

「ふえ？」

急に言われたから思わず訊きかえす。彼はもう一度言った。

「今度は絶対に護る。怪我なんかさせない、恭子の奴には指一本触れさせないから。心配すんな、必ず無事に元の世界に戻してやるよ」  
わたしは首を横に振った。

「それは違うよ。……一緒に、が抜けてる。恭君が怪我したってダメなのです」

恭君は一瞬ぼかんとして、少し笑う。

「そっか、そうだよな。うん、お前の言うとおりだ」

恭子さんの名を騙る何か。スーツの人にこの世界のこと。分からないことだらけだけど、今はこのときを大事にしたい。心からそう思った。

「（それじゃあ、お休みだな）」

「（ああ。一時間したら交代だからな）」

部屋へと消えていくアルの背中。　　たく、なんでオレが見張り役を

…… 休息を取りたいって言ったのはオレじゃねえかよ……

薄暗いお陰でこのオンボロスコープのレティクルも見えやしない。

それに闇から急襲をかけるなら必然的に今、接近して電撃戦をかけるに決まってる。ボルトアクションじゃ勝ち目なしだ。

「（アレはエミリオが悪い）」

ぼそりと隣にいるチッコいのが呟く。

「（…………… ありや事故だ）」

便所に行こうとして、開けたドアが浴室。そしてその中にはハダカの女。ってベタな展開すぎるぜ。ラブコメと違う所といえば、眼球が映像を脳に送る前に、その擲弾手<sup>オナノコ</sup>が強烈なヒジを見舞って、男の意識と少しばかりの脳細胞を消し去った事だな。

「（とにかく、1時間の辛抱。そしたら眠れる）」

ふわぁ、と欠伸。コイツも疲れてるんだろ。

「（幼少期の夜更かしは体に毒だつてのにな…… オレがガキの時は、朝日が上ったら起きて、日が沈んだら眠ってたぜ）」

「（原始的ね）」

「（オヤジとオフクロがくたばったお陰で、ずっと山でジジイと狩猟生活してたんだ。その時の経験が、コイツにフィードバックされてるって訳さ）」

担いだライフルを指で示す。

「（なんだかんだで楽しかったぜ？ あの老いぼれも大戦中は狙撃手だったんだ。引退してから山に籠もっちまってな。二人でライフル担いで山の中かけずり回ってたんだよ。初めてグリズリーを狩った時は感動したね…… あの皮や肉は、命の熱を帯びてた。あの時、オレは自然に『教えられた』気がするね。聖書100冊の価値がある体験だった。学校にも少しだけ行ったが、教師の垂れる講釈よりも、鹿でも狩ってた方がよっぽど有意義だったと今でも思ってる

お前は、恭介の所に来る前は何をしてたんだ？）」

ふと気になったので聞いてみる。どうみても血縁の人間には見えな  
いし、ホームステイをする年齢でもない。チッコいのは少し遠い目

になつて答えた。

「（私は、ロシアにあつたとある研究施設で実験体にされていた）  
おいしい、予想以上にヘビイじゃねーかよ……」

「（狭苦しい研究所に詰め込まれて、物心ついた時から外の世界を知らなかった。あなたとは逆、私は無機質な檻の中で育つてきたの。唯一の自然といえば、高い塀の中で更に高い空と雲だけだった）」

「（実験つて、何をしたんだ……？）」

「（私の力は知っているでしょう？ アレを使って更に大きな結果を取り出そうというのが目的だった。来る日も来る日も体力と氣力を搾り取られていく中で、私は決心した）」

オレは何も言えなかった。こんなにチツコいのがそんな過酷な日々を送ってきたなんて想像つかない。チツコいのは続ける。

「塀（の外、この隔絶された世界から脱走すること。それが私の目的になった。今思えば、笑つてしまふほど無計画。外に出た後のことなんて考えちゃいなかった。いいえ、考えられなかった。そんな事にまで思いを巡らせたら、諦めてしまひそうで、せつかくの決意がほどけてしまひそうで……だから、私は外に出ることだけを考えた）」

そこまで言つて、一旦言葉を切つた。大切な記憶を取り出すように目を閉じる。

「（あの日のことはよく覚えてる。真つ白い雪が空から降つてきて、凍りつきそうなほど寒い夜。この力と運だけで研究所を抜け出した私は警備兵の追跡を振り切ろうと必死に走つた。だけど裸足に、手術のときに着るような服一枚で逃げるには限界があつて、最後には雪の中に体を埋めてしまった。その時思つたの。「神様、もしこれを見て何もしないのなら、あなたは偽者だ」つて。そうしたら、」

「（そうしたら？ どうなつたんだよ）」

「（一人のお人好しが手を差し伸べてくれた。彼は、私に微笑みかけて、こう言つた。「どうやら、助けが必要みたいだね」つて。警備兵を巧く巻いた彼は振り返つて私に手を伸ばした。見ず知らずの

こんな子供を匿うなんて、この人は何を考えているのだろう、そう  
思って尋ねた。「どうして、私を助けたの?」。そうしたら、彼は  
こう答えたの、「だって、見捨てる理由が無いじゃないか」。その  
人が恭介の父親で、彼と恭介の母親が違う国に転勤することになっ  
たから私は日本に来た、そういう事。私はあの2人に引き取られて  
いたから」

「……………」

おい、なんだよ、何だよこのおんもい空気! 会話が续かん、これ  
ほど死んだ空気は生涯で3回あるかないか。エミリオ「プレシアー  
ドかなりのピンチ! オレが内心冷や汗だらだらなのを知ってか知  
らずか、チッコいのはしっかりした口調で言う。

「(日本に来てからも、きょうすけとすずはとても優しくった。だ  
から、あの二人を傷つける人は許さない。絶対に守る)」

決意に満ちたその表情にオレは少しだけ見入って、その頭に手を載  
せた。

「(そうか。ま、協力くらいはしてやるよ)」

結構良いこと言ったなあ、オレ。そんな感想を心の中で呟いている  
と、

「(そこに手を載せていいのは、きょうすけとししよーだけ)」  
ぱっ、と払いのけられた。可愛くねえなあ、ったく。

「で、僕達は今ここ、恭介&アルバートの潜伏現場行きトラックに  
乗ってまーす!」

(わーっ! ヒューヒュー!)

「なんとっ! 今回、特別ゲストとして、かの有名な恭子さんに来  
て頂いちゃってまーす!」

(おおおおっ!)

「では、恭子さん、どうぞおっ!」

(パチパチパチパチパチ!)

「テメエ、何だその司会と効果音はっ! いい加減にしろっ!」

そう言うところ、恭子はおいちゃんの大事な大事なラジカセ、ソニーのCFD-E500TVを、「宴会盛り上げBGM集 vol.2」共々9mm弾でプチ抜いた。

「あああああ、エカチエリーナ2世になんて事をおおっ！」

「ソレ名前付いてたの！？ しかもロシア皇帝の名前！？ 高貴じやん！ ラジカセの癖に！」

「確かにね、彼女は、このCDラジカセは、低音をきっちりと再現出来ない、ベースやチェロの音を聞くには使えない娘だったかもしれないよ。でもね、彼女はきっちり、クリアーに語学学習用のCDを流してくれたんだ。

そう。僕がエカチエリーナ1世を使って中国語のレッスンCDを流していた時の事だ。1世は……彼女は努力したと思う。だけど、所詮はドキにて900円で買った代物。僕が中国語の4つの発音が聞き取れず、イラツとしてつい手を上げると……彼女は……不燃ゴミに」

「自分がモノに当たって壊したってだけの体験を、こうまで仰々しく語るヤツは初めてみたぜ……」

「それ以来、僕は彼女を悼む為、中国語から手を引いた」

「早い話が諦めたんだ！？ 1世関係なく、自分の力量不足だったんだな！」

「そしてヤダ電気で出会った彼女……2世だった。オーディオコーナーにポツンと置かれていた彼女の銀の、流れるようなボディ。その口から紡ぎ出される、メリハリのついたヴァイオリンの音。僕は一目惚れしてしまった。僕には……僕には1世を、この世界から失わせてしまったという過去があったのに！」

僕は心の底では罪悪感を抱きながらだったが、彼女を精一杯愛した。彼女もまた、それに応えてくれた。彼女の歌う歌は高音域が強調された弾むようなものだったし、発音するロシア語は明瞭で、僕の脳をとろけさせた……」

「キモっ！ ラジカセ買っただけの話なのに、なんかキモっ！」





「マジでえ！？ もうそんな時間！？ いいやつほつ！ ネットダ  
イビング！ ほら、逆逆も一緒にチェックしようよ、きつと管  
理人さんが、夏コミコレクションの最後を放出してる所だよ」  
すりよってくるXナンバー。端から見れば変態だが（堂々正面から  
見ても変態ではある）、きつちりと縛られた両手を恭子の死角に。  
即ち二人の体の後ろにもってきていた。

「どうする？ DLしちゃう？？」（そのまま脱出行動に入るか  
？）

「ダウンロードパスワードが無いでしょうが。しばらく探してみな  
よ」（武器が無い。様子を見てからだ）

互いが他愛もない会話を装い、暗号で情報を交換する。

「貴様等あ！ 自分たちの立場分かってんのかあ！」

恭子の怒鳴り声と同時に、カチン、と錠が外れた。

「これで、二つの世界が解析される……」

血液の入った試験管が、青白い光を受けて遠心分離器にかけられて  
いる。

「苦労して狩り場を用意しただけの事はあるな……。逆逆の世界か  
ら一つ、取り逃がしているのが惜しいが、二つ分で十分だろう」

その研究室のような部屋には、あちこちにピーカーやフラスコやピ  
ペット等のガラス器具が整然と並んでいる。そこだけを見れば、大  
学が製薬会社の研究所だが、ある一点だけが異様だった。

壁紙が、清潔さを象徴する白ではなく、紺と赤の二色で塗り分けら  
れていた。

「さて、狩りは猟犬に任せるとして、私は二つ三つ、実験をせねば」  
赤いランプの光に照らし出された男は、白衣では無く、スーツ姿だ  
った。

「まずは……遺伝情報を取り出して模造クローンでも創ってみるとしうか」

「……………」

俺は恭介の部屋で眠ることなく座っていた。って言うか、なぜか眠れない。まあ、なぜかって聞かれると理由は大体分かるんだが。

「落ち着かない……何なんだこの本たちは！」

横を見遣れば本人曰く“コレクシヨン”の表紙たちがこちらを向いている。それはどれもこれも登場人物たちがこちらを見ているように見えた。たしか……ライトノベルとか言うジャンルだったはずだ。レイが見ていたアニメの原作が日本語版しかないと思痴っていたっけな。そんなことを考えていると、ドアノブが捻られてゆつくりと扉が開いた。その持ち主である恭介が顔を出す。俺と目が合うと、意外そうに言った。

「あれ、アルバートまだ寝てなかったのか」

「ああ、寝たかったんだが横から見られているような気配がしてな。

アレのせいだ」

そう言うて本の群れを指差すと彼は苦笑しながら、そこから大量に抜き出していく。今から読むのだろうか？

「おいおい、早く寝ろよ。明日に支障が出るだろ」

しかし彼は大丈夫、と更に抜き出していく。すでに彼の手には本が塔のように積み上がっていた。何が大丈夫なんだ？ どう考えても1ヶ月は楽しめそうな量だぞ？

「この分量なら1時間くらいで読み終わるから、そんなに遅くはないよ」

「1時間？ だってそれ、何冊あると思ってる？」

「え？ そんなに大した量じゃないと思うんだけど……まあいいや。それに、今、ソファには涼が寝てるし。寝るに寝れないんだ」

そう言うて苦笑。やっぱり、こいつ……

「お前……涼のことが好きなんだな？」

そう言うつと、彼はあれほど大切にしていた本たちをドサドサ床に落とした。けたたましい音と共にギギーっときこちない動きで首を捻

る。

「なつなななななな何を……」

涼程ではないが、こいつも相当分かりやすい。真っ赤な顔で否定する。

「そんなんじゃない！ そんなじゃないんだって！ 別に俺はあいつのことが好きってんじゃないくて！ ただの幼馴染！ そう、幼馴染なだけなんだって！」

そこで一呼吸置くと、わざわざ分かりやすいように1語1語切って言った。

「俺は！ 涼の事なんか！ なんと！ 思つて！ 無いから！」

「あゝそうか、よく分かったよ。じゃ、後ろの彼女にも言つてやれ」俺がニヤニヤしながら指した先。かなーりのショックを受けた顔の涼を、本日2度目のギギーで恭介が振り返る。

「え……す、ず……」

「……………（グスッ）」

「うわあ！ バカ！ 泣くなって！ 俺が泣かしたみたいじゃんか！」

おそらく、本の落下音で目が覚めたんだろう。姿が見えないカレシを探しに部屋に来たらこの有様か。笑えるな。

「だって……だってだって……うわあ……」

「泣くな！ ああもう！ アンプもマーシャもみんな来ちゃっただよ！ どうしろって言うんだよ！」

騒ぎが聞こえたのか、みんなが集まってくる。しかし、誰も彼も恭介の言葉を聞いていたのか、若干苦笑いだった。

「（いやあ、キョウスケよ。オンナノコを泣かしちまったとき、どうすればいいのか教えてやろうか？）」

エミリオの言葉に、彼は縋<sup>すが</sup>るようにコクコクと頷いた。しょうがねーな、とエミリオが隣にいたアンプにスペイン語でそれを伝え、恭介に耳打ちさせる。つてずいぶん長い内容だな。

「……………（1つによ1つによ）だって」

「なあアンプ。エミリオ、本当にそう言ったのか？」

「うん、スペインから日本に訳すと、そのことばになるはず」  
彼が溜息を吐いて額を押さえている間に、涼を慰めていたマーシャがエミリオに尋ねる。

「（なんて言ったのよ。まさか、変なこと吹き込んでないでしょうね）」

「（おいおい、オレがそんな男に見えるか？ 曲がりにも恋愛経験は豊富なんだぜ？）」

「（見えるから言ってるんでしょうが。大体貴方が慣れてるのは、こういう“一途な恋愛”じゃなくて“ナンパな恋愛”でしょ）」

「（いやいや、まさか。オレだってそこら辺はちゃんと心得ているさ。あいつがちゃんと言えれば万事解決なはずだぜ。そしてオレにこう言うはずだ。『ありがとございます。師匠と呼ばせてください』ってな）」

「（いや、それはない）」

マーシャとエミリオが英語で会話を交わしているのを下から涼が「……う？ う？」と涙目で見上げていた。と、恭介が意を決した様子で彼女に向き直る。

「すっ！ すすす涼っ！」

「グスっ……な、なに……」

「いいいいいっ今からっ！ ききききっ、キスするぞっ！」

はあ？

周囲の空気が固まる。見れば恭介の目が緊張のあまり渦巻き模様になっていた。マーシャが無言でエミリオの首を締め上げている。

「（やっぱりアンタはろくな事言わないのね。もういいわ、ここで一思いに、）」

「（ま、待てマーシャ！ オレはあれをやれとは言ってない！ あれに至るまでの過程を伝えただけでっ！ 確かに行けるまで行けと

は言っただけども！」

「（より性質たちが悪いわ！ 問答無用っ！）」

「（止めないかマーシャ！ なあエミリオ）」

窮地に陥いり、目が潤んでいるエミリオに助け船を出す。

「（おお、流石は隊長！ やっぱリアルはオレの味方」（退職金はこんなもんでいいか？）」

電卓を差し出す。まあ、これだけあれば後々の生活に困る事はないだろう。足りないならどつかのPMCにでも拾ってもらえばいいか。

「（そんなにいらない子なの？ ボクそんなにいらない子なの？）」

しばらく地面にor z こんな感じで打ちひしがれてたエミリオだが、頭をブンブンと振ると、正気に戻ったように恭介に食ってかかる。

「（恭介。そいつあヒドいぜ。どれぐらいヒドいかつてえと、油でギトギトになってるフィツシュ・アンド・チップスと同じぐらい」（何か言った？）「ヒドいぜ」

「へ……？ そ、そうか？」

「（『今からキスするぞ』といきなり言われて、『まあ嬉しい、じやあ遠慮なくどうぞ』なんて言ってくる女はまずいないぞ。こういうのは、こう、さりげなく、唐突かつ雰囲気を持ってだな）」

クイツ（エミリオがマーシャの顎を引き寄せる音）

ガブッ（マーシャがエミリオの鼻に噛みつく音）

ドスッ！（俺がエミリオの土手っ腹に蹴りを入れる音）

ガシャーン！（吹き飛ばされたエミリオがガラスをぶち破って外に放り出される音）

「（うつつ、オレはただ、悩める少年の為に手本を見せてやろうとただけなのにいぎやあああつ！ 落ちる落ちるっ！）」

窓枠に片手でぶら下がっているエミリオ。そしてその手を容赦なく踏みつけるマーシャ。おお、怖い怖い。

「（どうせ二階だから 死 には しないわよ。残念だけど。ほら、遠慮なく落ちなこの好色男っ！）」

「れんあいつて、むずかしい」

「その結論に達するまでに要するデータがあまりに不純じゃないか？」

ギヤーギヤーと外で喚く攻防戦と、真っ赤になって俯く発端の二人。こっぴどいのは苦手だ。さっさと寝よう。

「（おい、アル。戦闘準備だ）」

いつの間にか、窓枠の騒ぎが止んでいる。そちらに飛んでいくと、エミリオが（宙ぶりの状態で）スコップを覗いていた。

「（その低倍スコップで見えるのか？）」

俺は何も確認できない。マーシャに引き上げられるエミリオに聞く。「（生憎視力だけは良いんでね。兵員輸送車の列だ。まっすぐこっちに向かってる）」

「ボケつとするな恭介！ 涼！ 朝のエクササイズの時間だぞ！」

「え？ あ、ああ」

「ふあ、はいっ！」

米兵が60年前に命を預けたM1カービン。30口径のFMJ弾を20発納めたマガジンを装着し、鞘から抜いたM1905銃剣を着剣装置に装着する。

「（籠城戦の後、状況に応じて屋外戦闘に入る。弾丸は節約して、常に味方の火線を避けてつつ密集しろ）」

指示を出し、来るべき戦闘に備える。しばらく休んでいられると思っただが、それもかなわないか……

「（弾倉を叩き込め！ 遊底を引いて撃針を起こし、閉鎖させて弾薬を薬室に送り込め！ 照門と照星を奴らのど真ん中に合わせて、

指紋の中心を引金にあてがい、そのまま引き絞れ！ 思い切り遊んでやろうぜ！」  
さあ、戦闘開始だ。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8971h/>

---

Parallel another...-the encounter of TWO WORLD

2010年10月12日04時12分発行